
独立行政法人 国立健康・栄養研究所

研究報告

第59号(平成22年度)

独立行政法人
国立健康・栄養研究所

序

当研究所は、1920（大正9）年9月に内務省所管の栄養研究所（初代所長 佐伯矩）として創設され、2010（平成22）年には90周年を迎えました。1938（昭和13）年には厚生省所管の研究所となり、1948年（昭和23）年に「国立栄養研究所」として、現在の新宿区戸山に移設されています。1989年（平成元）年には、身体活動・運動に関する研究部門を加え、「国立健康・栄養研究所」となり、2001（平成13）年には独立行政法人化されています。

この2010（平成22）年度に第2期中期計画が終了いたしました。『生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究』、『日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究』、『「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究』を3重点調査項目として位置づけ、外部評価委員会をはじめ、厚生労働省省内仕分け、厚生労働省独立行政法人評価委員会、総務省政策評価・独立行政法人評価委員会などの評価や助言を受けつつ、調査・研究業務を遂行してまいりました。

当研究所では、一貫して食生活と栄養、食品、身体活動・運動をキーワードとして、国民の健康づくり、生活習慣病の予防、食の安全・安心、QOLの向上に関する調査・研究を実施しています。研究者のアクティビティは高く、一人当たりの競争的研究資金獲得額および論文引用回数は、国立研究機関中で上位にあります。WHO-CCは、正式申請中ですが、2011（平成23）年1月より、当研究所は、Global Environmental Monitoring System（GEMS）のFood Institutionに認定されています。

また、当研究所は、厚生労働省をはじめ、内閣府、消費者庁など、国の公共施策をサポートする業務を実施しています。毎年、厚生労働省とともに国民健康・栄養調査を行い、食事・栄養摂取状況、身体活動・運動状況、生活習慣（喫煙・飲酒などを含む）状況を調べ、その動向と推移を報告しています。日本人の食事摂取基準および運動基準の策定に活かされ、学校、病院、各種施設の給食・調理の基準となり、食品添加物や農薬などの摂取量・曝露量の把握といった食品の安全性評価に活用され、「健康日本21」、「特定健康診査・特定保健指導」の根拠となり、国民の健康状態を計るものさしにもなっています。また、健康食品の許可試験・収去試験を行い、国民および専門職に対して、食の有効性と安全性に関する情報を発信しております。

ここにその活動内容を独立行政法人国立健康・栄養研究所研究報告書第59号（平成22年度）にまとめました。ご高覧のうえ、ご意見、ご助言等をいただければ幸いです。

皆様には、今後とも一層のご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成23年3月31日

独立行政法人 国立健康・栄養研究所
理事長 徳 留 信 寛

目 次

I 研究所概要

1. 平成 22 年度研究・業務の概況	5
2. 評価委員会	5
3. 研究所主催・共催セミナー	6
4. 意見交換会	6
5. 研究倫理審査委員会	7
6. 栄養情報担当者（NR）の養成	8
7. 連携大学院	8
8. 他の研究機関等との連携	8

II 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	9
2. 年度計画	9
3. 進捗状況（成果）	10

健康増進プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	12
2. 年度計画	13
3. 進捗状況（成果）	13

臨床栄養プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	15
2. 年度計画	15
3. 進捗状況（成果）	16

栄養教育プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	18
2. 年度計画	18
3. 進捗状況（成果）	19

基礎栄養プログラム

1. プログラム（プロジェクトの概要）	20
2. 年度計画	20
3. 進捗状況（成果）	20

食品保健機能プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	21
2. 年度計画	21
3. 進捗状況（成果）	22

情報センター

1. センター／プロジェクトの概要	23
2. 年度計画	23
3. 進捗状況（成果）	24

国際産学連携センター

1. センター／プロジェクトの概要	25
2. 年度計画	25
3. 進捗状況（成果）	26

Ⅲ 研究成果等の公表

1. 業績目録	
著書	28
原著論文	28
総説	34
解説等	36
研究報告書	38
国際学会等	40
国内学会等	42
2. 公的資金による研究	
厚生労働科学研究費補助金	49
文部科学研究費補助金	50
その他の公的研究費	51
3. 民間企業等の共同研究等	51
4. 研究所外での講義、講演等	52
5. 政府関係機関審議会、委員会等	58
6. 関連学術団体等への貢献	59
7. 併任、非常勤講師等	59
8. 国際貢献	60
9. 知的財産権等	60

Ⅳ 資 料

1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標	61
2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画	64
3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画	73
4. 予算	84
5. 所内研究セミナー	85
6. 食品分析リスト	88
7. 海外出張	89
8. 人事異動	93
9. 特別研究員	95
10. 名誉所員	96
11. 客員研究員	97
12. 協力研究員	100

I 研 究 所 概 要

1. 平成 22 年度研究・業務の概況

当研究所は、平成 13(2001)年度より独立行政法人となり、平成 22 年度は第 2 期中期計画(～平成 22 年度)の最終年度に当たる。人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関として、「特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たす。厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担う」(中期目標)ことが、当研究所に求められる役割である。

こうした目標を達成するために、三つの重点調査研究業務を行っている。

- ①生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- ②日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究
- ③「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

その他にも、外部の競争的研究資金を獲得して、関連領域の基礎から応用、開発型の研究を行っている。また、今後の新たな研究展開につながるような萌芽的研究を若手研究者を中心に活発に行っている。(下表)

(表) 外部研究費の獲得状況 (単位: 千円)

		競争的研究費		受託研究費			計
		補助金	助成金	受託契約	共同契約	寄付金	
		(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額
公的機関	主任	(28) 194,221		(6) 11,461	(-) -	(-) -	(34) 205,682
	分担	(16) 18,780					(16) 18,780
民間企業等	主任		(4) 4,825	(5) 6,253	(8) 24,930	(-) -	(17) 36,008
	分担						
計		(44) 213,001	(4) 4,825	(11) 17,714	(8) 24,930	(-) -	(67) 260,470

個々の研究内容及び研究成果の発表については、各プログラム/センターからの報告及び、研究成果の発表を参照されたい。研究成果の公表実績の一部を下表にまとめた。

(表) 研究成果の公表実績

原著論文		学会発表(招待講演)		学会発表(一般演題)	
英文	和文	国際学会	国内学会	国際学会	国内学会
76	19	7	14	25	112

また、研究の成果を社会に還元し、国民の健康づくりに役立てていただけるよう、情報センター(情報部

門)及び国際産学連携センター(対外部門)、並びに事務部業務課が中心となって、ホームページ等を介した情報提供、NR 事業、セミナー(一般及び専門家向け)、研究所の公開(オープンハウス)等を行った。NR 事業としては、平成 22 年 6 月には第 7 回 NR 認定試験を行い、累計で 4,574 名の NR を世に送り出すとともに、今年度から受験資格を附与した 6 年制薬学部在学生の薬学共用試験合格の資格で受験した者(大学卒業の届出により資格を附与する者)として別に、114 名が合格している。

有資格者へのフォローアップ研修を行った。専門家を対象としたセミナーとしては、都道府県等の健康・栄養調査手法の標準化を目指すセミナーを主催した。なお、平成 22 年に厚生労働省が行った省内事業仕分けの結果を踏まえ、第三者機関に事業の移管をするための検討を開始した。

若手研究者の育成という観点からは、お茶の水女子大学、東京農業大学、女子栄養大学、早稲田大学、名古屋市立大学及び福岡女子大学との連携大学院や、全国の実験栄養士を養成する大学・大学院での特別講義等を通じて、ネットワーク型の人材育成を着実に進めてきた。また、国際協力についてもアジア諸国との間で栄養調査、栄養改善及び健康づくり等に関する共同研究の中心的な役割を果たすよう取り組んでいる。まず、平成 22 年 4 月に WHO 研究協力センターの正式申請を行うとともに、平成 23 年 1 月には WHO の GEMS/Food プログラム協力機関の正式認定を受け、食品安全分野の国際貢献として食品摂取量に関するデータを提出した。また、「IUNS(国際栄養科学連合)栄養学リーダーシップ育成国際ワークショップ」を日本学術会議 IUNS 分科会および日本栄養改善学会、日本栄養・食料学会と共同で開催し(平成 22 年 9 月 7 日～9 日)、さらに当ワークショップと連携して、第 4 回アジア栄養ネットワークシンポジウム「アジアにおける栄養教育: 学校給食制度の取り組みについて」を開催した。

2. 評価委員会

(1) 外部評価委員会

下記の 9 名の委員で構成される国立健康・栄養研究所外部評価委員会については、平成 23 年 3 月 28 日(月)に平成 22 年度業務実績事後評価及び第 3 期中期計画事前評価を行った。

【委員】

五十嵐脩	(神奈川工科大学教授)(委員長)
伊藤 裕	(慶應義塾大学医学部教授)
逢坂哲彌	(早稲田大学理工学術院教授)
加藤則子	(国立保健医療科学院生涯保健部長)
川島由起子	(聖マリアンナ医科大学病院栄養部長)

下光輝一 (東京医科大学主任教授)
 林 清 ((独)農業・食品産業技術総合研究機構
 食品総合研究所長)
 豊田正武 (実践女子大学教授)
 三保谷智子 (女子栄養大学出版部書籍編集長)

(2) 内部評価委員会

下記により構成される国立健康・栄養研究所内部研究業務評価委員会については、平成 22 年 11 月 11 日(木)にプログラム／センター中間報告会を、平成 23 年 3 月 28 日(月)には平成 22 年度事後評価を行った。

【委員】

芝池伸彰 (理事)
 長谷川敏彦 (監事)
 阿部重一 (研究企画評価主幹)
 森田明美 (栄養疫学プログラムリーダー)
 田畑 泉 (健康増進プログラムリーダー)
 門脇 孝 (臨床栄養プログラムリーダー)
 江崎 治 (基礎栄養プログラムリーダー)
 饗場直美 (栄養教育プログラムリーダー)
 石見佳子 (食品保健機能プログラムリーダー)
 梅垣敬三 (情報センター長)
 西 信雄 (国際産学センター長)

3. 研究所主催・共催セミナー

(1) 当研究所主催第 12 回一般公開セミナー

主 題:生活習慣病を予防する食生活・身体活動一見
 つけよう、あなたに合った健康づくりー
 日 時: 平成 23 年 2 月 26 日(土)
 場 所: よみうりホール(東京都千代田区)
 主 催: 独立行政法人国立健康・栄養研究所
 後 援: 厚生労働省、文部科学省、消費者庁、東京都、
 千代田区、国立保健医療科学院、独立行政法人
 国立国際医療研究センター、独立行政法人
 国民生活センター、社団法人日本医師会、社
 団法人日本フィットネス協会、社団法人日本
 栄養士会、財団法人健康・体力づくり事業財
 団、特定非営利法人日本健康運動指導士会
 賛助企業: アサヒ飲料株式会社、大塚製薬株式会社、オ
 ムロンヘルスケア株式会社、花王株式会社、
 キッコーマン株式会社、協和発酵バイオ株式
 会社、キリンホールディングス株式会社、第
 一出版株式会社、株式会社ニチレイフーズ、
 日清オイリオグループ株式会社、日本サブリ
 メント株式会社、日本製粉株式会社、ネスレ
 日本株式会社、富士産業株式会社、不二製油
 株式会社、フジッコ株式会社、株式会社ヤク
 ルト本社、株式会社山田養蜂場、株式会社リ
 コム、株式会社ルネサンス

プログラム:

○研究所の活動報告(阿部重一)
 (基調講演)高血圧予防は減塩、節酒、肥満予防から
 (国立大学法人滋賀医科大学生活習慣病予防センター
 特任教授 上島弘嗣)
 (講演 1)国民健康・栄養調査の最近の結果から

(西 信雄)
 (講演 2)健康づくりの基礎となる栄養-食事摂取基準-
 (森田明美)
 (講演 3)身体活動と栄養をエネルギーから考える
 (高田和子)

コーディネーター:宮地元彦

(2) 当研究所主催専門家向けセミナー

ア 調査実務編

日時・場所:平成 22 年 9 月 22 日(水)(東京都)
 平成 22 年 10 月 18 日(月)(大阪府)

プログラム:

(講義 1)「身体状況調査等における標準化と精度管
 理」
 (講義 2)「栄養摂取状況調査における標準化と精度管
 理」
 (講義 3)「適切な食品番号の選択、調理による変化や
 栄養素が強化されている食品の考え方につ
 いて」

(演習 1) 模擬調査票を使った食事調査聞き取りのポ
 イント

(情報提供・演習 2) 名簿や調査票記入及び確認のポ
 イント

(質疑応答・意見交換)

イ 「食事しらべ」編

日時・場所:平成 22 年 10 月 5 日(火) 午前・午後の
 2 回開催(東京都)
 平成 22 年 10 月 19 日(火) 午前・午後
 の 2 回開催(大阪府)

プログラム:

(講 義)「食事しらべ 2010」の使用法に関する講義、演習

4. 意見交換会

【関係団体】

(1) 独立行政法人国立がん研究センター

日時:平成 22 年 9 月 14 日(火)

議題:食事摂取基準の概要とその活用
 生活習慣病予防のための運動・身体活動
 健康食品の安全性・有効性情報

(2) 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食 品総合研究所

日時:平成 22 年 12 月 16 日(木)

議題:平成 2 2 年度国立健康・栄養研究所の動向に

について

平成 22 年度食品総合研究所の動向について

(3) 独立行政法人国民生活センター

日時：平成 23 年 2 月 1 日（火）

議題：国立健康・栄養研究所における健康食品関連
の対応状況等について

国民生活センターにおける健康食品関連の対
応状況等について

(4) 社団法人日本栄養士会

日時：平成 23 年 2 月 11 日（金）

議題：平成 23 年度以降の事業協力、連携に関して
データベース運営の連携に関して
国際的活動の連携に関して
食事摂取基準データベースの活用と、今後の
研修のあり方

(5) 国立保健医療科学院

日時：平成 23 年 2 月 21 日（月）

議題：1 年間の動向について
国際協力の状況について

(6) 財団法人健康・体力づくり事業財団

日時：平成 23 年 2 月 23 日（水）

議題：財団法人健康・体力づくり事業財団の最近の
動向について
独立行政法人国立健康・栄養研究所の最近の
動向について

【行政機関】

(1) 消費者庁食品表示課

日時：平成 23 年 1 月 19 日（水）

議題：業務協力の内容について
特別用途食品について
収去試験の分析業務の取扱い及び許可試験の
検査料の改定について
栄養表示基準における栄養成分の分析方法の
改訂について

(2) 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室

日時：平成 23 年 3 月 8 日（火）

議題：次期中期目標、中期計画について
健康づくりのための運動基準について
日本人の食事摂取基準について
国民健康・栄養調査について

(3) 厚生労働省医薬食品局食品安全部新開発食品保健
対策室

日時：平成 23 年 3 月 8 日（火）

議題：次期中期目標・中期計画について

食品に関する研究業務及び情報収集の公開状
況について

WHO GEMS/Food プログラムについて

5. 研究倫理審査委員会

研究倫理審査委員会の各部会において、以下の課題
について、研究計画の倫理的妥当性等を審査した。

(1) ヒトゲノム・遺伝子解析研究部会

・申請なし

(2) 実験動物研究部会

- ・機能性食品成分の併用摂取による有効性および健康
影響に及ぼす評価研究
- ・視床下部腹内側核破壊動物の肥満病態に関する研究
- ・熱産生における脳および消化管ペプチドの役割
- ・睡眠とエネルギー代謝調節の脳機構の研究
- ・男性骨粗鬆症に対する大豆イソフラボン代謝産物の
作用とその作用機序の解明
- ・アスリート女性の骨粗鬆症予防のための栄養生理学
的研究
- ・筋萎縮発症機序の解明
- ・運動による生活習慣病予防機序の解明
- ・肝臓における脂質代謝・合成の制御による生活習慣
病予防法の開発
- ・特定栄養素欠乏による脳血管障害への影響およびそ
のメカニズムの解明
- ・健康食品素材に関する有効性と安全性の検討
- ・血糖値を調節する新規転写因子の機能解析
- ・肝臓、視床下部とマクロファージにおけるインスリ
ン受容体基質（Irs）の役割について
- ・血管内皮細胞と膵β細胞における IRS-2 の役割につ
いて

(3) 疫学研究部会

- ・学校における食育の取り組みと家庭への波及効果に
ついての研究
- ・ヒューマンカロリーメーターを用いた食事誘発性体熱
産生の評価
- ・肥満を伴う糖尿病患者に於ける低炭水化物、又は低
脂肪食後のエネルギー基質選択性に関する研究
- ・新型テレビゲームの健康増進効果に関する介入研究
- ・大学生アスリートへの栄養・食教育のための食行動、
セルフエフィカシーの評価指標の検討
- ・医療現場における医療従事者の健康食品に対する意
識調査
- ・パプアニューギニアの都市と農村における母子の体
格と食事摂取状況の関連
- ・要支援サービス利用者の 2 年間の家事動作遂行能力
の追跡調査
- ・船内供食における栄養管理に関する研究（2）
- ・在宅高齢者の食機能に合わせた食サービス提供のた
めの食機能実態調査
- ・3 次元加速度計による自転車活動の評価法の開発
- ・高齢者施設での摂食・嚥下障害の判断とミールラウ

ンズでの評価に関する研究

- ・生体インピーダンス法 (BIA) を用いた皮下脂肪厚測定に関する精度評価試験
- ・成人期の健康状態に及ぼす出生時体重と体力の影響

【ヒトゲノム・遺伝子解析研究部会委員名簿】

芝池伸彰 (理事：委員長)
 稲葉 裕 (実践女子大学教授)
 後藤田貴也 (東京大学医学部附属病院助教授)
 辻 誠治 (日本女子大学附属豊明小学校教諭)
 阿部重一 (研究企画評価主幹)
 森田明美 (栄養疫学プログラムリーダー)
 門脇 孝 (臨床栄養プログラムリーダー)
 江崎 治 (基礎栄養プログラムリーダー)

【実験動物研究部会委員名簿】

江崎 治 (基礎栄養プログラムリーダー：委員長)
 大坂寿雅 (健康増進プログラム上級研究員)
 窪田哲也 (臨床栄養プログラム栄養療法プロジェクトリーダー)
 永田純一 (食品保健機能プログラム食品分析プロジェクトリーダー)

【疫学研究部会委員名簿】

森田明美 (栄養疫学プログラムリーダー：委員長)
 稲葉 裕 (実践女子大学教授)
 辻 誠治 (日本女子大学附属豊明小学校教諭)
 大前和幸 (慶應義塾大学教授)
 田中茂穂 (健康増進プログラムエネルギー代謝プロジェクトリーダー)
 石見佳子 (食品保健機能プログラムリーダー)
 窪田哲也 (臨床栄養プログラム栄養療法プロジェクトリーダー)
 饗場直美 (栄養教育プログラムリーダー)

6. 栄養情報担当者 (NR) の養成

(1) 第 7 回栄養情報担当者認定試験

日 時：平成 22 年 6 月 13 日 (日)
 場 所：日本大学 (東京都千代田区)
 関西大学 (大阪府大阪市北区)

受験者数：1,164 名
 合格者数：595 名

(2) 第 8 回栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験

日 時：平成 22 年 11 月 14 日 (日)
 場 所：慶應義塾大学芝校舎 (東京都港区)
 関西大学 (大阪府吹田市)

受験者数：215 名
 合格者数：108 名

(3) 栄養情報担当者 (NR) 研修会の開催

大坂会場：平成 22 年 10 月 3 日 (日)
 東京会場：平成 22 年 10 月 23 日 (土)
 福岡会場：平成 22 年 10 月 30 日 (土)
 名古屋会場：平成 22 年 11 月 20 日 (土)
 仙台会場：平成 22 年 11 月 27 日 (土)

岡山会場：平成 22 年 12 月 4 日 (土)

7. 連携大学院

- (1) 国立大学法人お茶の水女子大学
- (2) 東京農業大学大学院
- (3) 女子栄養大学大学院
- (4) 早稲田大学スポーツ科学学術院
- (5) 名古屋市立大学大学院
- (6) 福岡女子大学
- (7) 東京農工大学

8. 他の研究機関等との連携

- (1) 国民生活センター
- (2) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)
- (3) 国立医薬品食品衛生研究所
- (4) 国立極地研究所

Ⅱ 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

栄養疫学に関する基礎ならびに応用研究を行い、日本人の食生活の多様化と健康への影響を明らかにするとともに、わが国の公衆栄養行政に不可欠な科学的根拠を提供する。具体的には、国民健康・栄養調査の集計業務を担当するとともに、結果の質の向上をめざした環境整備や基礎研究を行う。また、食事摂取基準の改定において必要とされる学術的資料を作成するとともに、そのための基礎研究を行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

- ・当研究所の法定業務である国民健康・栄養調査の集計業務を担当する。
- ・国民健康・栄養調査等における調査精度の向上や技術的・学術的なレベルアップに寄与できる調査・研究等を実施する。
- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を中心に関連する事柄について研修や情報提供等の支援業務を行う。

b. 食事摂取基準プロジェクト

- ・5年ごとに改定されている「日本人の食事摂取基準」の策定に必要な栄養学的知見を系統的、かつ、網羅的に収集、蓄積、解読し、策定の効率化と質の向上の一助とする。
- ・日本人の食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るための、ヒトを対象とした栄養疫学研究を実施する。

c. 生体指標プロジェクト

- ・栄養素摂取量並びにその生体指標の収集を中心とした疫学研究及び脂溶性ビタミン類とその代謝に関与する栄養素に着目し、その必要量に関する基礎的研究を行ない、日本人の食事摂取基準のための基礎的資料を作成する。
- ・新たな生体指標の確立を目指す。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

森田明美

プロジェクトリーダー：

西 信雄 (国民健康・栄養調査プロジェクト／併任)

森田明美 (食事摂取基準プロジェクト／併任・～1月)

(生体指標プロジェクト／併任)

笠岡(坪山)宣代 (食事摂取基準／併任・2

月～)

上級研究員：

山内 淳

研究員：

野末みほ

猿倉薫子

中出麻紀子

坪田 恵

特別研究員：

河嶋伸久

東泉裕子 (～4月)

客員研究員：

佐々木敏 (東京大学)

山本祐司 (東京農業大学)

由田克士 (大阪市立大学)

協力研究員：

荒井裕介 (千葉県立保健医療大学)

後藤麻貴 (国立国際医療研究センター)

後藤 温 (国立国際医療研究センター)

鈴木 望 (慶應義塾大学)

技術補助員：

大野尚子、福羅由美、鈴木洋子、峯 恵美、

近藤明子、後藤千春、紙 貴子 (～12月)、

無川美波 (7月～)、工藤廣枝 (7月～)、

関口真理子 (～2月)

研修生：

黒谷佳代 (九州大学) (12月)

白鳥明日香 (東京農業大学)

小林さより (東京大学) (9月～)

福元梓 (東京大学) (3月～)

2. 年度計画

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

- ・国民健康・栄養調査の集計業務を担当する。
- ・国民健康・栄養調査等における調査精度の向上や技術的・学術的なレベルアップに寄与できる調査・研究等を実施する。
- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を中心に関連する事柄について研修や情報提供等の支援業務を行う。

b. 食事摂取基準プロジェクト

- ・昨年度に引き続き厚生労働省が実施する日本人の食事摂取基準(2010年版)策定後の情報提供・普及啓発に協力する。
- ・2005年版策定時からの関係基礎資料をすべて収集・分類整理し、データベースを構築する。今後の策定や普及啓発事業においてもデータベースが十分活用され

るよう、エビデンステーブルの作成、内容の検討を行う。

- ・食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るためのヒトを対象とした栄養疫学研究を実施する。
- ・地域在住高齢者および介護施設入所者の栄養摂取状況とビタミン・ミネラル栄養状態を調査する。

c. 生体指標プロジェクト

- ・栄養素摂取量ならびにその生体指標の収集を目的とした疫学研究を行なう。特に閉経後女性を対象に、ビタミン K2 の骨代謝マーカー及びその他の生体指標に及ぼす影響について試験を実施する。
- ・新たな生体指標の確立を目指す。特にインスリン抵抗性を早期に検出できるレチノール結合タンパク質 (RBP4) の生体指標としての可能性を探り、研究結果を公表する。

3. 進捗状況 (成果)

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

●平成 21 年国民健康・栄養調査の集計

- ・平成 21 年国民健康・栄養調査について、基本集計表一式を平成 22 年 7 月 29 日に厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室へ提出した。また、平成 21 年国民健康・栄養調査の概要 (速報値) は平成 22 年 12 月 7 日に厚生労働省より公表された。

なお、平成 21 年の調査概要については、過去の国民健康・栄養調査 (国民栄養調査) における成績を加味した縦断的な評価が行われており、表面上には示されていないが、客観的な評価ができるように、統計学的な解析が施されている。

●平成 22 年国民健康・栄養調査の集計

- ・平成 22 年国民健康・栄養調査については、各自治体からの調査票の提出を確認後、順次集計作業を開始・継続している。

●健康・栄養調査業務支援ソフトウェア「食事しらべ (2009 年版) (確定版)」の改訂と普及

- ・栄養摂取状況調査ならびに身体状況調査に対応したソフトウェア (「食事しらべ (2009 年版) (確定版) 」) を改訂し、食事しらべ (2010 年版) として普及を行った。利用を希望する自治体に対して無償で配布した。

●健康・栄養調査技術研修セミナーの開催

- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を対象とした「健康・栄養調査技術研修セミナー (調査実務編)」を当研究所 (9 月 22 日) と大阪府豊中市 (10 月 18 日) において開催した。また、「健康・栄養調査技術研修セミナー (食事しらべ編)」を東京都千代田区 (10 月 5 日) で 2 回、大阪市 (10 月 19 日)、で 2 回開催した。以上 6 回のセミナーにおいて、のべ 244 名の参加があった。

●平成 22 年国民健康・栄養調査及び各自治体等が実施する健康・栄養調査に関する情報提供

- ・当研究所のホームページ上で平成 22 年国民健康・栄養調査の適正な実施に資する情報 (28 コンテンツ) を提供した。今年度についても、過去に実施された国民健康・栄養調査の際に問い合わせが多かった事項や誤りが多かった点について、Q&A 方式の対応事例を追加

した。また、実際の調査主体となる保健所における調査員の研修に用いる教材や具体的な練習問題についても内容を追加・改訂し充実させた。

- ・国民健康・栄養調査及び各自治体等が独自に実施する健康・栄養調査等に関して、質問や依頼があった場合は、個別に技術支援を行った。
- ・栄養摂取状況調査の精度向上と標準化を主たる目的とした「標準的図版ツール (2009 版) (確定版)」及び「重量目安表 (2009 年版)」を改訂し、利用希望のあった保健所担当者へ無償配布した。

●厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室との連携

- ・平成 22 年国民健康・栄養調査の企画、各種調査票の設計、食品番号表・調査必携の作成並びに厚生労働省が開催している担当者会議の内容等に関して、必要に応じ生活習慣病対策室と連携し、適切な調査が実施されるよう最大限の対応を行った。

●その他関連する請負業務等

- ・厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課からの受託業務として、食品摂取頻度・摂取量調査の特別集計業務を実施した。

b. 食事摂取基準プロジェクト

●日本人の食事摂取基準 (2010 年版) 策定・普及・啓発

- ・「日本人の食事摂取基準」(2010 年版) 策定後も引き続き、厚生労働省、各機関への情報提供を行った。具体的には、プロジェクト内に、日本人の食事摂取基準事務局を設置し、所内外からの今後の策定のための新たな資料の収集・提供に応じるとともに、各 WG メンバーから今回の策定で使用した文献を収集した。
- ・「日本人の食事摂取基準」(2010 年版) が、2010 年 4 月より施行されたことに合わせ、各自治体や栄養士会等が開催した講習会等に計 27 回講師を派遣した。また、当研究所主催により、「日本人の食事摂取基準の活用と今後の展望」をテーマにした講演会を開催し、約 400 名の参加があった。これらの普及啓発活動に必要な資料等を作成し、ホームページに掲載した。
- ・次期食事摂取基準策定に向けて、これまでに参考にされた文献のデータベースの構築を継続中である。

栄養素摂取状況と健康状態に関する栄養疫学研究

- ・高齢者の栄養摂取状況および栄養摂取量が血中の微量栄養素や身体状況に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、高齢者施設の入居者や在宅サービス利用者を対象にした調査を継続中である。これまでに、提供食の食品分析を行い、提供食に含まれるエネルギー及び各栄養素量を明らかにした。
- ・佐久総合病院人間ドックを中心とした介入研究およびコホート研究を実施した。肥満者の栄養教育・運動指導による介入研究である「佐久肥満克服プログラム (SCOP)」は、3 年間の介入プログラムを完了し、介入後の追跡では体重の増加は見られたが、依然として介入開始前よりも低い体重であり、介入効果の維持を確認した。また、一般健診受診者を対象としたコホートを構築中であり、3000 人の参加者を得て、メタボリックシンドロームや糖尿病に関するリスクを検討中である (健康増進および栄養教育プログラムとの共同研究)。

- ・地域在宅高齢者を対象とした検討からは、食事摂取量が少ない「小食群」において、食事摂取基準の推定平均必要量を満たさないもののリスクが上がることを明らかにした。

c. 生体指標プロジェクト

●ビタミンKの栄養生理学的意義に関する研究

- ・閉経後女性を対象としたビタミン K2 の骨代謝マーカー及びその他の生体指標に及ぼす影響についての試験を継続して実施した（食品保健機能プログラムとの共同研究）。

●生体指標の定量システム確立に関する研究

- ・RIA 法による血中 25(OH)D の定量システムを用い、ヒトを対象とした栄養素及び食品成分の栄養生理学的意義に関する研究で活用した。
- ・ β -カロテン開裂酵素である BCMO1 遺伝子発現制御に関する研究を行い、BCMO1 遺伝子発現が積極的に抑制される現象を見出した。

●新規生体指標の開発に関する研究

- ・インスリン抵抗性の表現型を有する脂肪細胞において、RBP4 遺伝子発現を促進する転写因子としてプロテアソーム構成因子 PSMB1 を同定した。インスリン抵抗性になると PSMB1 の細胞質から核への移行が盛んに行なわれるようになることが判明し、これが RBP4 遺伝子の転写活性化の要因であることを明らかにした。またこの成果を論文、学会発表および総説として公表した。

健康増進プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

健康増進プログラムは、(独) 国立健康・栄養研究所 中期計画に示された生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究を行う。

厚生労働省が 5 年ごとに行っている「健康づくりのための運動基準」と「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」及び「日本人の食事摂取基準」の改定作業に積極的に関与すると同時に、それらの改定のための科学的根拠の提示を行う。

また、エクササイズガイド達成のための積極的な休養法についての研究を行う。

さらに、身体活動・運動量の増加によるメタボリック シンドローム、生活習慣病の予防等に関する科学的根拠を明らかにするための研究を行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 運動ガイドラインプロジェクト

厚生労働省の「健康づくりのための運動基準」や「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」策定及びその普及・啓発に資する研究・調査並びに、それらを活用した生活習慣病予防の方策に関する以下の研究・調査を実施する。

- ・「健康づくりのための運動基準 2006」に示された生活習慣病予防のために必要な身体活動量・運動量・体力の基準の妥当性を検討するための大規模無作為割付介入研究を行う。
- ・安全で効果的な生活習慣病予防と介護予防のための筋力トレーニング法に関する研究を行う
- ・健康づくりのための運動基準ならびに運動指針作成のための文献収集並びに検討を行う。

b. エネルギー代謝プロジェクト

厚生労働省の「日本人の食事摂取基準」における推定エネルギー必要量、および「健康づくりのための運動基準」と「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」における身体活動量・運動量の把握に資する研究として、以下の調査・研究を行う。

- ・エネルギー消費量の推定法、および身体活動・運動の定量化の方法を開発する。
- ・身体活動レベルに寄与する活動強度や活動内容を対象特性別に明らかにする。
- ・身体活動がエネルギー代謝や基質代謝に及ぼす影響を明らかにする。

c. 休養プロジェクト

「健康づくりのための運動指針 2006(エクササイズガイド 2006)」で示された身体活動量及び運動量の達成を可能とするために、適切な休養の取り方に関する以下の研究を行う。

- ・休養の必要性また回復をみる目的で、身体疲労と精神疲労の定量化に関する研究を行う。

- ・休養に重要である睡眠に関する研究を行う。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

田畑 泉

プロジェクトリーダー：

宮地元彦 (運動ガイドラインプロジェクト)

田中茂穂 (エネルギー代謝プロジェクト)

田畑 泉 (休養プロジェクト／併任)

上級研究員：

高田和子

熊江 隆

大坂寿雅

特別研究員：

村上晴香 (運動ガイドラインプロジェクト)

朴 鍾薫 (エネルギー代謝プロジェクト)

流動研究員：

田中憲子 (日本学術振興会特別研究員)

大河原一憲 (日本学術振興会特別研究員)

客員研究員：

木村靖夫 (佐賀大学)

川中健太郎 (新潟医療福祉大学)

寺田 新 (早稲田大学)

真田樹義 (立命館大学)

山元健太 (北テキサス大学)

家光素行 (環太平洋大学)

福 典之 (東京都老人医療センター)

谷本道哉 (順天堂大学)

二見 順 (東日本国際大学)

田中千晶 (桜美林大学)

引原有輝 (千葉工業大学)

緑川泰史 (桜美林大学)

大島秀武 (オムロンヘルスケア株式会社)

協力研究員：

曹 振波 (早稲田大学) (平成 21 年 10 月 1 日より)

安田 剛 (株式会社ティップネス)

河野 寛 (早稲田大学)

片山利恵 (NPO 法人健康早稲田の杜)

高山光尚 (日本事務機)

島田美恵子 (千葉県立保健医療大学)

別所京子 (聖徳大学)

鈴木洋子 (株式会社ウェル・ビーイング)

上野 (目加田) 優子 (東京栄養食糧専門学校)

技術補助員：

佐々木梓、吉池秀之、埴 智史、田中憲子、丸藤祐子、川上諒子、広佐古愛湖、林美由紀、小暮寛子、三宅理江子、安藤貴史、仲立貴、小林澄誉子、坂田晶子、東 保子 (平成 23 年 1 月まで)、山本久子、吉田美代子、鈴木明子、魚住佳代、吉田明日美

研修生：

古泉佳代（横浜国立大学）
川上恵（昭和女子大学）
梅田由希（横浜国立大学）
田中祥子

2. 年度計画

a. 運動ガイドラインプロジェクト

- 生活習慣病発症に関する大規模前向き研究に関してコホートを構築し、ベースラインデータの分析を行うとともに、介入を開始し、その効果を検討する。
- 介護予防と動脈硬化予防を両立させる筋力トレーニングして効果の実施方法を検討する。
- 運動指導者がエビデンスに基づいた身体活動・運動指導を行うためならびにエクササイズガイドの改定を目指して、研究論文データベースに新しい論文を追加し、一層の充実を図る。
- 特定健診・保健指導における、肥満・メタボリックシンドローム改善のための身体活動・運動保健指導効果を検証する。

b. エネルギー代謝プロジェクト

- 成人および子どもにおいて、身体活動レベルや総エネルギー消費量の変動要因（行動の種類や活動強度の分布など）を特定する。それに基づき、質問紙や歩数を用いた、1日当たりの身体活動レベルおよび総エネルギー消費量の推定法を確立する。また、様々な対象特性をもつ集団（職業、運動習慣、生活地域、年齢など）において、既存の方法および新たに開発した推定法の妥当性を検討する。
- 子ども（特に、幼児および小学生）において、代表的な活動の強度（メッツ値）の標準値を再検討するとともに、加速度計を用いて客観的に評価する方法を確立する。
- 二重標識水法の結果に基づいた身体活動レベルと肥満との関係について検討する。

c. 休養プロジェクト

- 長距離選手等の運動選手を被験者とし、合宿等における継続的な肉体的負荷による身体疲労の変動を血清生化学検査及び非特異的免疫能で明らかにする。
- 生理周期による睡眠への影響を心拍スペクトル解析による睡眠時心臓自律神経バランスの変動により客観的に評価し、休養の指標として検討する。
- 独自に開発した血清及び唾液の総抗酸化能の測定法を用い、身体疲労の発生が十分に疑われる状況にある競技選手等を被験者とし、休養の新しい客観的指標としての総抗酸化能の有用性を検討する。
- 実験動物を用い、エネルギー代謝調節および肥満制御の脳機構を明らかにする。

3. 進捗状況（成果）

a. 運動ガイドラインプロジェクト

- 運動基準 2006 で示された身体活動量、運動量、体力の基準値の妥当性について検討するための大規模無作為割付け介入研究について、本年度は、12月末日現在までで 915 名を活動群、身体活動介入群、非活動対照群の 3 群に割り付け、身体活動介入群に対し三次元加

速度計を用いた身体活動改善指導を実施した。

ベースライン測定結果を横断的に分析すると、中強度以上の身体活動量や体力の一要素である全身持久力（最大酸素摂取量）が運動基準 2006 で示された基準値よりも低い者は高い者と比較して、動脈ステイフネス、血圧、体重、腹囲、血糖値、左心室壁厚などほぼ全ての生活習慣病危険因子が高いことが示された。また、3メッツ未満の低強度活動が高齢者の動脈ステイフネスや糖代謝に関連すること、全身持久力の高い高齢者は粥状動脈硬化の代替指標である頸動脈内中膜複合体厚が薄いことを明らかにした。また、遺伝子多型の解析により、体力と MTHFR や PPAR γ 2 の遺伝子多型とが生活習慣病リスクに及ぼす相互作用を明らかにした。

1年間の介入期間が終了した 614 名の分析結果では、身体活動介入群の歩数ならびに 3メッツ以上の強度の身体活動の量の増加が、非介入群よりも有意に大きく、その平均値は運動基準で定められた 23メッツ・時を超えた。現状では、生活習慣病リスクファクターの変化に有意差は認められなかった。

- 高齢者の介護や虚弱予防のための運動方法を検討するために、システマティックレビューを実施した。高齢者に対する虚弱改善や介護予防において最も重要と考えたアウトカムである ADL、IADL を、運動介入によって改善させるか否かという視点では、効果を肯定的に示した文献数が少なく、一定の知見を得ることは困難と考えられた。しかし、代理アウトカムでは、複合的な運動トレーニングにより転倒を減少させ得ること、十分な強度の筋力トレーニングであれば骨格筋量を増加させること、特定の種目でなくとも十分な強度・頻度の運動介入により高齢者の膝痛の軽減が期待できること、が示唆された。

- 健康・体力づくり事業財団と協力して作成した健康運動指導士がエビデンスに基づいた身体活動・運動指導を行うための研究論文データベースに、50本の論文を新規追加した。

エクササイズガイドの改訂に資するために、環境と身体活動の関係に関する研究のシステマティックレビューを実施し、地理的、インフラ的、社会的といった3つの環境要因が身体活動の多寡に関連することが明らかとなった。

- 肥満克服プログラムにおける無作為割付け比較研究の身体活動量評価ならびに身体活動・運動介入を受けた 235名の参加者の約 12%が、1年間の介入期間中に、運動中止には至らない程度であるが、脚や腰の痛みを訴えた。

コンピュータゲーム制作会社との共同研究として、身体活動・運動を伴うコンピュータゲームによる減量効果を無作為割付け介入研究で検証したところ、1ヶ月の活動的なテレビゲームの実施により、体重 1.7kg 腹囲 2.0cm の有意な減量効果が明らかとなった。

肥満や糖尿病リスク因子抽出のための人間ドックにおける大規模コホート研究において、平成 22 年 12 月の時点で約 2000 名の活動量計を用いた身体活動量の測定を終了した。

b. エネルギー代謝プロジェクト

- ・身体活動量の低い対象のデータの収集のために、運動習慣のない事務職に従事する男性 22 名（都心部 11 名、地方 11 名）について、基礎代謝量の実測とあわせて、二重標識水（DLW）法により総エネルギー消費量を測定した。これまで収集した他職種のデータと合わせ、職業及び運動習慣と身体活動レベルの関係を検討した。また、2 つの中学校において、中学生を対象とした測定も実施した。
- ・成人において、質問紙法（JALSPAQ）や活動記録法から総エネルギー消費量や身体活動レベルを推定すると、総エネルギー消費量の実測値とは比較的強い相関がみられたが、身体活動レベルの推定には限界があった。いずれの方法でも、中強度程度の活動時間が身体活動レベルと関連を示した。
- ・自立した健常高齢者 76 名、歩行可能な要支援・要介護高齢者 41 名を対象に、基礎代謝量とインピーダンスによる体脂肪率を測定した。体重 1kg あたりの基礎代謝量は男性の自立者では $19.2 \pm 2.7 \text{ kcal/kg/day}$ 、男性の要支援・介護者では $18.6 \pm 3.3 \text{ kcal/kg/day}$ 、女性の自立者では $19.2 \pm 3.0 \text{ kcal/kg/day}$ 、要支援・介護者では $18.4 \pm 3.1 \text{ kcal/kg/day}$ であり、要支援、要介護高齢者でやや低い傾向にあった。
- ・健常高齢者と歩行可能な要支援・要介護高齢者を対象に、加速度計による 3 段階の速度での歩行時のエネルギー消費量推定の誤差について明らかにした。また、39 名の幼児を対象に、加速度計を装着した上で様々な活動における活動強度の値が得られた。
- ・成人男性 86 名を対象に、体格・身体組成と DLW 法で評価した身体活動レベルの関係を検討し、その結果、身体活動レベルの 1 標準偏差（0.33）の増加により、体脂肪率が 25%以上であるオッズ比は 0.558 と小さくなった。小学生でも、加速度計で評価した中高強度活動時間と肥満に関連がみられたが、幼児では、やせて中高強度活動時間が短い傾向がみられた。
- ・成人男女 66 名について、DLW 法で評価した身体活動レベルと加速度計で評価したエクササイズ（メッツ・時）/週を比較した。三軸加速度計で評価したエクササイズ/週は身体活動レベルと有意な相関がみられたが、その関係は機器により差があり、さらに検討が必要と考えられた。また、より大人数の集団において、男性より女性、若年者より高齢者で、歩行以外の活動のエクササイズへの寄与が大きいこと、職種によっても関係が異なることが明らかとなった。

c. 休養プロジェクト

- ・女子大生を対象に心理状況と血中逸脱酵素活性を 6 ヶ月間調査し、精神的に良い状況と血中逸脱酵素活性が基準範囲内に収まる程度の低強度で無意識的な身体活動の増加に関連がある可能性を見出した。
- ・大学陸上競技部所属の男子長距離選手を被験者とし、非特異的免疫として重要な好中球からの活性酸素種の産生を化学発光法で測定し、異物認識から最大発光量に至る時間と考えられる最大発光時間が心理状態をみ

る Profile of mood state (POMS) の疲労と正相関し、疲れを訴える状態では非特異的免疫が低下する事を明らかにした。

- ・大学生の短距離選手を被験者とし、生活環境の違いが 5 日間の強化合宿による心理状態と血清生化学検査の変動に及ぼす影響を検討した。心理状態は合宿前の方が悪く、自宅より通っている学生の方が強化合宿による心理的な影響を受けにくく、低学年の寮生で変動が大きかった。
- ・成人男性 5 名と成人女性 2 名を被験者とし、睡眠時間・環境を一定とした場合の心拍スペクトル解析による睡眠時心臓自律神経バランスの指標の再現性について検討した。1 週間の間隔をあけて 2 回（2 夜）、睡眠時の心拍を測定したが、排卵期より黄体期へ移行したと推定される女性 1 名と睡眠時の平均心拍数が 50 拍/分を下回る男性 1 名を除いて、交感神経・副交感神経活動の指標は再現性が良かった。
- ・独自に開発した血清の総抗酸化能の測定法を用いて血漿と唾液の総抗酸化能を測定し、血清の総抗酸化能との関連性に関して基礎的な検討を行った。血清と血漿が得られた 132 名と血清と唾液が得られた 72 名のそれぞれで有意の相関関係が認められた。
- ・低酸素刺激によって誘起される低体温反応に視床下部の終板器官周囲部でのノルアドレナリンと一酸化窒素が関与して、熱放散を促進することにより体温を低下させる機構があることを見いだした。
- ・マウスの視床下部腹内側核破壊により肥満および腹部内臓の細胞増殖がおきる実験モデルを作成した。

臨床栄養プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

臨床栄養プログラムは、「重点調査研究に関する事項」の「生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究」に対応し、運動・身体活動による生活習慣病の一次予防、食事と遺伝的因子の相互作用の解明並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた研究を行う。近年、我が国において糖尿病患者は増加の一途をたどり、罹患者数は約 890 万人を数えるに到っている。糖尿病は高齢者における主要な疾患の 1 つであり、糖尿病に肥満・高脂血症・高血圧が合併するメタボリックシンドロームは動脈硬化を促進し、心筋梗塞・脳卒中のリスク増大を介して日本人の健康寿命を短縮する最大の原因となっている。糖尿病などの生活習慣病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病であり、その 1 つ 1 つの因子は単独では生活習慣病を発症させる効果は弱い、複数の因子が組み合わさって生活習慣病を発症させると考えられている。また近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、日本人が欧米人に比べ、膵β細胞のインスリン分泌能が低い(遺伝的素因)ために、高脂肪食などの食事内容の欧米化や運動量の低下といった変化(生活習慣要因)による肥満・インスリン抵抗性状態に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。このような生活習慣病の特性を踏まえて、本プログラムでは糖尿病や動脈硬化症の発症・進展の遺伝的要因、環境要因並びにその分子メカニズムを解明する。

(2) プロジェクトの概要

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

生活習慣病を効果的に予防するためには、生活習慣病の根本的な分子病態の解明とそれに立脚した生活習慣への介入が必須である。現在急増している 2 型糖尿病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病である。そこで本プロジェクトは、2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型を同定し、その機能が未知のものに対しては、動物モデルを用いて解析する。また半定量食品摂取頻度調査に基づいた個々人の各栄養素摂取量並びに身体活動量と、これまでに同定した 2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型の組み合わせが、肥満度や血糖値などの臨床指標にどのように影響を及ぼしているか、コホート集団を対象に調査・解析する。

b. 栄養療法プロジェクト

近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、高脂肪食に代表される食習慣の欧米化や車の普及などによる運動不足といった生活習慣に基因する肥満・インスリン抵抗性に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。そこで、本プロジェクトでは高脂肪食負荷に伴うインスリン抵抗性と代

償性のインスリン分泌増加の分子メカニズムについてモデル動物を用いて詳細に検討する。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

門脇 孝

プロジェクトリーダー：

窪田直人 (メタボリックシンドロームプロジェクト)

窪田哲也 (栄養療法プロジェクト)

任期付研究員：

井上真理子 (7 月～)

特別研究員：

河合智子 (～12 月)

客員研究員：

門脇弘子 (東京家政学院大学大学院・家政学部児童学科教授、保健管理センター所長)

野田光彦 (国立国際医療センター戸山病院糖尿病・代謝症候群診療部長)

原 一雄 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

協力研究員：

眞鍋一郎 (東京大学医学系研究科循環器内科)

窪田直人 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

松下由実 (国立国際医療研究センター・国際保健医療研究部国際疫学研究室長)

流動研究員：

高本偉碩 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

栗澤元晴 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

技術補助員：

加藤美智子、本村寿子

研修生：

泉 和生 (財団法人国際協力医学研究振興財団)

加藤昌之 (財団法人国際協力医学研究振興財団)

勝山修行 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

小島敏弥 (東京大学医学系研究科循環器内科)

小畑淳史 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

浅野智子 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

2. 年度計画

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

●各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討と遺伝素因の機能解析

これまでに罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析、候補遺伝子アプローチを組み合わせた統合的解析や Genome-Wide Association Study (GWAS) によって PPAR γ 遺伝子、アディポネクチン遺伝子、PGC-1 遺伝子、AMPK α 2 サブユニット遺伝子、HNF4 α 遺伝子、TCF7L2 遺伝子、HHEX 遺伝子、KCNQ1 遺伝子が、日本人における 2 型糖尿病感受性遺伝子であることを明らかにした。しかしこれらの遺伝子を含め今までに明らかにされた 2 型糖尿病感受性遺伝子は、2 型糖尿病の発症の 25%しか説明することができない。そこで本年度は、さらに未知の 2 型糖尿病感受性遺伝子を明らかにする。また糖尿病をはじめとする生活習慣病は遺伝素因に環境因子の影響が組み合わさって発症する多因子病であり、個々の易罹患性を予測するためには、個々の遺伝素因と環境因子に加えて遺伝素因・環境因子の相互作用を考慮に入れた解析を行いそのデータに立脚した易罹患性予測式を構築する必要がある。これまでアディポネクチン遺伝子多型は肥満者でより強く血中アディポネクチン値に影響を与えていることを明らかにしているが、本プロジェクトでは、これまでに明らかにしたインスリン抵抗性やインスリン分泌、2 型糖尿病に関与する遺伝子多型、各栄養素摂取量、身体活動量、それらの相互作用項を説明因子として、肥満度、血糖値、糖尿病の有無などの従属変数をどのように説明するかをロジスティック解析によって検討する。本年度はコホートの対象者について PPAR γ 遺伝子、アディポネクチン遺伝子、PGC-1 遺伝子、AMPK α 2 サブユニット遺伝子、HNF4 α 遺伝子、TCF7L2 遺伝子、HHEX 遺伝子に加えて、平成 20 年度に明らかにした 2 型糖尿病感受性遺伝子である KCNQ1 遺伝子のタイピングを行い、ロジスティック解析によってインスリン抵抗性、2 型糖尿病発症に関与する遺伝素因と環境因子の組み合わせを抽出する。さらに 2 型糖尿病を発症させやすくしていることが遺伝子多型を利用した患者対照相関解析によって明らかにした遺伝子で、その機能が未知のものについては、遺伝子欠損マウスの解析を行う。また、このマウスに高脂肪食などの環境因子を負荷して表現型を解析し栄養と遺伝子多型の相互作用について検討を行う。

b. 栄養療法プロジェクト

●糖尿病の研究（インスリン分泌を中心に）

欧米人と同様、日本人においても 2 型糖尿病感受性遺伝子であると同定された TCF7L2 遺伝子は、欧米などの解析から、インスリン分泌能の低下と関連していることが報告され、これが糖尿病の発症要因であると考えられている。しかしその機能については、全く不明である。昨年度は、TCF7L2 の機能を膵 β 細胞で低下させた遺伝子改変モデル動物を作製し、インスリン分泌に与える影響について検討し、インスリン抵抗性は認めなかったが、インスリン分泌低下に伴う耐糖能異常を呈していることを明らかにした。本年度は、TCF7L2 の機能低下が膵 β 細胞の機能や膵 β 細胞の増殖に対してどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

●メタボリックシンドロームの研究（インスリン抵抗性を中心に）

高脂肪食は、肝臓や骨格筋の中性脂肪含量を増加させ、肝臓や骨格筋のインスリンシグナルを様々な分子メカニズムにより障害することで、インスリン抵抗性を惹起すると考えられる。我々はこれまでに、高脂肪食を負荷した生活習慣病モデル動物では、血管内皮細胞におけるインスリンシグナルが低下し、このことが骨格筋のインスリン抵抗性に関与しているという興味深い知見を得ている。そこで本プロジェクトでは、血管内皮細胞のインスリンシグナル、特にインスリン受容体基質 (IRS) に着目し、IRS をターゲットにした遺伝子操作動物を作出しその解析を行うことで、血管内皮細胞におけるインスリンシグナルが全身のインスリン抵抗性に果たす役割を検討する。

3. 進捗状況（成果）

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

●各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討と遺伝素因の機能解析

新規の 2 型糖尿病感受性遺伝子を同定するために、2 型糖尿病患者約 10978 人と対象者約 8514 人に対し GWAS を行った。その結果、すでに報告されている KCNQ1, CDKAL1, CDKN2B, TCF7L2 などの遺伝子に加え、新たに UBE2E2 遺伝子、C2CD4A/B 遺伝子が 2 型糖尿病感受性遺伝子であることを明らかにした。特に UBE2E2 遺伝子は、オッズ比が 1.21 で Population Attributable Risk (PAR) が 14.7 と KCNQ1 と同様に高く、日本人における寄与度は高いと考えられる。さらに東アジア人（シンガポール、香港、韓国）やヨーロッパ人（フランス、デンマーク）でもこれらの遺伝子が、2 型糖尿病感受性遺伝子であるかについて検討したところ、UBE2E2 は日本人や東アジア人でのみ有意な 2 型糖尿病感受性遺伝子であったが、C2CD4A/B は民族を超えて共通の 2 型糖尿病感受性遺伝子であった。また UBE2E2 遺伝子は、chromosome 3 (3p24.2) に位置し、ユビキチン結合酵素 E2E2 をコードし、ヒト膵臓やインスリンを分泌する培養細胞でも発現が確認されている。さらにこのようなユビキチン-プロテアソーム系は、正常なインスリンの生合成、分泌、シグナル伝達に重要な役割を果たすことが報告されている。そこで UBE2E2 遺伝子とインスリン分泌能 (HOMA- β) について検討したところ、UBE2E2 遺伝子のリスクアレル保有者は、HOMA- β が低値であり、この遺伝子はインスリン分泌能と関連することが明らかとなった。次にこれまでに日本人で確認された 13 の 2 型糖尿病感受性遺伝子の計 26 アレルについてリスクアレル保有数と 2 型糖尿病発症リスクについて検討したところ、リスクアレル保有数が増加するにつれて、糖尿病の発症リスクが増加することが明らかとなった。今後は、これまでに明らかにしてきた 2 型糖尿病感受性遺伝子を用いて、遺伝素因・環境因子の相互作用を考慮に入れた解析を行い、そのデータに立脚した易罹患性予測式を用いて、各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用について検討する。

また 2 型糖尿病感受性遺伝子のひとつで、その機能が未知のものについて、遺伝子欠損マウスを作製し解析を行い、当該遺伝子欠損マウスは、膵島の面積には差を認めなかったが、グルコース刺激後の細胞内 Ca²⁺ 濃度が有意に低下し、その結果インスリン分泌が低下し耐糖能異

常を呈していることを明らかにした。今後膵島のインスリン含有量やグルコース応答性のインスリン分泌について検討し、当該遺伝子のインスリン分泌における役割を明らかにする。

b. 栄養療法プロジェクト

●糖尿病の研究（インスリン分泌を中心に）

欧米人と同様、日本人においても2型糖尿病感受性遺伝子として同定されたTCF7L2の機能を膵β細胞特異的に低下させたトランスジェニックマウスを作製し検討した。このマウスにインスリン負荷試験、グルコース負荷試験を行ったところ、インスリン抵抗性は認めなかったが、インスリン分泌低下に伴う耐糖能異常を呈していた。またTCF7L2のSNPはインクレチン作用とも関連性があることから、インクレチンであるGLP-1を用いてグルコース負荷試験を行ったところ、コントロールマウスと同程度まで改善しており、このマウスではインクレチンの効果が保たれていることが明らかとなった。そこでインスリン分泌低下のメカニズムを明らかにするために、膵β細胞量について検討したところ、このマウスでは有意に低下していた。それに一致して、インスリン含量も低下していたが、グルコース応答性やGLP-1に対するインスリン分泌率はコントロールマウスより良好であり、膵β細胞の機能は保たれていた。このことからこのマウスのインスリン分泌低下の原因は膵β細胞量の低下によるものと考えられた。今後膵β細胞量の低下のメカニズムについて検討する。

●メタボリックシンドロームの研究（インスリン抵抗性を中心に）

昨年度までに血管内皮特異的IRS2欠損(ETIRS2KO)マウスと高脂肪食誘導性肥満モデル動物(HFDマウス)を用いた解析から、これらのマウスでは血管内皮細胞のインスリン刺激後のAktとeNOS活性化が減弱し、その結果骨格筋の毛細血管拡張能、間質へのインスリンの移行が低下し、インスリン依存性の骨格筋の糖取り込みが障害するというメカニズムが存在することを明らかにした。さらにeNOSの遺伝子発現を増加するPGI₂アナログを両マウスに投与すると、インスリン刺激後のeNOSの活性化が改善し、ETIRS2KOマウスとHFDマウスで認めた毛細血管拡張能と骨格筋間質のインスリン濃度の低下は、コントロールマウスとほぼ同程度まで回復し、インスリン依存性の骨格筋の糖取り込みが改善することを明らかにした。本年度は血管内皮細胞におけるインスリンシグナルの全貌を明らかにするために、もうひとつの重要なインスリン受容体基質であるIRS1に着目し、血管内皮特異的IRS1欠損(ETIRS1KO)マウスを作製し解析した。このマウスでは、血管内皮細胞におけるインスリン刺激後のAkt、eNOSのリン酸化はコントロールマウスと同程度だった。またETIRS1KOマウスではインスリン抵抗性や耐糖能異常は認めなかった。実際、グルコースクランプでもETIRS1KOマウスでは、インスリン依存性の骨格筋の糖取り込み障害を認めなかった。このことから、血管内皮細胞のIRS1が欠損しても、IRS2が十分代償できうと考えられた。さらに血管内皮細胞のIRS1、IRS2の役割を明らかにするために、血管内皮特異的IRS1/IRS2ダブル欠損(ETIRS1/2DKO)マウスを作製し解析した。このマウスでは血管内皮細胞におけるインスリン刺激後のAkt、eNOSのリン酸化が完全に消失していた。次にこのマウスにグルコー

スクランプを施行したところ、骨格筋の糖取り込みが約半分低下していた。このことから、血管内皮細胞のインスリンシグナルは、インスリン依存性の骨格筋の糖取り込みの約半分程度を説明しうると考えられた。さらにETIRS2KOマウスと骨格筋の糖取り込みの障害の程度について検討したところ、ETIRS1/2DKOマウスではETIRS2KOマウスよりその程度は重篤だった。このことから血管内皮細胞のIRS2が低下したような状態では、十分ではないがIRS1がそのシグナルを伝達すると考えられた。今後ヒトにおいてもPGI₂アナログが骨格筋のインスリン抵抗性を改善することができるのかどうか検討する。

栄養教育プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

生涯を通じた健康づくりのための健康・栄養教育のあり方や環境整備について、食育・生活習慣病予防・栄養ケア・マネジメント(食介護)の 3 プロジェクトで研究する。

栄養教育(保健指導)や食育、食介護の実践現場で抱える問題点を掘り起こし、より効果的な事業展開をするための方法論や評価法の開発を含める実践的研究を産官学共同で取り組む。子供、成人、高齢者それぞれのライフステージにおける食生活および食習慣と健康に関する問題を明らかにする。また、コホートを使った研究によって、生活習慣病等の疾患発症とそれら疾患の発症に関連する種々の要因(環境要因、遺伝的要因)との関連性を検討し、栄養教育、食育等の実施への基礎データを構築し、テララーメードヌトリションの確立を目指す。

(2) プロジェクトの概要

a. 食育プロジェクト

平成 17 年に施行された「食育基本法」に基づいて、多くの団体(国、地方自治体、地域ボランティア、生産者、企業など)が積極的に展開している食育の実践活動を支援する為の調査研究を行う。また、食育活動展開の為の科学的基盤を得るためにフィールドでの調査研究を実施すると共に食育の現状解析と評価法について研究する。特に、食育の効果的な展開につながる社会環境整備のあり方について検討し、企業や地域との連携のあり方について提案する。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

成人期の生活習慣病予防のためのリスク因子抽出・介入方法検討の基礎的基盤を築く。新規健診・保健指導に寄与するため、メタボリックシンドローム予備群・有病者群を減少させる効果的介入の科学的基盤を確立する。肥満者を対象に運動および栄養教育による介入研究を実施し、肥満や生活習慣病の発症にかかる様々な環境要因(食事・生活習慣・社会環境等)や遺伝的要因を総合的に検討し、効果的な栄養教育の方法や成果にかかる評価指標について研究する。また、大規模コホートを設定し、肥満や糖尿病などのリスク因子抽出のための縦断研究を行い、肥満や糖尿病と遺伝的要因や食生活・運動習慣や心理的要因との関連性について解析を行い、肥満や糖尿病予防のための栄養教育法を確立する。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

高齢者の食環境を調査研究し、QOL を高く保つ方法を研究する。摂食・嚥下困難を有する高齢者に対する食事療法・栄養療法のあり方について問題の把握と対策を立案する。異分野の専門家によるワークショップを開催し、実行に向けて改善案を提言する。高齢者施設や在宅での摂食・嚥下困難を伴う高齢者への栄養ケア・マネジメントの質的向上を目指して、わが国の高齢者の介護現場での食をめぐる問題点を抽出し、その改善策を検討する。

特に、食介護(食を通じた介護)を、食事を通じての全人的ケア・マネジメントとして位置づけ、「最期まで口から食べる幸せ」を維持できる食介護を目指して、産官学共同で食介護のあり方について検討する。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

饗場直美

プロジェクトリーダー：

饗場直美(生活習慣病予防プロジェクト)

Melissa Melby(食育プロジェクト・育休)

手嶋登志子(栄養ケア・マネジメントプロジェクト)

上級研究員：

山田晃一

客員研究員：

渡邊昌(生命科学振興会)

石渡尚子(跡見学園)

協力研究員：

山田五月(多摩小平保健所)

技術補助員：

竹沢純、内藤由梨、武田和歌子、丹羽美智子、浅野景子

2. 年度計画

a. 食育プロジェクト

- ・食育に関係する文化的要素を把握するため、共通認識分析(Weller 2007)を行い、食育実践にかかる問題について、食育に対する専門家と一般の人との間の認識の乖離や共通認識を明らかにする。
- ・現在最も朝食欠食率の高い若年成人における朝食欠食に関する要因を解析するため、親子を対象としたアンケート調査を実施する。大学生とその親に対して食生活や食習慣、食嗜好についての調査を実施する。特に幼児期の親の子どもへの食態度や食意識について調査し、親の意識や食態度が子どもにどの様に伝播するのか明らかにする。
- ・DOHaD 仮説(バーカー仮説)を検証するため、母子健康手帳を使って、妊娠期の母親の状況、胎児期の発育状況から出生後 6 年間の母子の情報を収集し、胎児期、出生期、乳児・幼児期の発育状況と学童期の健康状態(肥満等)の関連性を明らかにし、健全な子供育成のための、母子健康のあり方について検討する。
- ・学校における栄養教諭の食育の効果について評価し、より効果的な栄養教育の在り方について検討する。
- ・食育推進のための環境整備を目指して、食品産業との連携を図り、よりわかりやすい新たな栄養表示法について検討する。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

- ・大規模コホートを設定し、肥満および糖尿病のリスク因子解析のためのデータ収集とデータベース作成を行う。特に、肥満および糖尿病の素因としての遺伝子の

多型と食行動との関連性を明確にし、遺伝子要因を考慮したより効果的な栄養教育の在り方について検討する。

- ・特殊環境での生活習慣病予防のための栄養教育の在り方や給食サービスの在り方について明らかにするために、南極越冬隊および長期航海船舶での食事提供の実態と隊員（船員）の食事摂取や生活状況、健康状態についての実態調査を行う。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

- ・高齢者施設における摂食機能判断尺度の策定のために、全国の高齢者施設に対して、ミールラウンズにおける食機能判断の実態調査を行う。
- ・在宅高齢者の摂食機能、ADL について、食に関する問題を抽出するために、在宅介護を受けている高齢者を対象として、食機能の実態調査を実施し、在宅高齢者の食介護の在り方を検討する。
- ・食介護に関するワークショップを開催し、食介護の今後の方向性について食介護に関わる専門家と食事提供する企業と合同で検討する。

3. 進捗状況（成果）

a. 食育プロジェクト

食育に関する問題把握とその背景調査に関する準備を行った。

- ・Cultural Domains 調査による共通認識分析についてはアンケート調査票およびフリーリストを作成し、100 人名のインタビューを実施し、一部解析を開始し、子供のころに教わったしつけと大人になって守っているしつけでは、性差や年齢差があることを明らかにした。
- ・DOHaD 仮説を検証するため、現在の肥満の有無と出生およびその後の体格・生活状況との関連について母子手帳およびアンケート調査を行い、303 家庭の調査を終了し、データベースを作成した。
- ・若年成人（20 歳代）の朝食欠食の要因を明らかにするために、親子を対象とした食意識・食態度、親の子どもへの食育・食事提供態度（CFSEQ）などの項目を含むアンケートを作成し、調査を実施した。現在約 1000 組を調査終了し、データベースの作成を行った。
- ・学校栄養士及び栄養教諭による食育の効果を評価するための断面調査の準備を開始した。フィールドの設定として全国 7 都道府県の小中学校 50 校の保護者約 30000 人を対象として設定し、15000 名の調査およびデータ入力を終了し、一部解析を行った結果、給食便り等の接触頻度が高いほど、家庭での食生活への波及効果が認められることを明らかにした。
- ・全国食育推進大会に参加し、食育の啓発活動を行った。本年度のテーマは「朝食欠食」「バランスのとれた食事」とした。来ブース者は約 1500 名であった。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

- ・人間ドック受診者を対象とした大規模コホートを確立し、肥満および生活習慣病のリスク因子解析のためのデータ収集を開始した。現在のところ約 3000 名の登録者と 2500 名のデータベースを収集した。また、肥満及

び糖尿病に遺伝子多型解析を開始し、遺伝子抽出を進め、食行動を遺伝子多型の関連性について明らかにし、論文として発表した。また、サブコホートを使って保健指導後の長期フォローアップ調査結果を解析した結果、男性と女性では、減量及び体重維持に対して食生活および身体活動の行動変容や維持能力が異なっていることを明らかにした。

- ・昨年度から継続して、2 研究所と共同で（南極昭和基地：国立極地研究所との共同研究、航海中船舶：航海訓練所との共同研究）給食内容および摂食状況等についての調査研究を行ない、食事提供における問題抽出を行い、時期にむけて提言を行った。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

- ・2007 年度に全国 6 ブロックで高齢者施設を対象として実施した食介護に関するアンケートの解析を進め、施設での食形態決定にはミールラウンズが最も活用されていることを明らかにした。本年度は、ミールラウンズにおける標準尺度表を作成するための追跡調査を、1633 施設を対象に行い、現在データベースを作成している。
- ・在宅高齢者の食事支援のあり方を確立する為に、特別養護老人施設と共同で、要支援・介護の 500 名の在宅高齢者の食生活実態調査を実施し、共食が高齢者の食事の満足感に影響を及ぼしていることを明らかにした。
- ・食介護に関するワークショップを開催し（約 200 名）、食介護の今後の方向性について食介護に関わる専門家と食事提供する企業と合同で検討した。

基礎栄養プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラム（プロジェクト）の概要

a. 脂質・糖代謝プロジェクト

マクロニュートリエント（脂質、炭水化物、蛋白質）の過剰摂取、過少摂取によって生じる病態や疾病の発症機序を分子レベルで解明し、その機序から疾病対応の食事、運動療法を考案する。

(2) 構成メンバー

プログラムリーダー：

江崎 治

プロジェクトリーダー：

三浦進司

(脂質・糖代謝プロジェクト)

上級研究員：

山崎聖美

研究員：

千葉 剛

客員研究員：

亀井康富 (東京医科歯科大学)

渡辺光博 (慶應義塾大学)

高橋真由美 (お茶の水女子大学)

技術補助員：

甲斐裕子、岸本杏子、榊原圭代子

宮澤未緒 (4月～2月)

研修生：

只石 幹 (東京農業大学)

2. 年度計画

a. 脂質・糖代謝プロジェクト

・身体活動量増加による肥満/糖尿病予防機序の解明

運動の急性効果：筋肉の脂肪燃焼機序が、安静時、非常に弱い身体活動 (NEAT)、弱い運動強度、強い運動強度において同じかどうか明らかにする。

運動の慢性効果：定期的に運動を行う人は、運動を行わない人に比べて同じ強さの運動をしても脂肪燃焼量が多くなり、エネルギー消費量も増加することが知られている。定期的に運動を行った場合、脂肪燃焼量増加を生じる機序について、骨格筋の β 2-adrenergic receptor, AMPK, LKB-1, PGC-1 α など脂肪燃焼に関わることが想定されている分子の役割を動物実験により明らかにする。

・肥満/脂肪肝発症原因別の食事療法の考案

飽和脂肪酸による脂肪肝、肥満の発症機序、その予防法を中心に研究を行う。飽和脂肪酸摂取による脂肪肝の原因として、脂肪肝発症の初期には、肝臓での PPAR γ 2 蛋白質量の増加が関与していることを明らかにしてきた。培養細胞中心に、PPAR γ 2 発現亢進機序、発現増加の阻止方法、脂肪蓄積亢進機序を明らかにする。又、脂肪食摂取後のキロミクロンの代謝変動が肝臓と脂肪組織での蓄積にどのような影響をあたえるか動物モデルを用いて明らかにする。

・脳出血予防のための食事療法の考案

脳卒中動物モデル (SHRSP) において、蛋白質 (カゼイン) の摂取増加は脳出血発症を遅らせる。アミノ酸組成、ペプチド、蛋白に含まれる微量成分、及びアミノ酸代謝産物のどれが原因か明らかにする。一方食事制限は慢性炎症を抑え、脳卒中罹患を予防する可能性が示唆されている。食事制限が慢性炎症を抑制する機序及びどのような炎症シグナルが脳出血発症に影響をあたえるか明らかにする。

3. プロジェクトの進捗状況 (成果)

a. 脂質・糖代謝プロジェクト

・これまでに低強度運動中の脂肪酸酸化亢進に骨格筋の LKB1 が関与することを明らかにしてきたが、今年度は日常生活における身体活動のような弱い強度での運動中の脂肪燃焼亢進には骨格筋 LKB1 は関与せず、ある一定強度以上の運動時に必要であることを明らかにした。運動時に骨格筋で発現が増加する転写共役因子 PGC-1 α はミトコンドリア量の増加を促進することが知られている。今年度の研究で、アイソフォーム PGC-1 α -b や PGC-1 α -c が β 2-アドレナリン受容体 (AR) の活性化を介して運動強度依存的にその発現量を増加するのに対し、アイソフォーム PGC-1 α -a は β 2-AR 活性化を介さずに、比較的強い強度の運動時にのみ発現増加することを明らかにし、運動強度により各 PGC-1 α アイソフォームの発現調節機序は異なることがわかった。

トレーニングを行うと骨格筋でのミトコンドリア量が増加するが、この増加がエネルギー消費量にどのように影響するのか、骨格筋でのミトコンドリア量増加が認められる PGC-1 α -b 過剰発現マウスを用いて検討した。その結果、骨格筋ミトコンドリア量増加によるエネルギー消費亢進が、身体活動中にのみ認められ安静時では亢進しないことが明らかになった。

・昨年度、飽和脂肪酸摂取による脂肪肝の原因として、脂肪肝発症の初期には、肝臓での PPAR γ 2 蛋白質量の増加が関与し、PPAR γ 2 蛋白質量を減少させると脂肪肝が改善することを示した。今年度は、大豆蛋白である β -コングリシニン をマウスに摂取させると、腸管での脂肪吸収を阻害しないで PPAR γ 2 蛋白の発現を抑制し、飽和脂肪酸摂取による脂肪肝を改善することを明らかにした。

・脳卒中動物モデル (SHRSP) において、蛋白質 (カゼイン) の摂取量増加は脳出血発症を遅らせる。今年度の研究で、植物性蛋白質 (大豆)、卵白蛋白質、カゼインに含まれるアミノ酸自体、及びアミノ酸代謝産物である尿素は脳出血発症を遅らせないことを明らかにした。又、動物性脂質 (バター) の摂取も脳出血発症を遅らせなかった。カゼイン (又は乳清蛋白質) に含まれるペプチド、又は微量成分が脳出血発症を予防する可能性が示唆された。

食品保健機能プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

中期目標は、健康増進法に基づく業務、及び、「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究を行う。

○健康増進法に基づく業務

- ・健康増進法第 27 条に基づき収去された特別用途食品、栄養表示された食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。
- ・特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術が確立している食品成分の試験業務は、検体の受理から試験の回答までを 2 ヶ月以内に行うことを目指す。
- ・分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。

○健康食品を対象とした食品成分の有効性及び健康影響評価に関する調査研究

- ・保健機能食品等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、栄養表示及び健康表示の側面から、健康影響について調査検討する。
- ・栄養素以外の食品成分から広く健康影響を持つ食品素材をスクリーニングして、癌抑制及び動脈硬化抑制効果等、ヒトにおける有効性評価について細胞モデル及び動物モデルを用いて検討する。

(2) プロジェクトの概要

a. 食品分析プロジェクト

- ・特別用途食品（病者用食品、乳児用調製粉乳、えん下困難者用食品、特定保健用食品など）許可申請時の食品成分分析を行う。
- ・収去食品の分析を行う。
- ・一般栄養成分及び特定保健用食品関与成分の分析方法の改良を行う。
- ・特定保健用食品の審査において、消費者庁に関与成分分析法について専門的観点から情報を提供する。

b. 補完成分プロジェクト

- ・予防・治療が望まれる慢性疾患に対して栄養素以外の食品成分から有効な成分を検索し、その有効性を評価する。

c. 食品機能プロジェクト

- ・食品のもつ抗酸化能の生体影響を明らかにするため、日常的に摂取している食品に着目して抗酸化力及び含有抗酸化成分の測定に関する基礎的研究を行う。
- ・食品の抗酸化能について、他機関と連携して統一的な分析方法の確立を目指す。
- ・栄養素及び非栄養素成分、特に構造脂質、脂溶性ビタ

ミン、ポリフェノール等について、その有効性と安全性の評価を行う。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

石見佳子

プロジェクトリーダー：

石見佳子（食品分析プロジェクト／～1 月）
松本輝樹（食品分析プロジェクト／2 月～）
石見佳子（補完成分プロジェクト）
永田純一（食品機能プロジェクト）

研究員：

松本輝樹（～1 月）
竹林 純
山内 淳（併任）

特別研究員：

大瀧（東京）裕子（リサーチレジデント）
津田治敏（11 月～）

客員研究員：

山田和彦
矢野友啓
太田篤胤
呉 堅
王 新祥
藤井康弘

協力研究員：

千葉大成
前田剛希

技術補助員：

町野（中村）礼、鈴木春奈、谷中かおる、小坂谷典子、鴨下渚（～6 月）、石井真由美（6 月～12 月）

研修生：

西出依子

2. 年度計画

a. 食品分析プロジェクト

- ・消費者庁の特別用途表示の許可等に関わる申請に基づく試験業務を期間内に実施するとともに、そのヒアリングに適切に対応する。
- ・健康増進法第 27 条に基づき収去された特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の分析業務を期間内に実施する。
- ・特定保健用食品関与成分の分析法、標準品の妥当性等を随時検討する。
- ・栄養表示基準における栄養成分の分析法について、より適切な分析手法の検討を行う。また、試験検査機器の有効利用及び整備の充実を図る。
- ・登録試験機関間の精度管理に関する試験を引き続き実施する。
- ・微生物定量法が主となっているビタミン類、特にナイ

アシンの測定に関して、食品形態に対応した機器分析法の導入を検討する。

- ・食品の抗酸化力の測定を他施設と共に実施し、データベースの充実を図る。また、抗酸化物質の摂取が、健康に及ぼす影響について調査研究を行う。

b. 補完成分プロジェクト

- ・脂溶性ビタミンの有用性を分子レベルで明らかにするために、生活習慣病に関与すると考えられるシグナル分子や転写因子の機能解析を行ない、脂溶性ビタミンの作用機構を明らかにする。

c. 食品機能プロジェクト

- ・機能性食品あるいは素材の組合せによる有効性と健康影響に及ぼす影響を検討する。
- ・新規リン脂質の機能性及び新規機能性脂肪酸の有用性と安全性に関する評価研究を行う。
- ・ポリフェノールを豊富に含む果実粉末の機能性の評価を行う。

3. 進捗状況(成果)

a. 食品分析プロジェクト

- ・22年度での申請食品7検体(特定保健用食品7検体)の分析を遅滞無く行った。消費者庁受託事業を遅滞無く実施した。
- ・消費者庁への特定保健用食品申請時の関与成分分析に関わるヒアリングに出席するとともに、内閣府食品安全委員会・新開発食品調査会の委員等として特定保健用食品の許可に関わる審査に参画した(ヒアリング:10日/年、調査会・部会:計4回/年)。
- ・分析方法の資料及び標準品等の情報収集と分析法の見直しを行った。
- ・栄養表示基準における栄養成分の分析方法について、各登録試験機関と協議を行い、分析法の改訂に向けた取組みを行った。
- ・登録試験機関間の分析精度管理体制の確立を目的とし、食品中のビタミンB₁₂、大豆イソフラボン、茶カテキン、難消化性デキストリンの分析について、「健康食品」を検体とした室間共同試験を実施し、分析方法の妥当性を確認した。
- ・ビタミンDの分析に関して、公定法の改良を行い、室間共同試験にて分析精度の向上および改良法の妥当性を確認した。また、カラムスイッチング法を応用した新規分析法についても検討した。
- ・微生物定量法が主たる分析法となっているナイアシンを対象に、HPLCにて乳児用調製粉乳を評価したところ、適切な抽出溶媒を選択することによって、表示値通りの試験結果が得られることが明らかとなった。
- ・日本において一般的に食されている23種類の野菜および13種類の果物の抗酸化力の測定を他施設と協力して実施し、野菜・果物からの抗酸化物質一日摂取総量を推算した。また、抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品(30種類)の抗酸化力を測定し、ほとんどの食品の抗酸化物質含有量は野菜・果物からの食経験の

範囲内であることを示した。

b. 補完成分プロジェクト

- ・閉経後女性を対象とし、脂溶性ビタミンであるビタミンK2(MK-4)の機能性を評価するための1年間の介入試験を実施した。
- ・ビタミンKの脂質代謝調節作用のメカニズムを検討するため、脂肪細胞の分化に対する影響を評価した。ビタミンK2(MK-4)は、脂肪細胞の分化の指標及び脂肪合成に関連する転写因子の発現を抑制する可能性が示唆された。
- ・大豆イソフラボンの代謝産物であるエクオールの骨及び脂質代謝調節作用のメカニズムを解明するため、破骨細胞の分化及び脂肪細胞の増殖と分化に対する影響を評価した。

c. 食品機能プロジェクト

- ・機能性食品あるいは素材の組合せによる有効性と健康影響に及ぼす影響について、体脂肪減少を示した食品素材の骨代謝へ及ぼす影響を検討した。体脂肪の減少と骨密度低下に正相関を観察し、成長期マウスにおける体脂肪が骨代謝に影響を及ぼす可能性が示唆された。現在、体脂肪が骨質や骨代謝に及ぼす影響をレプチン欠損モデルであるob/obマウスを用いて検討している。
- ・機能性脂肪酸の有用性と安全性に関する研究において、共役脂肪酸のin vitro試験を実施した。その結果、50μM濃度以上の共役リノレン酸の添加により、3T3-L1細胞に対して細胞傷害性を示した。25μMのプニカ酸と10t, 12c-共役リノール酸(CLA)は脂肪蓄積抑制効果を観察した。
- ・ポリフェノールを豊富に含むターミナリア・ベリリカ果実より抽出した粉末の機能性に着目し、体脂肪蓄積や脂質、糖代謝に及ぼす影響を調べた。1%TB食を摂取したマウスの血中TGおよびGOT濃度が有意に低下し、肝臓TG、血糖値、TBARS値、GPT濃度が低下傾向を示した。さらに糖負荷試験を行った結果、1%TB食を与えたラットでは空腹時血糖値の上昇を効果的に抑制した。

情報センター

1. センター／プロジェクトの概要

(1) センターの概要

情報センターは、当研究所の情報発信の中核としての役割を担っており、健康と運動・栄養に関する研究所内の成果、ならびに研究所外から公開されている関連情報を収集・分析し、国民の健康づくりに役立つ情報としてホームページやニュースレターを通じて発信する。また、特定保健用食品(特保)や栄養機能食品といった国の保健機能食品制度に関する基礎的情報、いわゆる健康食品が関連した被害情報など、国の健康や食品・栄養に係わる制度を効果的に普及させるための取り組みを行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 健康食品情報プロジェクト

健康食品に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止ならびに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、幅広く公開する。情報はホームページで一般公開し、ページアクセス数を6,000件/日以上維持できるようにする。また、社会的ニーズの把握、消費者とのリスクコミュニケーションの一つとして、現場の専門家、関係機関との連携が可能な新たなシステムの構築を検討する。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

所内の他のプログラムとの連携等により、これまでに収集・蓄積してきた情報を、ホームページ等を通じて継続発信するとともに、必要な情報の更新に努める。また、国民の要望や意見、健康・栄養分野の専門家が必要とする情報を、各種セミナー・シンポジウム等の機会や情報技術を用いて把握する。

c. IT支援プロジェクト

研究所の活動情報についてのデータベースや特許情報他、研究所の対外的な総合情報発信の基盤として、インターネットネットワーク、内部における研究活動の促進とデータの活用を促すためのイントラネットワーク、双方にまたがる総合的なネットワークシステムの基盤整備を行う。

(3) 構成メンバー

センター長：

梅垣敬三

プロジェクトリーダー：

梅垣敬三 (健康食品情報プロジェクト/1月まで併任)

千葉 剛 (健康食品情報プロジェクト/2月～)

卓 興鋼 (健康・栄養情報プロジェクト)

廣田晃一 (IT支援プロジェクト)

上級研究員

笠岡(坪山) 宜代 (健康食品情報プロジェクト/1月まで併任)

客員研究員：

橋本洋子 (秋草学園短期大学)

梅國智子 (人間総合科学大学)

江指隆年 (神奈川工科大学)

久保和弘 (奈良文化女子短期大学)

技術補助員：

鈴木順子、佐藤陽子、佐藤聡子、中西朋子、横谷馨倫、鈴木佳織、狩野照誉、瀧沢あす香、古池直子、海老原美樹、佐藤美津代、細井俊克、針生和典(～6月)、寺井尚子(～12月)

研修生：

近藤 渚 (昭和女子大学)

清水かおり (昭和女子大学、8月～)

甲斐 梢 (東京家政大学)

齋藤 瞳 (東京家政大学)

福島綾子 (東京家政大学)

飯島聡美 (東京家政大学、11月～)

梅原茉莉 (東京家政大学、11月～)

原麻由子 (東京家政大学、11月～)

2. 年度計画

a. 健康食品情報プロジェクト

- ・「健康食品」の安全性・有効性情報(<http://hfnet.nih.go.jp/>)のサイトに、最新の食品成分等の論文情報や健康食品が関連した健康被害情報を継続的に蓄積してサイトを充実させる。
- ・消費者とのリスクコミュニケーションを図るため、NRなど現場の専門職の支援、ならびに他の組織や機関との連携ができるシステム構築をさらに進める。
- ・公開した特別用途食品・栄養療法エビデンス情報(<http://fosdu.nih.go.jp/>)のサイトの内容を充実させ、現場栄養士との連携・協力ができる体制を整える。
- ・外部からの電話やメールの問い合わせについて適宜対応する。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

- ・「健康食品」等の機能性成分の健康影響に関する情報を系統的に調査・収集し、系統的レビュー・メタ分析による調査研究を行い、より質の高い科学的根拠を提供する。
- ・科学的根拠に基づく健康・栄養情報を整理し、ホームページ(機能性食品因子データベース)等にて継続的に発信する。
- ・機関誌「健康・栄養ニュース」の発行年4回、オープンハウス、一般公開セミナーの実施を通して、研究所の活動状況を積極的に紹介する。

- ・当研究所に必要な健康・栄養関連の図書等の情報を調査し適宜整理する。

c. IT 支援プロジェクト

- ・外部からの意見・要望等を広く効率的に把握するためのインターネットサイトの整備をさらに進め、収集された意見・要望等をすみやかに内部の業務に反映するためのイントラネット（周知用掲示板、メーリングリスト等）の整備を進める。
- ・所内各プログラムにおける研究成果及び研究所内外の関連情報を集約・加工し、ホームページ等を介して、国民が適切な運動・食生活を実践できるような情報として提供する。また、これまで収集・蓄積してきた健康・栄養情報の内容を適宜見直して充実させる。
- ・ホームページ等を活用した諸規程、職員の公募等、必要な情報開示を情報のセキュリティを確保しつつ実施する。
- ・イントラネットの活用方法の検討を行う。

3. 進捗状況（成果）

a. 健康食品情報プロジェクト

- ・『健康食品』の安全性・有効性情報に関して、ニーズ把握及びデータベースへのデータ追加を行った。作成した情報の内訳は、新規情報が約 220 件、更新・追記情報が約 270 件である。登録会員への更新情報メールの配信（毎月）、健康食品に関するメールや電話での問い合わせ、新聞などの取材に適宜対応した。サイトへのアクセス数は約 8,000 件/日であった。また、このデータベースの現在の情報提供のあり方を再考するためのアンケート調査を行い、現状を把握した。
- ・昨年度に新規公開した「特別用途食品・栄養療法エビデンス情報」データベースに適宜情報を追加した。追加した情報の内訳は、新規情報が約 54 件、更新・追記情報が 224 件である。サイトのアクセス数は、約 530 件/日であった。
- ・妊婦を対象にサプリメント利用に関する実態調査を行い、調査時に対象者から寄せられた質問に対し、ホームページ上で情報提供するとともに、「妊娠中の食事とサプリメントについて－赤ちゃんとお母さんのために－」と題したパンフレットを作成した。
- ・厚生労働省および日本医師会と協力し、「健康食品による健康被害の未然防止と拡大防止に向けて」と題したパンフレットした。また、一般消費者向けに健康食品の基本を学ぶための動画コンテンツを作成した。
- ・消費者センターに寄せられた健康食品の被害関連情報の実態を解析した。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

- ・平成 22 年 9 月 25 日（土曜日）にオープンハウス（研究所一般公開）と創立 90 周年記念講演会を同時開催した（参加者は 282 名）。オープンハウスの内容は、食生活診断、健康体力診断、骨密度測定、健康フィットネス体験、所内見学ツアー、NR 協会の協力を得た健康食品相談などである。

- ・機関誌「健康・栄養ニュース」年 4 回発行に努めた。また、研究所内セミナー等の予定を調整した。
- ・論文の系統的レビュー・メタ分析手法により、大豆成分の骨代謝マーカー、血圧、閉経期女性の Hot flushes、血中 Homocysteine に対する影響を評価した。また、ビタミン E、C、β-カロテン、セレン等の抗酸化成分の健康影響を評価している。
- ・当研究所に必要な健康・栄養関連の図書等の情報を整理し、文献の取り寄せ業務を行った。
- ・機能性食品因子データベース（FFF データベース）の維持管理、外部問合せへの対応を行った。現在トップページへの訪問は毎月 4000 件推移し、ページ全体で毎月約 46000 件のアクセスがある。また、継続的情報発信のために、改修・更新等に努めた。

c. IT 支援プロジェクト

- ・外部からの電話やメールでの問い合わせの適切な対応に努めた。メールによる問い合わせは、309 件であった。
- ・コミュニケーションチャンネル「健康・栄養フォーラム」における外部からの問い合わせは、57 件であった。
- ・研究所の活動内容・成果等をメールニュースの形で 1,785 名の読者に 4 回配信した。またホームページにおいて、研究所の最新情報を What's New の形 42 件掲載した。
- ・マンスリーレポートのデータ登録数は、768 件であった。
- ・最新健康・栄養ニュース（むく鳥通信）へのデータ登録数は、3,544 件であり、最新健康食品文献リスト（EBIS）へのデータ登録数は 20,504 件であった。
- ・8 月より最新健康・栄養ニュースのサイトデザインを一新した。2 月より最新健康・栄養ニュースの日刊メールマガジンの配信を試験的に開始した。
- ・サイトの一日あたりの平均アクセス（ページビュー）数は、HFNET を除く栄養研全体で平均 11,000 件/日、「健康・栄養フォーラム」のみで、平均 4,000 件/日であった。
- ・所内 LAN に新機能としてコミュニティサイトの試験運用を継続中である。
- ・新たなインターネット上の取組みとして、コミュニティサイト『えいこみ』を立ち上げ試験運用中である。
- ・「健康づくりに向けた『食育』取組データベース」サイトのデザインを一新した。
- ・情報セキュリティ確保のために、セキュリティ用ハードウェアのアップデートを月 1 回行い監視体制の強化を継続するとともに、年 6 回のセキュリティ講習会（感染研と共同開催）、年 2 回のセキュリティ監査（1 回は感染と共同実施）を実施した。また「セキュリティ対策実施手順書」の見直しを行った。

国際産学連携センター

1. センター／プロジェクトの概要

(1) センターの概要

国際産学連携センターは、当研究所の対外部門として、アジア地域をはじめとする国際的な研究ネットワークの構築、海外との学术交流や若手外国人研究者の受け入れ、大学や企業等との連携による研究開発、国際シンポジウムやセミナーの開催など、当研究所が国内外の関係機関等と連携して行うさまざまなプログラムの調整役を担っている。

(2) プロジェクトの概要

A. 国際栄養プロジェクト

国際栄養プロジェクトは国際的な学术交流(招へい事業、セミナー開催等)、情報提供及び国際機関との協力を行う。具体的には、海外からの研修生の受け入れ(「若手外国人研究者招へい事業」等)、国際シンポジウムの開催、アジア各国との共同研究、WHOなど国際機関への協力・連携、海外向け情報発信等を通じて、国際的な研究ネットワーク構築を図ることを目指している。

B. 生物統計プロジェクト

特定保健用食品等の有効性評価を目的としたヒト試験デザインに関して、主として統計学的観点からの検討を行う。メタボリックシンドローム等に関連する各種健康・栄養指標に関して、国全体としての推移、また都道府県地域差等を評価する手法の検討及び将来予測のためシミュレーションを行う。

C. NR・セミナー・社会ニーズ関係

「対外部門」としての国際産学連携センターの中で、講演会・セミナー等を通じた人材育成、栄養情報担当者(NR)の学術的基盤づくり、行政部門との各種調整等を行っている。

・NR業務(事務部業務課との連携)

栄養情報担当者(NR)事業の学術面(試験、研修等)への対応を行う。NR制度のあり方や研究所の関わりについて検討を行う。

・セミナー業務

管理栄養士等の専門家を対象としたセミナーの企画・運営、外部団体・機関と連携した各種人材育成プログラムの企画等を、中長期的な視点から行う。研究の成果を社会に還元するため、一般向けセミナーを開催する。社会的ニーズを把握するため関連機関等と定期的な情報交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握する。

(3) 構成メンバー

センター長:

西 信雄

プロジェクトリーダー:

笠岡(坪山) 宣代

(国際栄養プロジェクト)

水野正一 (生物統計プロジェクト)

調整担当 上級研究員(併任):

笠岡(坪山) 宣代

研究員:

三好美紀

客員研究員

溝上哲也((独)国立国際医療研究センター研究所)

協力研究員

南里明子((独)国立国際医療研究センター研究所)

細川裕子(目白大学)

桑木泰子((株)ウェル・ビーイング)

菊池有利子(ミネソタ大学、平成23年2月～)

技術補助員:

當間奈月、角倉知子、マサハート由華、小原恭子、

植 朋子

研修生:

Hynju Jung(ソウル国立大学、～平成22年8月)

2. 年度計画

A. 国際栄養プロジェクト

「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」で2名(中国、マレーシア)の研究者を受け入れる。また、同事業による過去の招へい研究者と受入研究者との共同研究の推進に努める。「IUNS(国際栄養科学連合)栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ」および「第4回アジア栄養ネットワークシンポジウム」を開催し、アジアの栄養研究所とのネットワークづくりを進める。WHO指定研究協力センターとして指定を受け、共同研究、人材育成、情報発信等のアジア西太平洋地域への協力活動を強化する。国際機関との連携を積極的に行い、国際協力、支援を推進する。研究所の研究成果、わが国の栄養・運動施策上の重要なガイドライン等について、適時、英語版ホームページを通じて情報発信を行う。

B. 生物統計プロジェクト

・食品の機能性評価

臨床試験のデザイン、結果の解析、メタ分析等を実施する。

・メタボリックシンドローム関連健康指標評価

特に、腎機能の維持と低下予防に焦点を当て、地域住民健診や人間ドックをベースとした長期縦断的データベースを構築し、栄養疫学的な解析を実施する

C. NR・セミナー・社会ニーズ関係

NRの資格取得後のフォローアップ研修として、全国5～6カ所で研修会を実施する。NR制度の認知度向上、職域拡大等を目的としてNRに関する情報収集、モニタリング調査等を行うとともに、他のアドバイザースタッフ養成団体等との連携を図る。一般向けの公開セミナー(第12回)を、平成23年2月に東京で開催する。健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等他機関との連携、およびニーズ把握のための意見交換会を年6回程度開催する。

3. 進捗状況 (成果)

A. 国際栄養プロジェクト

・海外の研究機関との交流・共同研究および国際機関の活動への対応

栄養と肥満に関する共同研究をアジア太平洋地域 (ベトナム、パプアニューギニア) の保健省および研究機関等と各国の栄養問題を踏まえた共同研究を実施している。国際機関の活動への対応としては、本年度、WHO の GEMS/Food Collaborating Institutions として正式認定を受け、食品安全に関して食品摂取量把握の部分でデータを提出し国際貢献を行った。また、WHO 西太平洋地域における "Nutrition, Physical Activity and Population Health" に関する WHO 指定研究協力センターの設立に向けて正式申請を行った。WHO 担当官らとの会談を実施し、アジア西太平洋地域において研究所としての貢献が期待されている内容を盛り込んだ。

・海外からの訪問・研修受入

本年度の「若手外国人研究者招へい事業」では、中国より 1 名、マレーシアより 1 名の研究者を受け入れ、受入研究者との共同研究を進めた。来年度の招へい研究者 2 名が決定しており、現在、受入および来日に係る準備手続きを進めている。

また、他機関からの依頼による研修受入れとして、本年度は JICA より 1 件 (JICA カウンターパート研修 (エチオピア) 1 日) を受け入れ、講義を実施した。海外からの視察訪問も随時、要請に応じて受け入れており、本年度はマレーシア、タイ、オーストラリア等からの研究者の訪問を受け入れ、意見交換を開催した。

・国際シンポジウム・セミナー

前年度より日本学術会議 IUNS 分科会および日本栄養改善学会、日本栄養・食糧学会との連携のもとで準備を進めていた「IUNS (国際栄養科学連合) 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ (平成 22 年 9 月 7-9 日開催)」を開催し、栄養分野 (特に、食育、地域栄養、機能的食品) の国際的リーダーの育成を推進した。また、同ワークショップと連動して「第 4 回アジア栄養ネットワークシンポジウム (平成 22 年 9 月 8 日開催)」を開催し、「アジアにおける栄養教育：学校給食制度の取り組みについて」をテーマとして、アジア各国の現状および今後の方向性について議論を深めることができた。

・広報・情報発信

英語版ホームページを通して、研究所の研究成果、栄養行政の情報を発信している。研究所のニュースレター「健康・栄養ニュース」(年 4 回発行)の英語版「Health and Nutrition News」を作成し、英語版ホームページに掲載している。英語版ホームページに問い合わせ用メールアドレスを掲載し、海外からの問い合わせに対応している。

B. 生物統計プロジェクト

食品の機能的評価のため、臨床試験のデザイン、結果の解析、メタ分析等において、生物統計学サポートを行った。また、現在、日本人男性では 50 人に 1 人、女性では 100 人に 1 人程度が透析の生涯リスクを有し、メタボリックシンドローム関連指標に加え腎機能の維持と低下予防要因を、運動や食生活習慣のなかに見出す目的で、

長期継続健診受診記録をデータベース化し、栄養疫学的に解析することを行っている。食事・栄養療法の臨床実践データの再解析からは、低たんぱく食により、尿たんぱく量が減少し、ひいては腎機能維持に有利であることが示唆されていた。一般地域健康診断受診者のデータベース解析では、腎臓病既往者に eGFR 年低下が大きな対象が見受けられること、糖尿病既往者では罹病機が 20 年以上の対象にて eGFR 年低下の大きなことが見出された。たんぱく質摂取との解析では尿蛋白レベル (-) → (+) にて関連性が示唆された。

C. NR・セミナー・社会ニーズ関係

・NR の養成・認定

公平・公正な制度運用を期すために、外部有識者を加えた NR 認定委員会を開催し、厳格な試験を実施した。

平成 22 年度に実施した「第 7 回栄養情報担当者 (NR) 認定試験」(平成 22 年 6 月 13 日実施) では、新たに 595 名の NR (受験者数 1,164 名、合格率 51.1%) が誕生し、累計で 4,574 名に NR の資格を付与した (今年度から受験資格を付与した、6 年生薬学部在在生の薬学共用試験合格の資格で受験した者のうち、大学卒業の届出により資格を付与する者は 114 名)。また「第 8 回資格確認試験」(平成 22 年 11 月 14 日実施) では、受験者数 215 名、合格者 108 名 (合格率 50.2%) であった。

養成講座については、平成 22 年度に新たに 3 講座を指定し、全国における講座数は計 43 講座となった。

・NR 事業の学術面への対応

資格確認試験 (第 8 回; 平成 22 年 11 月)、NR 認定試験 (第 7 回; 平成 22 年 6 月、第 8 回; 平成 23 年 6 月) の問題作成に関わる進行管理を行った。過去問題のデータベース化等を通じて、問題作成の効率化を図った。

・NR 研修会の開催

NR のスキルアップの一環として、当研究所が主催するフォローアップ研修会を、全国 6 カ所 (仙台、大阪、名古屋、岡山、福岡、東京) で計 6 回開催、平成 21 年度に引き続き他団体との相互単位認定を行った。

・NR 認定制度についての検討など

平成 22 年に厚生労働省が行った省内事業仕分けの結果を踏まえ、有資格者や資格取得希望者及び講座運営機関 (主に大学や専修学校) の対応に支障が生じないように配慮しつつ、国の通知によるアドバイザースタッフの取得事項を満たす科学的な水準の維持と中立・公正な制度運営の確保が図れる第三者機関に事業の移管をするための検討を進めている。

引き続き健康食品管理士認定協会との協力関係を深め、協会主催の研修会参加で認定更新に必要な単位を付与した。

・社会ニーズ、意見交換会

健康・栄養に関する機関 ((独) 国立がん研究センター、(独) 農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所、(独) 国民生活センター、(社) 日本栄養士会、国立保健医療科学院、(財) 健康・体力づくり事業財団) との「意見交換会」を年 6 回実施した。また、消費者庁食品表示部、厚生労働省医薬食品局食品安全部及び健康局総務課生活習慣病対策室との間で、幹部レベルでの意見交換会および実務者レベルでの情報及び意見交換

会を行い、行政ニーズに適宜対応した業務体制を整え、
とともに、次期中期計画に反映させた。

・セミナー

第 12 回一般向け公開セミナー(テーマ：生活習慣病を
予防する食生活・身体活動一見つけよう、あなたに合っ
た健康づくり―)を平成 23 年 2 月 26 日(土)に開催した。

また、栄養士・管理栄養士の研修や生涯教育のプログ
ラムに対し、職員を積極的に派遣するとともに、それら
のプログラムの企画等への支援を行った。

Ⅲ 研究成果等の公表

1. 業績目録

【著書】

a. 英文

- 1) Tokudome S: Gastric Cancer..Edited by Tuncer AM., In Cancer Report 2010. 2010; , Asian Pacific Organization for Cancer Prevention
- 2) Kuno S, Zempou H, Murakami H: Mitochondrial DNA Sequence Variation and Performance.. Edited by Bouchard C. and Hoffman EP., In Genetic and Molecular Aspects of Sports Performance. . 2011; , Wiley-Blackwell

b. 和文

- 1) 徳留信寛: 生活習慣病、特に、がんの予防とコントロール. 親子のための食育読本. 2010; 132-140, 内閣府食育推進室
- 2) 田中平三, 徳留信寛: よくわかる食事摂取基準DRIエッセンシャルガイド (Dietary Reference Intakes: The Essential Guide to Nutrient Requirements. Otten JJ, Hellwig JP, Meyers LD. 2010; , 医歯薬出版
- 3) 森田明美: 食事摂取基準の概念と利用法. 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック. 2010; 7(1):59-74, 第一出版株式会社
- 4) 高田和子: サーカディアンリズムと栄養. 金子佳代子、高田和子編、改定環境・スポーツ栄養学. 2010; , 建帛社
- 5) 田中茂穂: 第2章 エネルギーと栄養素の必要量. (独) 国立健康・栄養研究所監修、戸谷誠之・伊藤節子・渡邊令子編、応用栄養学. 2010; 37-65, 南江堂
- 6) 高田和子: エネルギー (翻訳). 日本栄養改善学会監修、よくわかる食事摂取基準DRIエッセンシャルガイド. 2010; , 医歯薬出版
- 7) 宮地元彦: vol.2 呼吸・循環器系の科学 (DVD). 目で見える運動生理学 第2版. 2010; , 医学映像教育センター
- 8) 高田和子: トレーニングとエネルギー消費量. 樋口満編、スポーツ現場に生かす運動生理・生化学. 2011; , 市村出版
- 9) 宮地元彦: ヘルスプロモーション (健康づくり) 施策とスポーツ振興、IV. スポーツ振興に影響する施策と関連法、第10章 スポーツの行政機構と施策. スポーツ白書. 2011; 200-201, 笹川スポーツ財団
- 10) 饗場直美: 野菜たっぷり、油分控えめ、ほんの少しの工夫が差を生む【食事バランスガイド】活用術. 主婦の友者編 「お腹まわりにぐぐつと効く本」. 2010; 64-69, 主婦の友社
- 11) 江崎治: 脂質異常症・肥満. 独立行政法人 国立

健康・栄養研究所 監修 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック (第7版) .

2010; 287-292, 第一出版

- 12) 江崎治: 摂取エネルギー量と栄養素配分. 糖尿病診療2010(日本医師会雑誌 特別号) . 2010; 139(2):S142-S145, 日本医師会
- 13) 渡辺純, 沖智之, 竹林純, 山崎光司: 【第III編 食品鮮度および機能測定法】 第4章 ORAC法 ~ORAC法の特徴と標準法としての位置づけ~. 農産物・食品検査法の新展開. 2010; , シーエムシー出版
- 14) 石見佳子, 東泉裕子: スポーツ選手の体調管理とビタミン・ミネラル. スポーツ現場に生かす運動生理・生化学 樋口満編. 2011; 143-157, 市村出版
- 15) 石見佳子: 特別用途食品、栄養機能食品、骨粗鬆症、ヒトを対象とした研究. 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック. 2010; 7(1) 第一出版株式会社
- 16) 梅垣敬三: なぜ健康食品をもとめるのか.. 津金昌一朗編 食の文化フォーラム28. 2010; 176-197, ドメス出版
- 17) 梅垣敬三: 癌の予防や治療に関するサプリメント. 癌と臨床栄養. 2010; 115-121, 日本医事新報社
- 18) 梅垣敬三: 健康食品の安全性・有効性情報データベース(第2編食品機能性素材の安全性概論) (分担執筆). 食品機能素材IV. 2010; , CMC出版
- 19) 芝池伸彰: 公正・科学的な健康食品情報. 田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ、佐々木敏編 公衆栄養学. 2010; 77-78, 南江堂
- 20) 西信雄: 第5章 割合の検定. 論文を正しく読み書くためのやさしい統計学 改訂第2版. 2010; 47-58, 診断と治療社
- 21) 西信雄: 第14章 標準化. 論文を正しく読み書くためのやさしい統計学 改訂第2版. 2010; 131-142, 診断と治療社

【原著論文】

a. 英文

- 1) Tanaka F, Yamamoto K, Suzuki S, Inoue H, Tsurumaru M, Kajiyama Y, Kato K, Igaki H, Furuta K, Fujita H, Tanaka T, Tanaka Y, Kawashima Y, Natsugoe S, Setoyama T, Tokudome S, Mimori K, Haraguchi N, Ishii H, Mori M: Strong interaction between the effects of alcohol consumption and smoking on esophageal squamous cell carcinoma among individuals with ADH1B and/or ALDH2 risk alleles. Gut. 2010; 59:1457-1464
- 2) Promthet SS, Pientong C, Ekalaksananan T,

- Wiangnon S, Poomphakwaen K, Songserm N, Chopjitt P, Moore MA, Tokudome S: Risk factors for colon cancer in Northeast Thailand: interaction between the MTFHR codon 677 and 1298 polymorphisms and environmental factors. *J. Epidemiol.* 2010; 20:329-338
- 3) Shibata K, Suzuki S, Sato J, Ohsawa I, Goto S, Hashiguchi M, Tokudome S: Abdominal circumference should not be required criterion for the diagnosis of metabolic syndrome. *Environ. Health Prev. Med.* 2010; 15:229-235
 - 4) Marumoto M, Suzuki S, Hosono A, Arakawa K, Shibata K, Fuku M, Goto C, Tokudome Y, Hoshino H, Imaeda N, Kobayashi M, Yodoi J, Tokudome S: Changes of thioredoxin concentrations: an observation in an ultra-marathon race. *Environ. Health Prev. Med.* 2010; 15:129-134
 - 5) Wang J, Jiang J, Zhao Y, Gajalakshmi V, Kuriki K, Suzuki S, Nagaya T, Nakamura S, Akasaka S, Ishikawa H, Tokudome S: Genetic polymorphisms of glutathione S-transferase genes and susceptibility to colorectal cancer: A case-control study in an Indian population. *Cancer Epidemiology.* 2010; 35:66-72
 - 6) Yoshita K, Arai Y, Nozue M, Komatsu K, Ohnishi H, Saitoh S, Miura K: Total Energy Intake and Intake of Three Major Nutrients by Body Mass Index in Japan: NIPPON DATA80 and NIPPON DATA90. *J Epidemiol.* 2010; 20(Suppl 3):S515-S523
 - 7) Fujii H, Muto T, Haruyama Y, Nakade M, Kobayashi E, Ishisaki K, Yamasaki A: Community-based lifestyle modification of cardiovascular disease risks in middle-aged Japanese: a 27-month update.. *Tohoku J Exp Med.* 2010; 220(4):307-318
 - 8) Takaoka T, Sarukura N, Ueda C, Kitamura Y, Kalubi B, Toda N, Abe K, Yamamoto S, Takeda N: Effects of zinc supplementation on serum zinc concentration and ratio of apo/holo-activities of angiotensin converting enzyme in patients with taste impairment. *Auris Nasus Larynx.* 2010; 37(2):190-194
 - 9) Inoue E, Yamashita A, Inoue H, Sekiguchi M, Shiratori A, Yamamoto Y, Tadokoro T, Ishimi Y, Yamauchi J: Identification of glucose transporter 4 knockdown dependent transcriptional activation element on the retinol binding protein 4 gene promoter and requirement of the 20 s proteasome subunit for transcriptional activity. *J. Biol. Chem.* 2010; 285(33):25115-25125
 - 10) M Seki, R Inoue, T Ohkubo, M Kikuya, A Hara, H Metoki, T Hirose, T. Utsugi M, K Asayama, A Kanno, T Obara, H Hoshi, K Totsune, H Satoh, Y Imai: Asociation of environmental tobacco smoke exposure with elevated home blood pressure in Japanese women: the Ohasama study. *Journal of Hypertension.* 2010; 28(9):1814-1820
 - 11) Nozue M, Yoshita K, Jun K, Ishihara Y, Taketa Y, Naruse A, Nagai N, Ishida H: Amounts served and consumed of school lunch differed by gender in Japanese elementary schools . *Nutrition Research and Practice.* 2010; 4(5):400-404
 - 12) Ai-Ti Tseng, Hsiao-Cheng Tsao, Sarukura N, Kuo-Chin Huang, Ming-Fu Wang, Po-Chao Huang, Tzu-Fang Hsu, Yamamoto S: Development of a Food Composition Database of Refined Monosaccharides and Disaccharides in Snacks. *Nutr Sci J .* 2010; 35(4):127-137
 - 13) T. Utsugi M, T Ohkubo, M Kikuya, H Metoki, A Kurimoto, K Suzuki, N Fukushima, A Hara, K Asayama, H Satoh, Y Tsubono, Y Imai: High Fruit Intake is associated with Lower Risk of Future Hypertension determined by Home Blood Pressure Measurement: The OHASAMA study.. *Journal of Human Hypertension.* 2011; 25(3):164-171
 - 14) Zempo H, Tanabe K, Murakami H, Iemitsu M, Maeda S, Kuno S: ACTN3 polymorphism affects thigh muscle area.. *Int J Sports Med.* . 2010; 31(2):138-142
 - 15) Ueshima Kazumune, Ishikawa-Takata K, Yorifuji Takashi, Suzuki Etsuji, Kashima Saori, Takao Soshi, Sugiyama Masumi, Ohta Toshiki, Doi Hiroyuki: Physical activity and mortality risk in the Japanese elderly a cohort study. *Am J Prev Med.* 2010; 2010(38):410-418
 - 16) Taguri E, Tanaka S, Ohkawara K, Ishikawa-Takata K, Hikiyama Y, Miyake R, Yamamoto S, Tabata I: Validity of physical activity indices for adjusting energy expenditure for body size: do the indices depend on body size?. *J Physiol Anthropol.* 2010; 29(3):109-117
 - 17) Cao ZB, Miyatake N, Higuchi M, Miyachi M, Tabata I: Predicting VO(2max) with an objectively measured physical activity in Japanese men.. *Eur J Appl Physiol.* 2010; 109(3):465-472
 - 18) Iemitsu M, Murakami H, Sanada K, Yamamoto K, Kawano H, Gando Y, Miyachi M: Lack of carotid stiffening associated with MTHFR 677TT genotype in cardiorespiratory fit adults.. *Physiol Genomics.* 2010; 42(2):259-

- 265
- 19) Gando Y, Yamamoto K, Murakami H, Ohmori Y, Kawakami R, Sanada K, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: Longer Time Spent in Light Physical Activity Is Associated with Reduced Arterial Stiffness in Older Adults with Hypertension. 2010; 56(3):540-546
 - 20) Miyatake N, Numata T, Nishi K, Sakano N, Suzue T, Hirao T, Miyachi M, Tabata I: Relation between cigarette smoking and ventilatory threshold in the Japanese. Environ Health Prev Med. 2010;
 - 21) Sanada K, Miyachi M, Tanimoto M, Yamamoto K, Murakami H, Okumura S, Gando Y, Suzuki K, Tabata I, Higuchi M: A cross-sectional study of sarcopenia in Japanese men and women: reference values and association with cardiovascular risk factors. Eur J Appl Physiol. 2010; 110(1):57-65
 - 22) Miyatake N, Miyachi M, Tabata I, Numata T: The relationship between daily step counts and medical costs in Japanese: Ecological study. Journal of District Environment/Health/Welfare Research. 2010; 13(1):54-56
 - 23) Miyatake N, Miyachi M, Tabata I, Sakano N, Suzue T, Hirao T, Numata T: Evaluation of ventilatory threshold and its relation to exercise habits among Japanese. Environ Health Prev Med. 2010; 15:374-380
 - 24) Gando Y, Yamamoto K, Kawano H, Murakami H, Ohmori Y, Kawakami R, Sanada K, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: Attenuated age-related carotid arterial remodeling in adults with high level of cardiorespiratory fitness. J Atheroscler Thromb. 2010; In press:
 - 25) Kawano H, Tanimoto M, Yamamoto K, Gando Y, Sanada K, Tabata I, Higuchi M, Miyachi M: Greater forearm venous compliance in resistance-trained men. Eur. J. Appl. Physiol. 2010; 110(4):769-777
 - 26) Ozaki H, Miyachi M, Nakajima T, Abe T: Effects of 10- Weeks Walk Training With Leg Blood Flow Reduction on Carotid Arterial Compliance and Muscle Size in the Elderly Adults. Angiology. 2010; 62(1):81-86
 - 27) Ohkawara K, Oshima Y, Hikiyama Y, Ishikawa-Takata K, Tabata I, Tanaka S: Real-time estimation of daily physical activity intensity by triaxial accelerometer and a gravity-removal classification algorithm. Br J Nutr (Epub ahead of print). 2011;
 - 28) Kawahara J, Tanaka S, Tanaka C, Hikiyama Y, Aoki Y, Yonemoto J: Estimation of respiratory ventilation rate of preschool children in daily life by using an accelerometer. J Air & Waste Manage. 2011; 61(1):46-54
 - 29) Osaka T: Hypoxia-induced hypothermia mediated by noradrenaline and nitric oxide in the rostromedial preoptic area. Neuroscience. 2011;
 - 30) Taguchi M, Ishikawa-Takata K, Tatsuta W, Katsuragi C, Usui C, Sakamoto S, Higuchi M: Resting energy expenditure can be assessed by fat-free mass in female athletes regardless of body size. J Nutr Sci Vitaminol. 2011; 57:22-29
 - 31) Sanada K, Iemitsu M, Murakami H, Tabata I, Yamamoto K, Gando Y, Suzuki K, Higuchi M, Miyachi M: PPAR γ 2 C1431T genotype increases metabolic syndrome risk in young men with low cardiorespiratory fitness. Physiol Genomics. 2011; 43(3):103-109
 - 32) Suzuki Y, Inoue S, Shimizu H, Ishizuka N, Kasahara Y, Takahashi T, Arai K, Kobayashi Y, Kishi M, Imazeki N, Senoo A, Osaka T: Cell proliferation in visceral organs induced by ventromedial hypothalamic (VMH) lesions: Development of electrical VMH lesions in mice and resulting pathophysiological profiles. Endocrine Journal. 2011;
 - 33) Ishikawa-Takata K, Naito Y, Tanaka S, Ebine N, Tabata I: Use of doubly labeled water to validate a physical activity questionnaire developed for the Japanese population. J Epidemiol. 2011; 21(2):114-121
 - 34) Igarashi M, Osuga JI, Uozaki H, Sekiya M, Nagashima S, Takahashi M, Takase S, Takanashi M, Li Y, Ohta K, Kumagai M, Nishi M, Hosaokawa M, Fledelius C, Jacobsen P, Yagyu H, Fukayama M, Nagai R, Kadowaki T, Ohashi K: The critical role of neutral cholesterol ester hydrolase 1 in cholesterol removal from human macrophages. Circ. Res. 2011; 107:1387-1395
 - 35) Iwabu M, Yamauchi T, Okada-Iwabu M, Sato K, Nakagawa T, Funata M, Yamaguchi M, Namiki S, Nakayama R, Tabata M, Ogata H, Kubota N, Takamoto I, Hayashi YK, Yamauchi N, Waki H, Fukayama M, Nishino I, Tokuyama K, Kadowaki T: Adiponectin and AdipoR1 regulate PGC1 α and mitochondria by Ca²⁺ and AMPK/SIRT1. Nature. 2010; 464(7293):1313-1319
 - 36) Katsuura S, Kamezaki Y, Tominaga K, Masuda K, Nishida K, Yamamoto Y, Takeo K, Yamagishi N, Tanahashi T, Kawai T, Rokutan K: High-throughput screening of brief naturalistic stress-responsive cytokines in university students taking examinations.

- Int J Psychophysiol. 2010; 77(2):135-140
- 37) Takahashi I, Yamada Y, Kadowaki H, Horikoshi M, Kadowaki T, Narita T, Tsuchida S, Noguchi A, Koizumi A, Takahashi T: Phenotypical variety of insulin resistance in a family with a novel mutation of the insulin receptor gene.. Endocr. J.. 2010; 57(6):509-516
 - 38) Waki K, Terasaki PI, Kadowaki T: Long-term pancreas allograft survival in simultaneous pancreas-kidney transplantation by era: UNOS registry analysis.. Diabetes Care. 2010; 33(8):1789-1791
 - 39) Kurokawa J, Arai S, Nakashima K, Nagano H, Nishijima A, Miyata K, Ose R, Mori M, Kubota N, Kadowaki T, Oike Y, Koga H, Febbraio M, Iwanaga T, Miyazaki T: Macrophage-derived AIM is endocytosed into adipocytes and decreases lipid droplets via inhibition of fatty acid synthase activity.. Cell Metabolism. 2010; 11(6):479-492
 - 40) Noda M, Kato M, Takahashi Y, Matsushita Y, Mizoue T, Inoue M, Tsugane S, Kadowaki T: Fasting plasma glucose and 5-year incidence of diabetes in the JPHC diabetes study - suggestion for the threshold for impaired fasting glucose among Japanese.. Endocr. J.. 2010; 57(7):629-637
 - 41) Muraoka T, Aoki K, Iwasaki T, Shinoda K, Nakamura A, Aburatani H, Mori S, Tokuyama K, Kubota N, Kadowaki T, Terauchi Y: Ezetimibe decreases SREBP-1c expression in liver and reverses hepatic insulin resistance in mice fed a high-fat diet.. Metabolism. 2010;
 - 42) Helfand, Imai S, Itoh H, Kadowaki T, Koya D, Leeuwenburgh C, Mcburney M, Nabeshima Y, Neri C, Oberdoerffer P, Pestell RG, Rogina B, Sadoshima J, Sartorelli V, Serrano M, Sinclair DA, Steegborn C, Tatar M, Tissenbaum HA, Tong Q: Dietary restriction: Standing up for sirtuins. Science. 2010; 329:1012-1015
 - 43) Yamauchi T, Hara K, Maeda S, Yasuda K, Takahashi A, Horikoshi M, Nakamura M, Fujita H, Grarup N, Cauchi S, Ng DP, Ma RC, Tsunoda T, Kubo M, Watada H, Maegawa H, Okada-Iwabu M, Iwabu M, Shojima N, Kadowaki T: A genome-wide association study in the Japanese population identifies susceptibility loci for type 2 diabetes at UBE2E2 and C2CD4A/B. Nature Genetics. 2010; 42(10):864-868
 - 44) Kadowaki T, Nishida T, Kaku K: 28-week, randomized, multicenter, open-label, parallel-group phase III trial to investigate the efficacy and safety of biphasic insulin aspart 70 thrice-daily injections vs twice-daily injections of biphasic insulin aspart 30 in patients with type 2 diabetes. J. Diabetes Invest. 2010; 1:103-110
 - 45) Seino Y, Nanjo K, Tajima N, Kadowaki T, Kashiwagi A, Araki E, Ito C, Inagaki N, Iwamoto Y, Kasuga M, Hanafusa T, Haneda M, Ueki K: Report of the Committee on the classification and diagnostic criteria of diabetes mellitus. Diabetol. Int. 2010; 1:2-20
 - 46) Seino Y, Nanjo K, Tajima N, Kadowaki T, Kashiwagi A, Araki E, Ito C, Inagaki N, Iwamoto Y, Kasuga M, Hanafusa T, Haneda M, Ueki K: Report of the Committee on the classification and diagnostic criteria of diabetes mellitus. J. Diabetes Invest. 2010; 5:212-228
 - 47) Sakoda H, Ito S, Kanda H, Fujishiro M, Osuga JI, Tsukamoto K, Ueki, Kadowaki T: Association between type 1 diabetes mellitus and remitting seronegative symmetrical synovitis with pitting edema: A case report.. Diabetes Res. Clin. Pract.. 2010;
 - 48) Kurokawa K, Kuwano Y, Tominaga K, Kawai T, Katsuura S, Yamagishi N, Satake Y, Kajita K, Tanahashi T, Rokutan K: Brief naturalistic stress induces an alternative splice variant of SMG-1 lacking exon 63 in peripheral leukocytes. Neurosci Lett. 2010; 484(2):128-132
 - 49) Misu H, Takamura T, Takayama H, Hayashi H, Matsuzawa-Nagata N, Kurita S, Ishikura K, Ando H, Takeshita Y, Ota T, Sakurai M, Yamashita T, Mizukoshi E, Yamashita T, Honda M, Miyamoto K, Kubota T, Kubota N, Kadowaki T, Kim HJ: A liver-derived secretory protein, selenoprotein P, causes insulin resistance.. Cell Metab. 2010; 12(5):483-495
 - 50) Ohta K, Sekiya M, Uozaki H, Igarashi M, Takase S, Kumagai M, Takanashi M, Takeuchi Y, Izumida Y, Kubota M, Nishi M, Okazaki H, Iizuka Y, Yahagi N, Yagyu H, Fukayama M, Kadowaki T, Ohashi K, Ishibashi S, Osuga JI: Abrogation of neutral cholesterol ester hydrolytic activity causes adrenal enlargement.. Biochem. Biophys. Res. Commun.. 2010;
 - 51) Kumagai K, Kubota N, Saito TI, Sasako T, Takizawa R, Sudo K, Kurokawa M, Kadowaki T: Generation of transgenic mice on an

- NOD/SCID background using the conventional microinjection technique.. *Biol. Reprod.* 2010;
- 52) Kaneko K, Ueki K, Takahashi N, Hashimoto S, Okamoto M, Awazawa M, Okazaki Y, Ohsugi M, Inabe K, Umehara T, Yoshida M, Kakei M, Kitamura T, Luo J, Kulkarni RN, Kahn CR, Kasai H, Cantley LC, Kadowaki T: Class IA phosphatidylinositol 3-kinase in pancreatic β cells controls insulin secretion by multiple mechanisms. *Cell Metabolism*. 2010; 12:619-632
 - 53) Yamamoto Y, Tanahashi T, Katsuura S, Kurokawa K, Nishida K, Kuwano Y, Kawai T, Teshima-Kondo S, Chikahisa S, Tsuruo Y, Sei H, Rokutan K: Interleukin-18 deficiency reduces neuropeptide gene expressions in the mouse amygdala related with behavioral change. *J Neuroimmunol*. 2010; 229(1-2):129-139
 - 54) Grarup N, Overvad M, Sparso T, Witte DR, Pisinger C, Jorgensen T, Yamauchi T, Hara K, Maeda S, Kadowaki T, Hansen T, Pedersen O: The diabetogenic C2CD4A rs7172432 variant impairs glucose-stimulated insulin response in 5,722 non-diabetic Danish individuals. *Diabetologia*. 2011;
 - 55) Kadowaki T, Yamauchi T: Adiponectin receptor signaling: a new layer to the current model.. *Cell Metabolism*. 2011; 13:123-124
 - 56) Awazawa M, Ueki K, Inabe K, Yamauchi T, Kubota N, Kaneko K, Kobayashi M, Iwane A, Sasako T, Ohsugi M, Takamoto I, Yamashita S, Asahara H, Akira S, Kasuga M, Kadowaki T: Adiponectin enhances insulin sensitivity by increasing hepatic IRS-2 expression via macrophage-derived IL-6 dependent pathway.. *Cell Metabolism*. 2011;
 - 57) Kubota T, Kubota N, Kumagai H, Yamaguchi S, Kozono H, Takahashi T, Inoue M, Itoh S, Takamoto I, Sasako T, Kumagai K, Kawai T, Hashimoto S, Kobayashi T, Sato M, Tokuyama K, Nishimura S, Yamazaki T, Ezaki O, Kadowaki T: Impaired insulin signaling in the endothelial cells reduces insulin-induced glucose uptake by the skeletal muscle.. *Cell Metabolism*. 2011; 13:294-307
 - 58) Ueki K, Kadowaki T: The other sweet face of XBP1.. *Nature Medicine*. 2011; 17:246-248
 - 59) Endo Y, Suzuki M, Yamada H, Horita S, Kunimi M, Yamazaki O, Shirai A, Nakamura M, Iso-O N, Li Y, Hara M, Tsukamoto K, Moriyama N, Kudo A, Kawakami H, Yamauchi T, Kubota N, Kadowaki T, Kume H, Enomoto Y: Thiazolidinediones enhance sodium-coupled bicarbonate absorption from renal proximal tubules via PPAR γ -dependent non-genomic signaling.. *Cell Metabolism*. 2011;
 - 60) Kobayashi N, Ueki K, Okazaki Y, Iwane A, Kubota N, Ohsugi M, Awazawa M, Kobayashi M, Sasako T, Kaneko K, Suzuki M, Nishikawa Y, Hara K, Yoshimura K, Koshima I, Goyama S, Murakami K, Sasaki J, Nagai R, Kadowaki T: Blockade of class IB phosphoinositide-3 kinase ameliorates obesity-induced inflammation and insulin resistance.. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*. 2011;
 - 61) Takezawa J, Ishimi Y, Aiba N, Yamada K: Rev1, Rev3, or Rev7 siRNA Abolishes Ultraviolet Light-Induced Translesion replication in HeLa cells: A Comprehensive Study Using Alkaline Sucrose Density Gradient Sedimentation. *J. Nucleic Acids*. 2010; 2010(Article ID=750296):12 pages
 - 62) Tadaishi M, Miura S, Kai Y, Kawasaki E, Koshinaka K, Kawanaka K, Nagata J, Oishi Y, Ezaki O: Effect of exercise intensity and AICAR on isoform-specific expressions of murine skeletal muscle PGC-1 α mRNA: a role of beta2-adrenergic receptor activation.. *Am J Physiol Endocrinol Metab*. 2010; 300 (2):E341-E349
 - 63) Chiba T, Ezaki O: Dietary restriction suppresses inflammation and delays the onset of stroke in stroke-prone spontaneously hypertensive rats. . *Biochem Biophys Res Commun*. 2010; 399(1):98-103
 - 64) Yamazaki T, Shiraishi S, Kishimoto K, Miura S, Ezaki O: An increase in liver PPAR γ 2 is an initial event to induce fatty liver in response to a diet high in butter: PPAR γ 2 knockdown improves fatty liver induced by high-saturated fat.. *J Nutr Biochem*. 2010;
 - 65) Takebayashi J, Ishii R, Chen J, Matsumoto T, Ishimi Y, Tai A: Reassessment of antioxidant activity of arbutin: multifaceted evaluation using five antioxidant assay systems. *Free Radical Research*. 2010; 44(4):473-478
 - 66) Ishimi Y: Dietary equol and bone metabolism in postmenopausal Japanese women and osteoporotic mice. *J Nutr*. 2010; 140(7):1373S-1376S
 - 67) Takebayashi J, Oki T, Chen J, Sato M, Matsumoto T, Taku K, T. Utsugi M, Watanabe J, Ishimi Y: Estimated average daily intake of antioxidants from typical vegetables consumed in Japan: a preliminary study. *Bioscience Biotechnology and Biochemistry*. 2010; 74(10):2137-2140
 - 68) Virgona N, Taki Y, Umegaki K: A rapid HPLC

- with evaporative light scattering method for quantification of forskolin in multi-herbal weight-loss solid oral dosage forms.. Pharmazie. 2010; 65(5):322-326
- 69) Wakuda H, Nejime N, Tada Y, Kagota S, Umegaki K, Yamada S, Shinozuka K: Highly sensitive measurement of P-glycoprotein-mediated transport activity in Caco-2 cells.. Biol Pharm Bull.. 2010; 33(7):1238-1241
- 70) Taku K, Melby MK, Kurzer MS, Mizuno S, Watanabe S, Ishimi Y: Effects of soy isoflavone supplements on bone turnover markers in menopausal women: systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials. Bone. 2010; 47(2):413-423
- 71) Taku K, Lin N, Cai D, Hu J, Zhao X, Zhang Y, Wang P, Melby MK, Hooper L, Kurzer MS, Mizuno S, Ishimi Y, Watanabe S: Effects of soy isoflavone extract supplements on blood pressure in adult humans: systematic review and meta-analysis of randomized placebo-controlled trials. J Hypertens. 2010; 28(10):1971-1982
- 72) Ihara H, Watanabe T, Hashizume N, Totani M, Kamioka K, Onda K, Sunahara S, Suzuki T, Itabashi M, Aoki Y, Ishibashi M, Ito S, Ohashi K, Enomoto T, Saito K, Saeki K, Nagamura Y, Nobori T, Hirota K, Fujishiro K, Maekawa M, Miura M, Ohta Y: Commutability of National Institute of Standards and Technology standard reference material 1955 homocysteine and folate in frozen human serum for total folate with automated assays. Annals of Clinical Biochemistry. 2010; 47:541-548
- 73) Taku K, Lin N, Cai D, Hu J, Zhao X, Zhang Y, Wang P, Melby MK, Hooper L, Kurzer MS, Mizuno S, Ishimi Y, Watanabe S: Does soy isoflavone extract improve blood pressure? (author reply). J Hypertens. 2011; 29(2):401-402
- 74) McDougall JA, Sakata R, Sugiyama H, Grant E, Davis S, Nishi N, Soda M, Shimizu Y, Tatsukawa Y, Kasagi F, Suyama A, Ross P, Kopecky KJ, Li CI: Timing of menarche and first birth in relation to risk of breast cancer in A-bomb survivors. Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. 2010; 19(7):1746-1754
- 75) Li CI, Nishi N, McDougall JA, Semmens EO, Sugiyama H, Soda M, Sakata R, Hayashi M, Kasagi F, Suyama A, Mabuchi K, Davis S, Kodama K, Kopecky KJ: Relationship between radiation exposure and risk of second primary cancers among atomic bomb survivors. Cancer Res. 2010; 70(18):7187-7198
- 76) Takimoto H, Sugiyama T, Nozue M, Kusama K, Fukuoka H, Kato N, Yoshiike N: Maternal antenatal body mass index gains as predictors of large-for-gestational-age infants and cesarean deliveries in Japanese singleton pregnancies. J Obstet Gynaecol (Epub ahead of print). 2011.
- ### b. 和 文
- 1) 山内淳, 山下葵, 白鳥明日香, 関口真理子, 井上絵里奈: 脂肪細胞におけるレチノール結合タンパク質 4 (RBP4) 遺伝子発現調節機構の解析ー RBP4 遺伝子プロモーター上に存在する GLUT4 ノックダウン依存的転写活性化配列の同定と転写活性化に必要な転写因子のクローニングー. ビタミン. 2010; 84(7):313-321
 - 2) 野末みほ, 石川みどり, 草間かおる, 三好美紀, 西田美佐: 管理栄養士養成課程における国際栄養に関する市販のテキストの検討. 栄養学雑誌. 2010; 68(5):335-341
 - 3) 野末みほ, Jun Kyungyul, 石原洋子, 武田安子, 永井成美, 由田克士, 石田裕美: 小学5年生の学校給食のある日とない日の食事摂取量と食事区分別の比較. 栄養学雑誌. 2010; 68(5):298-308
 - 4) 長田久雄, 鈴木貴子, 高田和子, 西下彰俊: 高齢者の社会的活動と関連要因. 日本公衛誌. 2010; 2010(57):279-290
 - 5) 真田樹義, 宮地元彦, 山元健太, 村上晴香, 谷本道哉, 大森由実, 河野寛, 丸藤祐子, 埴智史, 家光素行, 田畑泉, 樋口満, 奥村重年: 日本人成人男女を対象としたサルコペニア簡易評価法の開発. 体力科学. 2010; 59(3):291-302
 - 6) 小長谷陽子, 渡邊智之, 太田壽城, 高田和子: 地域在住高齢者のQuality of life (QOL)と慢性疾患およびその発症との関連性ー4年間の銃弾調査の結果からー. 日老医誌. 2010; 47:308-314
 - 7) 河原純子, 田中千晶, 田中茂穂: 三次元加速度計を用いた幼児の肺換気量の推定. 大気環境学会誌. 2010; 45(5):235-245
 - 8) 川上諒子, 宮地元彦: 特定健診・保健指導の標準的な質問票を用いた身体活動評価の妥当性. 日本公衆衛生学雑誌. 2010; 57(10):891-899
 - 9) 松本希, 宮地元彦, 高橋康輝, 安東裕美, 小堀浩志, 小野寺昇: 中高年女性を対象とした健康運動指導士等による運動介入及び非介入時の動脈スティフネスの比較ー加齢及び運動習慣が動脈スティフネスの及ぼす影響ー. トレーニング科学. 2010; 22(3):248-256
 - 10) 熊江隆, 古泉佳代, 金子佳代子: 6ヶ月間の牛乳摂取によるやせ傾向の女子大生の心理状況、血中逸脱酵素活性、及び血液性状の変動.. 体力・栄養・免疫学雑誌. 2010; 20(2):53-62
 - 11) 宮地元彦, 安藤大輔, 種田行男, 小熊裕子, 小野玲, 北畠義典, 田中喜代次, 西脇祐司, 道川

- 武紘, 柳田昌彦, 吉村公雄, 竹林亨: サルコペニアに対する治療の可能性: 運動介入効果に関するシステマティックレビュー. 日本老年医学会雑誌. 2011; 48(1):51-54
- 12) 田中千晶, 田中茂穂: 勤労者における身体活動支援環境に関する研究. 明治安田厚生事業団第26回健康医科学研究助成論文集. 2011; 26:58-67
- 13) 谷中かおる, 東泉裕子, 松本輝樹, 竹林純, 卓興鋼, 山田和彦, 石見佳子: 「健康食品」中の大豆たんぱく質および大豆イソフラボンの定量と表示に関する調査研究. 栄養学雑誌. 2010; 68(3):234-241
- 14) 渡辺純, 沖智之, 竹林純, 山崎光司, 津志田藤二郎: 抗酸化能測定法であるH-ORAC法の室間共同試験. 日本食品科学工学会誌. 2010; 57(12):525-531
- 15) 赤松利恵, 梅垣敬三: 新聞に掲載された健康食品に関する広告の内容分析. 日本公衛誌. 2010; 57(4):291-297
- 16) 小島彩子, 佐藤陽子, 橋本洋子, 中西朋子, 梅垣敬三: 日本食品標準成分表の改訂に伴う野菜中のビタミンC収載値の変動に対する分析法の影響. 栄養学雑誌. 2010; 68(2):141-145
- 17) 飯野直美, 遠藤香, 梅垣敬三, 大家千枝子, 木村典代: 紫外線照射を用いた小核試験法によるDNA傷害の定量化と栄養学的研究への応用. 日本栄養・食糧学会誌. 2010; 63(3):115-119
- 18) 窪田洋子, 梅垣敬三, 田中直子, 籠田智美, 中村一基, 国友勝, 篠塚和正: ラット摘出心棒と胸部大動脈に対するブラジル産プロポリスとその起原植物抽出エキスの影響. 応用薬理. 2010; 78:81-85
- 19) 笠岡(坪山)宜代, 桑木泰子, 瀧沢あす香, 田中律子, 藤生恵子, 斎藤トシ子, 恩田理恵, 山岸博之, 江田節子, 木村祐子, 小谷一子, 小田光子, 田代晶子, 池本真二: 諸外国における栄養士養成のための臨地・校外実習の現状に関する調査研究. 日本栄養士会雑誌. 2011; 印刷中:
- 動療法・運動処方ー健康支援・疾病予防に対するアプローチ【総論】日本における運動基準・エクササイズガイドの策定およびその普及について. 臨床スポーツ医学. 2010; 27(11):1187-1198
- 6) 村上晴香, 宮地元彦: 運動処方の実際. 内分泌・糖尿病・代謝内科. 2010; 31(5):493-498, 科学評論社(東京)
- 7) 宮地元彦, 村上晴香, 大森由美: メタボリックシンドローム対策を阻害する要因としてのロコモティブシンドローム. Progress in Medicine. 2010; 30(12):3083-3086, ライフ・サイエンス(東京)
- 8) 宮地元彦, 真田樹義: サルコペニアと運動療法. カレントセラピー. 2011; 29(2):13-16, ライフメディコム(東京)
- 9) 田中茂穂: 基礎代謝・NEATと身体活動. 臨床スポーツ医学. 2011; 28(3):259-266
- 10) 宮地元彦, 西脇祐司, 安藤大輔, 種田行男, 小熊祐子, 小野玲, 北畠義典, 田中喜代次, 道川武宏, 柳田昌彦, 吉村公雄, 竹林亨: 虚弱高齢者に対する運動介入の効果. Geriatric Medicine. 2011; 49(3):319-322, ライフ・サイエンス(東京)
- 11) 門脇孝: 糖尿病ガイドラインー診断と治療の面から. 総合臨牀. 2010; 59:137-142
- 12) 門脇孝: 【臨床医学の展望】糖尿病学. 日本医事新報. 2010; 43-60
- 13) 山内敏正, 門脇孝: 網羅的解析ーomics解析の現在と未来ー. 内分泌・糖尿病・代謝内科. 2010; 30(4):287-289
- 14) 山内敏正, 門脇孝: アディポサイトカインと動脈硬化. 循環器内科. 2010; 67(4):417-425
- 15) 山内敏正, 門脇孝: 【血糖管理指針】アディポネクチン. Diabetes Frontier. 2010; 21(2):206-212
- 16) 羽田裕亮, 山内敏正, 門脇孝: 現行の糖尿病治療選択のガイドライン NICE Guideline 2009. 月刊糖尿病. 2010; 2(5):41-46
- 17) 窪田直人: 遺伝子改変マウスを用いた肥満症・インスリン抵抗性の分子メカニズムの解明. 肥満研究(1343-229X). 2010; 16(1):18-21
- 18) 門脇孝: 糖尿病大血管症発症・進展制御のための糖尿病治療戦略. 日本臨牀. 2010; 68(5):788-795
- 19) 門脇孝: これからのインスリン治療の強化方法. 月刊糖尿病. 2010; 2(6):4-7
- 20) 大杉満, 門脇孝: インクレチン関連薬 インクレチン関連薬の臨床データDPP-4阻害薬. 医学のあゆみ. 2010; 23(5):414-424
- 21) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 門脇孝: 我が国における糖尿病大血管症発症・進展制御エビデンス発症・進展予防に対する介入試験からの知見 糖尿病大血管合併症抑制の戦略研究(J-DOIT3). 日本臨牀. 2010; 68(5):861-864
- 22) 高本偉碩, 植木浩二郎, 門脇孝: 2型糖尿病の新

【総 説】

a. 和 文

- 1) 田中千晶, 田中茂穂: 子どもにおける身体活動量の評価. 体育の科学. 2010; 60(6):389-395, 杏林書院
- 2) 宮地元彦, 村上晴香: エクササイズガイドの妥当性の検討, 特集 運動基準づくりへの新エビデンス. 体育の科学. 2010; 60(6):406-410, 杏林書院(東京)
- 3) 宮地元彦: Wiiの健康管理ゲームを活用した運動指導. 保健師ジャーナル. 2010; 66(7):630-634, 医学書院(東京)
- 4) 田中茂穂: 糖尿病患者のエネルギー代謝と身体活動. 内分泌・糖尿病・代謝内科. 2010; 31(5):408-414, 科学評論社
- 5) 村上晴香, 宮地元彦: エビデンスに基づいた運

- しい診断基準をいかに捉えるか? . Pharma Medica. 2010; 28(5):9-12
- 23) 笹子敬洋, 門脇孝: J-D0IT3における禁煙指導. 内分泌・糖尿病・代謝内科. 2010; 30(3):255-259
 - 24) 笹子敬洋, 植木浩二郎, 門脇孝: 内臓脂肪と炎症. 臨床栄養. 2010; 116(6):633-635
 - 25) 勝山修行, 高本偉碩, 門脇孝: 超速効型高配合比率の二相性インスリンアナログ製剤の使い方. 月刊糖尿病. 2010; 2(6):40-49
 - 26) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病診療ガイドライン. Cardiovascular Frontier. 2010; 1(1):74-79
 - 27) 高本偉碩, 門脇孝: 肥満症治療の最前線. 公衆衛生. 2010; 74(6):456-461
 - 28) 窪田直人, 渡部拓, 門脇孝: 摂食・代謝調節の分子機構 末梢と中枢のクロストーク カンナビノイド受容体シグナルとメタボリックシンドローム. 自律神経. 2010; 47(3):252-254
 - 29) 窪田直人: 遺伝子改変マウスを用いた糖尿病合併症の分子メカニズムの解明. 糖尿病合併症. 2010; 24(1):12-17
 - 30) 門脇孝: サイエンスとヒューマニズムを求めて. 糖尿病診療マスター. 2010; 8(4):368-381
 - 31) 大杉満, 門脇孝: シタグリプチンとは? シタグリプチンの特徴と使用上の注意点について教えてください. Q&Aでわかる肥満と糖尿病. 2010; 9(4):587-589
 - 32) 門脇孝: 総論 糖尿病と脂肪組織の慢性炎症. BIO Clinica. 2010; 25(8):16-17
 - 33) 山内敏正, 門脇孝: 脂肪組織の慢性炎症とアディポネクチン. BIO Clinica. 2010; 25(8):679-685
 - 34) 岩本安彦, 清野裕, 山田祐一郎, 門脇孝: 特集「インクレチン製剤—基礎と臨床」座談会. 肥満と糖尿病. 2010; 9(4):503-520
 - 35) 上西一弘, 田中司朗, 石田裕美, 細井孝之, 大橋靖雄, 門脇孝, 折茂肇: 牛乳・乳製品摂取とメタボリックシンドロームに関する横断的研究. 日本栄養食糧学会. 2010; 63(4):151-159
 - 36) 山内敏正, 門脇孝: アディポサイトカイン. 総合臨床. 2010; 59(9):1900-1905
 - 37) 山内敏正, 門脇孝: アディポサイトカイン. 臨床検査. 2010; 54(9):1048-1054
 - 38) 門脇孝: 生活習慣病の機能性食品開発に向けて. 食品と開発. 2010; 45(9):7-10
 - 39) 植木浩二郎, 笹子敬洋, 中村正裕, 原眞澄, 大杉満, 金森博, 塚本和久, 門脇孝: 2型糖尿病にC型慢性肝炎を合併しエストロゲン類似物質含有健康補助食品(ガウクルア)の摂取後に急速に肝硬変へ進行した1例. プラクティス. 2010; 27:567-573
 - 40) 植木 浩二郎, 笹子 敬洋, 添田 光太郎, 小畑 淳史, 升田 紫, 三松 貴子, 栗澤元晴, 羽田 裕亮, 庄嶋 伸浩, 大杉 満, 門脇孝: インターフェロン治療後に発症した1型糖尿病で転換性障害に伴う意識消失をきたし診断に苦慮した1例. プラクティス. 2010; 27:574-580
 - 41) 羽田裕亮, 山内敏正, 門脇孝: 糖尿病(インクレチン関連薬). 日本臨床. 2010; 68(10):1900-1905
 - 42) 門脇孝: J-D0IT3. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S334-S337
 - 43) 山内敏正, 門脇孝: インスリン抵抗性改善薬(チアゾリジン薬)の特徴と適応. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S182-S185
 - 44) 窪田直人, 門脇孝: 疾病構造の変化と求められる先端医療技術開発. アンチ・エイジング医学. 2010; 6(5):36-41
 - 45) 大杉満, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖尿病とは①疫学と現状. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S2-S3
 - 46) 大杉満, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖尿病に対するさまざまな取り組み. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S16
 - 47) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病の新しい診断基準について. 日本薬剤師会雑誌. 2010; 62(10):53-57
 - 48) 高本偉碩, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖尿病の新しい診断基準. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S5-S7
 - 49) 高本偉碩, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖尿病とは②成因と分類. 日本医師会雑誌. 2010; 139(特別):S4
 - 50) 庄嶋伸浩, 原一雄, 門脇孝: メタボリックシンドローム—最近の話題. 皮膚病診療. 2010; 32(10):1052-1057
 - 51) 窪田直人, 門脇孝: 日本社会にとってのアンチエイジング医学】 疾病構造の変化と求められる先端医療技術開発. アンチ・エイジング医学(1880-1579). 2010; 6(5):656-661
 - 52) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病の新しい診断基準. カレントセラピー. 2010; 28(11):8-12
 - 53) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病性細小血管症 2010年糖尿病診断基準. 日本臨床. 2010; 68(9):26-31
 - 54) 門脇孝: 糖尿病診療をめぐる動向と展望. medicina. 2010; 47(12):1878-1882
 - 55) 山内敏正, 門脇孝: アディポサイトカインネットワークとアディポネクチン. 治療学. 2010; 44(11):5-14
 - 56) 脇裕典, 山内敏正, 門脇孝: ヒトアディポネクチンのミスセンス変異によるアディポネクチンアディポネクチンのミスセンス変異によるアディポネクチン多量体構造の変化と糖尿病. 治療学. 2010; 44(11):106-111
 - 57) 岩部真人, 山内敏正, 岩部美紀, 門脇孝: AdipoR活性化薬が運動模倣薬となる可能性. 治療学. 2010; 44(11):101-105
 - 58) 中山亮, 山内敏正, 門脇孝: アディポネクチン作用低下を是正する治療法. 治療学. 2010; 44(11):126-131
 - 59) 武和巳, 脇裕典, 山内敏正, 門脇孝: アディポ

- ネクチンの発現・分泌制御. 治療学. 2010; 44(11):24-28
- 60) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病治療薬(経口血糖降下薬)の使い方. 月刊レジデント. 2010; 3(11):29-36
- 61) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝: 【血管研究と血管治療 血管形成メカニズムの新たな概念から炎症・がん治療、虚血性疾患の血管再生療法まで】 血管制御因子と血管構築・形成と血管機能・病態 血管内皮細胞におけるインスリンシグナルの役割. 実験医学. 2010; 28(17):2782-2787
- 62) 門脇孝: 「第2次対糖尿病戦略5ヵ年計画」に基づく日本糖尿病学会のアクションプラン 2010 (DREAMS) —今後5年間の活動目標. Diabetes Journal. 2010; 38(4):37-39
- 63) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 門脇孝: Adiponectinと骨格筋ファイバータイプ. 内分泌・糖尿病・代謝内科. 2010; 31(5):472-477
- 64) 門脇孝, 小田原雅人, 小室一成: 糖尿病患者における包括的なリスク管理の重要性(座談会). Pharma Medica. 2010; 28(11):129-132
- 65) 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチンの中枢作用. 治療学. 2010; 44(11):1277-1281
- 66) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 門脇孝: アディポネクチンの作用とその作用メカニズム. 治療学. 2010; 44(11):1205-1209
- 67) 窪田直人, 門脇孝: 【インスリン療法の功罪 実地臨床における使いかたと注意点】 肝臓におけるインスリン作用に注目したインスリン療法. プラクティス(0289-4947). 2010; 27(6):645-651
- 68) 窪田直人, 門脇孝: 【アディポネクチン アディポサイトカインネットワーク制御への期待】 基礎 アディポネクチンの中枢作用. 治療学(0386-8109). 2010; 44(11):1211-1215
- 69) 植木浩二郎, 門脇孝: メタボリックシンドロームとリン脂質. 実験医学. 2010; 28(20):140-147
- 70) 高本偉碩, 門脇孝: 糖尿病に関する米国の新診断基準の概要と今後. 糖尿病レクチャー. 2010; 1(3):425-431
- 71) 窪田直人, 門脇孝: 【核内受容体とアディポサイエンス】 臨床 PPAR γ とアディポサイエンス. Adiposcience(1349-1318). 2010; 7(2):156-161
- 72) 門脇孝: 最近のエビデンスに基づく糖尿病治療戦略. Medical Practice. 2011; 28(1):12-19
- 73) 門脇孝: 糖尿病研究と患者さんの幸福の“架け橋”として. プラクティス. 2011; 28(1):50
- 74) 門脇孝, 山田祐一郎, 清野 裕: インクレチン研究と創薬への展開. 最新医学. 2011; 66(1):7-14
- 75) 窪田直人, 門脇孝: 【食欲制御の最前線】 アディポネクチンによる摂食・エネルギー代謝調節機構. Medical Science Digest(1347-4340). 2011; 37(1):31-34
- 76) 中村正裕, 山内敏正, 門脇孝: 糖尿病と肥満、生活習慣と癌との関係. Diabetes Frontier. 2011; 22(1):31-34
- 77) 手嶋登志子: 高齢者の食事と栄養—免疫を考えた食事のとり方—. 保健の科学. 2010; 52(2):129-133
- 78) 饗場直美: 子どもの生活習慣について. 学校給食. 2011; 162(676):26-30, 全国学校給食協会
- 79) 江崎治: 脂質. 静脈経腸栄養. 2010; 25(3):25-29, 株式会社ジェフコーポレーション
- 80) 江崎治, 三浦進司: PGC-1 α とミトコンドリア機能、エネルギー代謝. Adipo science. 2010; 6(4):311-318, フジメディカル出版
- 81) 江崎治: 今話題のトランス脂肪酸を知る 脂肪酸の基礎知識. へるすあっぷ21. 2010; 46-51, 株式会社 法研
- 82) 江崎治: QOLの視点から望ましい食事と運動の姿を考える. Quality of Life Journal. 2010; 11(1):65-77, 日本QOL学会
- 83) 江崎治: 運動療法によるメタボリックシンドローム発症予防効果のエビデンス. 日本臨牀 増刊号 メタボリックシンドローム(第2版) —基礎・臨床の最新知見—. 2011; 69(1):551-555, 日本臨牀社
- 84) 江崎治: トランス脂肪酸の有害性と各国の対応. 日本医事新報. 2011; 94-95, 日本医事新報社
- 85) 中村和利, 上西一弘, 石見佳子: 日本人の多量ミネラルの食事摂取基準(2010). ビタミン特集「日本人の食事摂取基準(2010年版)». 2010; 84(5・6):236-239
- 86) 石見佳子: 日本食品標準成分表 2010—活用するために知っておきたいこと. 臨床栄養. 2011; 118(4):402-407, 医歯薬出版
- 87) 卓興鋼, 石見佳子: 大豆イソフラボン抽出物サプリメントの閉経期女性の骨密度への影響 —無作為化比較試験のメタ分析—. New Food Industry. 2010; 52(9):1-11
- 88) 佐藤聡子, 梅垣敬三: いわゆる健康食品の安全性に関する問題と対応. 食品衛生研究. 2010; 60(9):7-17
- 89) 梅垣敬三, 中西朋子, 佐藤陽子, 笠岡(坪山)宣代, 三好美紀, 芝池伸彰: 2つのデータベースと専門職を介した健康食品情報提供の取り組み. 保健医療科学. 2010; 59(3):284-290
- 90) 梅垣敬三: 健康食品の実態とその安全性・有効性. 食品衛生学雑誌. 2010; 51(6):396-401

【解説等】

a. 和 文

- 1) 徳留信寛: 健康食品の表示と国民の健康. 食品衛生研究. 2010; 60:5-5
- 2) 徳留信寛: 生活習慣病のモデルとしての大腸がんの予防とコントロール. ILSI Japan. 2010; 101:1-6, 特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構
- 3) 徳留信寛: 生活習慣病対策—公衆衛生学の立場

- から. 医学のあゆみ. 2011; 236(1):11-16
- 4) 森田明美: 日本人の食事摂取基準2010年版をどう展開していくか. ヘルスケア・レストラン 2010.5月号 . 2010; 18(5): 株式会社日本医療企画
 - 5) 森田明美: 食事摂取基準の概要と活用. イルシーILSI JAPAN. 2010; 7-16, 特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構
 - 6) 森田明美: 新しい食事摂取基準(2010年版)～概要と活用～. J A F A N 日本食品添加物ニュース. 2010; 30(2):105-114, 日本食品添加物協会
 - 7) 大坂寿雅: 自律性体温調節のための神経機構. 彼末一之監修 からだと温度の事典. 2010; 27-29, 朝倉書店
 - 8) 宮地元彦: からだいつまでもイキイキと! . へるすさろん ホンダ健保組合広報誌. 2010; 7-8, ホンダ健康保険組合
 - 9) 宮地元彦: 人間ドック専門医試験受験のためのセルフトレーニング問題と解説 改訂版. 日本人間ドック学会人間ドック専門医制度委員会問題作成小委員会編. 2010; , 東京
 - 10) 宮地元彦: 「生活活動」を活発化することによって高齢者の体力と健康はレベルアップが可能. エルダー. 2010; 2010(9):7-13, (独) 高齢・障害者雇用支援機構
 - 11) 宮地元彦: サルコペニアの概念と運動療法の可能性. 日本医事新報. 2010; 83-84
 - 12) 竹林純: 抗酸化能の分析法 -ORAC法とその他 in vitro 分析法-. ぶんせき. 2010; 430:543-544
 - 13) 石見佳子: イソフラボン. New Diet Therapy. 2011; 26(4):33-36
 - 14) 佐藤陽子, 中西朋子, 横谷馨倫, 梅垣敬三: 機能性食品の科学的根拠と利用対象者.. ケミカルエンジニアリング. 2010; 55(4):60-66
 - 15) 中西朋子, 佐藤陽子, 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第1回 健康食品・サプリメントの実態と有害事例の全体像. 医と食. 2010; 2(2):104-105
 - 16) 佐藤陽子, 中西朋子, 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第2回製品側の要因に起因する健康被害. 医と食. 2010; 2(3):155-159
 - 17) 梅垣敬三: 健康づくりQ&A オリゴ糖は便秘に良く効くと聞きましたが、どのように利用したらよいのでしょうか.. 健康づくり. 2010; 386(6):24-24
 - 18) 佐藤陽子: 幼児にサプリメントは必要か?. キューピーニュース. 2010;
 - 19) 中西朋子, 佐藤陽子, 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第3回利用方法が関係した健康被害. 医と食. 2010; 2(4):216-217
 - 20) 山田和彦, 土田博, 大濱宏文, 梅垣敬三, 津谷喜一郎: 乳児用調製乳の成分に関する国際標準:ESPGHANがコーディネートした国際専門家グループによる推奨.. 薬理と治療. 2010; 38(8):389-710
 - 21) 梅垣敬三: 補完代替医療と健康食品.. 臨床栄養. 2010; 117(4):489-494
 - 22) 佐藤陽子, 中西朋子, 笠岡(坪山)宜代, 西山聡子, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第4回話題の健康食品素材と危険情報.. 医と食. 2010; 2(5):271-274
 - 23) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントクイズ.. へるすあつぷ21. 2010; 314(12):16-18
 - 24) 中西朋子, 佐藤陽子, 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第5回最近の健康食品との因果関係が疑われる健康被害の特徴. 医と食. 2010; 2(6):327-330
 - 25) 梅垣敬三: 健康づくりQ&A 納豆などの大豆食品は体によいといわれていますが、どんな作用があるのでしょうか. 健康づくり. 2011; 394(2):24-24
 - 26) 佐藤陽子, 中西朋子, 笠岡(坪山)宜代, 西山聡子, 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの安全性 第6回健康食品・サプリメントの安全性の考え方(まとめ). 医と食. 2011; 3(1):49-51
 - 27) 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第5回 臨床栄養と食文化. 医と食. 2010; 2(2):100-101
 - 28) 笠岡(坪山)宜代: 「研究運営部会」の新たな取り組み. 日本栄養士会雑誌. 2010; 53(4):48
 - 29) 笠岡(坪山)宜代: 研究運営部会の新たな第一歩～. 日本栄養士会 全国研究教育協議会HP. 2010;
 - 30) 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第6回(最終回) 食から人へ化. 医と食. 2010; 2(3):148-150
 - 31) グラス明美, 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第7回大草原の小さな町の病院で働く. 医と食. 2010; 2(4):210-211
 - 32) グラス明美, 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第8回大草原の小さな町の病院で働く. 医と食. 2010; 2(5):266-268
 - 33) グラス明美, 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第8回大草原の小さな町の病院で働く. 医と食. 2010; 2(6):324-326
 - 34) 笠岡(坪山)宜代: 500時間問題:日本の強みを生かしながら、レベルアップに向けて. 東京都栄養士会とうきょう. 2011; 283:4
 - 35) グラス明美, 笠岡(坪山)宜代: 諸外国に学ぶ「管理栄養士のキャリアパス」第9回大草原の小さな町の病院で働く. 医と食. 2011; 3(1):46-47
 - 36) 笠岡(坪山)宜代: 国際栄養士連盟ICDA: International Confederation of Dietetic Associations～ICDA代表者 年次総会(テレカン

ファレンス)に参加して～. 日本栄養士会雑誌. 2011; 54(3):34-35

【研究報告書】

- 1) 徳留信寛, 森田明美, 坪田 (宇津木) 恵: 日本人の食事摂取基準の改定と活用に関する総合的研究. 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 2) 徳留信寛: 本邦におけるHTLV-1感染及び関連疾患の実態調査と総合対策, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業
- 3) 徳留信寛, 笠岡 (坪山) 宣代: 全国栄養士の食生活と生活習慣病の罹患・死亡リスクとの関連に関するコホート研究, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 4) 徳留信寛, 笠岡 (坪山) 宣代: 全国栄養士の食生活と生活習慣病の罹患・死亡リスクとの関連に関するコホート研究, 平成19～平成22年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 5) 徳留信寛, 西 信雄: イラン・バボール市における消化管がんの宿主・環境要因の研究, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B) 海外学術研究
- 6) 中出麻紀子, 河嶋伸久, 大森由実: 肥満解消を目的とした介入研究で、外食の嗜好・頻度が肥満因子に及ぼす影響. すかいらくフードサイエンス研究所 食に関する助成研究調査報告書. 23:
- 7) 森田明美: 行動変容理論に基づく効率的かつ効果的な特定保健指導手法の疫学的エビデンスとITを採用した開発, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 8) 坪田 (宇津木) 恵: 地域在宅高齢者の栄養・食事摂取や食事パターンが高次生活機能低下に及ぼす影響, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 9) 坪田 (宇津木) 恵: 地域在宅高齢者の栄養・食事摂取や食事パターンが高次生活機能低下に及ぼす影響, 平成22年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 10) 東泉裕子: 男性骨粗鬆症に対する大豆イソフラボン代謝産物の作用とその作用機序の解明, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 11) 東泉裕子: 男性骨粗鬆症に対する大豆イソフラボン代謝産物の作用とその作用機序の解明, 平成21～平成22年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 12) 中出麻紀子: 親による子どもの頃の家庭での食育が若手成人の朝食欠食に及ぼす効果, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 13) 宮地元彦, 田畑 泉: 健康づくりのための運動基準・運動指針改定並びに普及・啓発に関する研究. 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 14) 田中茂穂, 高田和子, 田畑 泉: エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究. 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 15) 高田和子: 高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 長寿科学総合研究事業
- 16) 高田和子: チームによる効果的な栄養ケア・マネジメントの標準化をめざした総合的研究～大学一施設連携による研究基盤・人材育成システムの構築の試み～, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 長寿科学総合研究事業
- 17) 宮地元彦: 健康日本21の中間評価、糖尿病等の「今後の生活習慣病対策の推進について (中間とりまとめ)」を踏まえた今後の生活習慣病対策のためのエビデンス構築に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 18) 宮地元彦: 生活習慣病予防のための運動を阻害する要因とその原因別の対策に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 19) 宮地元彦: 生活習慣病予防活動・疾病管理による健康指標に及ぼす効果と医療費適正化効果に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 20) 田畑 泉: 筋ジストロフィーの集学的治療と均てん化に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 精神・神経疾患研究委託事業
- 21) 山元健太: 交感神経系を介した柔軟性体力と動脈硬化の関連機序, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 22) 山元健太: 交感神経系を介した柔軟性体力と動脈硬化の関連機序, 平成21～平成22年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 23) 村上晴香: 自発的身体活動・運動行動誘発におけるグレリン遺伝子多型の関連, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 24) 田中茂穂: エネルギー消費量の変動要因に関する基礎的研究, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)
- 25) 田中茂穂: エネルギー消費量の変動要因に関する

- る基礎的研究, 自己評価報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (A)
- 26) 宮地元彦: 習慣的身体活動はホモシステイン分解酵素遺伝子変異に伴う動脈硬化を予防するか?, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 27) 宮地元彦: 習慣的身体活動はホモシステイン分解酵素遺伝子変異に伴う動脈硬化を予防するか?, 平成20～平成22年度研究成果報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 28) 大坂寿雅: 終板器官周囲のプロスタグランジンE2発熱機構を制御する神経伝達物質, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 29) 大河原一憲: 日常生活下における肥満抑制因子としての非運動性身体活動と24時間脂質酸化能の役割, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
- 30) 田中憲子: 体幹部骨格筋量の増大がメタボリック症候群の改善および介護予防に及ぼす影響, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
- 31) 宮地元彦, 高田和子, 西 信雄: 「健康増進のための住宅づくり」調査, 平成22年度医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査事業
- 32) 河合智子: インスリン受容体基質が膵β細胞増殖に果たす役割の解明, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 33) 井上真理子: ピオグリタゾンの抗動脈硬化作用のin vivoにおける分子メカニズムの解明, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
- 34) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇 孝: 肝臓におけるIRS-1、IRS-2の生理的・病態生理的役割の解明, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 35) 渡邊 昌, 饗場直美, 宮地元彦, 森田明美, 水野正一, 山田晃一: 特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究. 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 36) 渡邊 昌: 肥満関連疾患のアジアと米国における遺伝疫学的検討とその対策に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 地球規模保健課題推進研究事業 (国際医学協力研究事業)
- 37) 饗場直美, 中出麻紀子: 学校における食育の取り組みと家庭への波及効果についての研究, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 38) 江崎治: 食品に含まれるトランス脂肪酸に係る食品健康影響評価情報に関する調査 調査報告書. 内閣府食品安全委員会, 平成22年度 食品安全確保総合調査. 財団法人 日本食品分析センター
- 39) 江崎治, 山崎聖美: ニュートリゲノミクスを用いた高機能性新規食品の多機能性解明とその評価・管理に関する研究. 食品・農産物の表示の信頼性確保と機能性解析のための基盤技術の開発, 平成22年度研究成果報告書. 90-91, 農林水産省農林水産技術会議事務局 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所
- 40) 山崎聖美: 大豆たん白質β-コンプリシニンの非アルコール性脂肪肝発症予防および治療効果と作用機序の解明. 大豆たん白質研究. 13:128-132, (財)不二たん白質研究振興財団
- 41) 三浦進司: 運動によるエネルギー代謝亢進のメカニズム, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
- 42) 山崎聖美: 肥満・脂肪肝発症予防のためのPPAR組織・サブタイプ特異性に関する網羅的分析, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 43) 石見佳子, 永田純一, 梅垣敬三: 検査機関の信頼性確保に関する研究. 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 44) 松本輝樹: 一般的な野菜に含まれる抗酸化物質の定性・定量. 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究, 平成22年度総括・分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 45) 石見佳子, 卓興鋼, 山内淳: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的レビューとその検証に関する研究 (第3報). 大豆たん白質研究. 13:1-15, (財)不二たん白質研究振興財団
- 46) 石見佳子, 永田純一, 梅垣敬三: 検査機関の信頼性確保に関する研究. 平成20-22年度総合研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 47) 竹林純, 沖智之: 日本において一般的に食されている果物類からの抗酸化物質一日摂取量の推定. 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 48) 沖智之, 竹林純, 佐藤麻紀: 日本国内で流通している抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の抗酸化力に関する研究, 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 49) 竹林純, 松本輝樹, 卓興鋼, 坪田(宇津木)恵, 沖智之, 後藤一寿: 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究, 平成22年度 総括研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 50) 竹林純, 松本輝樹, 卓興鋼, 坪田(宇津木)恵, 沖

智之, 後藤一寿: 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究, 平成21~22年度総合研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業

- 51) 永田純一: 機能性食品の組み合わせ摂取による有効性と安全性に関する研究, 平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 52) 永田純一: 機能性食品の組み合わせ摂取による有効性と安全性に関する研究, 平成20~平成22年度研究実績報告書, 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 53) 梅垣敬三: 健康食品の情報提供システム体制の構築と安全性確保に関する研究, 平成22年度総括・分担研究報告書. 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心安全確保推進研究事業
- 54) 梅垣敬三: 健康食品事故に係る調査. 消費者庁受託事業.
- 55) 水野正一: 創薬化を目指したglypican-3由来がんペプチドワクチン療法のエビデンス創出のための臨床試験, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 医療技術実用化総合研究事業 (臨床研究推進研究事業)
- 56) 西 信雄: 健康増進施策推進・評価のための健康・栄養モニタリングシステムの構築, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 57) 西 信雄: 2010年国民健康栄養調査対象者の追跡開始 (NIPPON DATA2010) とNIPPON DATA80/90の追跡継続に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業
- 58) 笠岡 (坪山) 宣代: 国際食品規格の策定プロセスに関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 食品の安心・安全確保推進研究事業
- 59) 三好美紀: 我が国の国際保健人材の栄養分野の研究能力強化とベトナムにおける栄養士教育制度に関する研究, 平成22年度分担研究報告書, 厚生労働省厚生科学研究費, 国際医療研究委託事業

【国際学会等】

a. 特別講演

- 1) Tokudome S: Gastric Cancer: Epidemiology, Prevention and Control. The 5th General Assembly of Asian Pacific Organization for Cancer Prevention. 2010.04.03, Istanbul Turkey.
- 2) Ishikawa-Takata K: Physical activity level and exercise guideline for youth in Japan. Nanjing International Conference on Youth Fitness and Health. 2010.10.29, Nanjing, China

- 3) Kadowaki T: Role of Adiponectin and Adiponectin Receptors in Metabolic Syndrome and Vascular Complications. ISN-Nexus Kyoto 2010 Symposium. 2010.04.15, 京都
- 4) Kadowaki T: Molecular Mechanism of Type 2 Diabetes. the Distinguished Lecture Series in the Division of Biological Sciences at the Harvard School of Public Health. 2010.04.29, Boston, USA
- 5) Kadowaki T: Metabolic Syndrome (MetS) and the New National Health Check-up Program in Japan. 2010 Metabolic Syndrome Global Forum. 2010.09.28, Seoul, Korea
- 6) Kadowaki T: Genetics and molecular mechanism of type2 diabetes. IDF WPR 2010 Congress. 2010.10.19, Busan, Korea
- 7) Kadowaki T: Adipocyte Control of Insulin Action. IR 10-XI International Symposium on Insulin Receptor and Insulin Action. 2010.10.28, Naples, Italy

b. シンポジウム等

- 1) Tanaka S: Chamber studies in Japan - aims and methodologies. Obesity 2010 Conference: Calloriimetry Developments Meeting 2010. 2010.10.09, San Diego (USA)
- 2) Kadowaki T: Potential Role of Adiponectin and Adiponectin Receptors in Metabolic Fitness and Longevity. 61th Mosbacher Kolloquium "The Biology of Aging: Mechanisms and Intervention". 2010.04.09, Mosbach, Germany
- 3) Kadowaki T: The molecular mechanism of adiponectin and its receptors in protection from cardio metabolic syndrome. ISHR2010. 2010.05.16, 京都
- 4) Kadowaki T: Role of adiponectin receptor in obesity & linked disease. 11th International Congress of Obesity. 2010.07.15, Stockholm, Sweden
- 5) Kadowaki T: Molecular mechanism and genetics of type 2 diabetes. 2010年アジア糖尿病フォーラム. 2010.08.11, 徳島
- 6) Kadowaki T: Adiponectin and AipoR1 regulate PGC-1 alpha and mitochondria by calcium and AMPK/SIRT1. Symposium: Molecular and Physiological Aspects Diabetes Mellitus, Karolinska. 2010.09.25, Stockholm, Sweden
- 7) Kadowaki T: Role of LKB1/CaMKK-AMPK system in adiponectin signaling network. 2010 FASEB Research Conference. 2010.10.06, 京都
- 8) Nishi N: The trend of salt intake and cardiovascular disease in Japan. China Heart Congress & International Heart Forum Beijing 2010. 2010.08.14, Beijing (China)
- 9) Nishi N: Japan: National Health and

- Nutrition Survey. Conference on "2009 Korea National Health and Nutrition Examination Survey". 2010.11.23, Seoul, Korea
- 10) Nishi N: National Health and Nutrition Survey. The Joint International Symposium: Nutrition in Women's Health. 2010.11.25, Seoul, Korea
- c. 一般講演等
- 1) Ohmori Y, Miyachi M, Aiba N, Morita A, Nakade M, Munakata T, Deura K, Hashimoto S, Watanabe S : The association between self-image with eating behaviors and metabolic risk factors in middle aged older adults.. International Society for Behavioral Nutrition and Physical Activity . 2010.06.11, Mineapolis, USA
 - 2) Nakade M, Kanako Furuya, Junko Kawakami , Aiba N: Breakfast skipping in Japanese university students and their lifestyle, dietary intake, dietary awareness and mental distress. . International Society for Behavioral Nutrition and Physical Activity . 2010.06.12, Mineapolis, USA
 - 3) Kawashima N, Morita A, Aiba N, Miyachi M, Watanabe S, for SCOP group: The adiponectin to leptin ratio is associated with the risk for metabolic syndrome in obese Japanese people. Saku Control Obesity Program(SCOP). The 11th International Congress on Obesity. 2010.07.13, Stockholm
 - 4) Morita A, Kawashima N, Ohmori Y, Watanabe S, Aiba N, Miyachi M, Sasaki S, Deura K, for SCOP group: Effects of intervention program for weight reduction. Saku Control Obesity Program(SCOP). The 11th International Congress on Obesity. 2010.07.13, Stockholm
 - 5) T.Utsugi M, T Ohkubo, A Hara, M Kikuya, T Kondo, H Metoki, R Inoue, K Asayama, S Izumi, Y Imai: High green tea consumption is associated with lower risk of silent lacunar infarcts: The OHASAMA study. ESC congress. 2010.08.30, Stockholm
 - 6) Gando Y, Kawano H, Yamamoto K, Murakami H, Ohmori Y, Kawakami R, Sanada K, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: High level of cardiorespiratory fitness is associated with reduced age-related carotid artery remodeling. American Society of Hypertension. 2010.05.01, New York-USA
 - 7) Tanaka C, Hikiyara Y, Ohkawara K, Tanaka S: Sedentary and moderate-to-vigorous physical activity evaluated by triaxial accelerometer and physical fitness in Japanese preschool children. 3rd International Congress on Physical Activity and Public Health. 2010.5.6, Toronto, Canada.
 - 8) Naito Y, Ishikawa-Takata K, Tanaka S, Ebine N, Harada A, Arao T, Inoue S, Kitabatake Y, Tabata I. Validation of physical activity questionnaire for the Japan Arteriosclerosis Longitudinal Study (JALSPAQ) and its implication. 3rd International Congress on Physical Activity and Public Health. 2010.5.6, Toronto, Canada.
 - 9) Ohkawara K, Ishikawa-Takata K, Park JH, Tabata I, Tanaka S. Significance of nonlocomotive activity for maintaining higher physical activity level in daily living: consideration from total step counts. 3rd International Congress on Physical Activity and Public Health. 2010.5.7, Toronto, Canada.
 - 10) Taguchi M, Ishikawa-Takata K, Tatsuta W, Katsuragi C, Sakamoto S, Higuchi M: The relation between resting energy expenditure and body size in Japanese female college athletes. Eurpean College of Sport Science 15th Annual Congress. 2010.06.23, Antalya,Turkey
 - 11) Tanaka C, Tanaka S: Contribution of non-locomotive activity to habitual physical activity in Japanese workers. 11th International Congress on Obesity (ICO2010 - Stockholm). 2010.07.13, Stockholm (Sweden)
 - 12) Inoue S, Ohya Y, Odagiri Y, Takamiya T, Tanaka S, Shimomitsu T: Demographic and lifestyle characteristics of respondents to a mail-based accelerometer surveillance study. 11th International Congress of Behavioral Medicine. 2010.08.05, Washington, DC
 - 13) Hikiyara Y, Midorikawa T, Ota M, Sakamoto S, Tanaka S: The relation of physical activity to body composition in elementary school children. Obesity 2010, the 28th Annual Scientific Meeting of The Obesity Society. 2010.10.09, San Diego (USA)
 - 14) Tanaka C, Tanaka S: Physical activity evaluated by triaxial accelerometer and weight status in Japanese preschool children. Obesity 2010, the 28th Annual Scientific Meeting of The Obesity Society. 2010.10.09, San Diego (USA)
 - 15) Park JH, Ishikawa-Takata K, Tanaka S, Hikiyara Y, Ohkawara K, Watanabe S, Miyachi M, Morita A, Aiba N, Tabata I: Relation of daily physical activities to obesity in free-living Japanese adults. Obesity 2010,

- the 28th Annual Scientific Meeting of The Obesity Society. 2010.10.09, San Diego (USA)
- 16) Miura S, Kai Y, Tadaishi M, Ezaki O: LKB1 activity in skeletal muscle is essential for an increase in fatty acid oxidation during low-intensity exercise.. 70th Scientific Sessions, American Diabetes Association.. 2010.06.26, Orland, Florida, USA
- 17) Chiba T, Ezaki O: Dietary Restriction Suppresses Inflammation and Delays the Onset of Stroke in Stroke-Prone Spontaneously Hypertensive Rats. 14th International SHR Symposium . 2010.09.24, Montreal, Canada
- 18) Ueno T, Fujii Y, Uchiyama S, Tousen Y, Ezaki J, Nishimuta M, Ishimi Y: Effect of natural S-equol on bone metabolism in equol non-producing postmenopausal Japanese women: a pilot randomized placebo-controlled trial. The North American Menopause Society 21th Annual Meeting. 2010.10.07, Sheraton Chicago Hotel, Chicago, USA
- 19) Tousen Y, Ezaki J, Fujii Y, Ueno T, Nishimuta M, Ishimi Y: Equol Decreased Bone Resorption in Postmenopausal Japanese Women of Equol Non-Producer: a Pilot Randomized Placebo-Controlled Trial. American Society of Bone and Mineral Research (ASBMR) 2010 Annual Meeting. 2010.10.16, Metro Toronto Convention Centre, Toronto, Canada
- 20) Tousen Y, Ezaki J, Fujii Y, Ueno T, Ueno S, Ishimi Y: Effects of an Equol Supplement on Bone Mineral Density in Postmenopausal Japanese Women. The 9th International Symposium on the Role of Soy in Health Promotion and Chronic Disease Prevention and Treatment. 2010.10.19, Capital Hilton, Washington D.C, USA
- 21) Nagata J, Nakamura A, Ishimi Y: In vivo and in vitro studies on physiological functions of Ashitaba (*Angelica Keiskei*) and their extracts. Pacificchem 2010. 2010.12.19 Hawaii, USA
- 22) Taku K, Lin N, Cai D, Hu J, Zhao X, Zhang Y, Wang P, Melby MK, Hooper L, Kurzer MS, Mizuno S, Ishimi Y, Watanabe S: EFFECTS OF SOY ISOFLAVONE EXTRACT SUPPLEMENTS ON BLOOD PRESSURE IN ADULT HUMANS: SYSTEMATIC REVIEW AND META-ANALYSIS OF RANDOMIZED PLACEBO-CONTROLLED TRIALS. 78th European Atherosclerosis Society Congress (EAS); June 20-23, 2010.. 2010.06.22, Hamburg, Germany
- 23) Taku K, Melby MK, Mindy S, Kurzer, Mizuno S, Watanabe S, Ishimi Y: Effects of Soy Isoflavone Supplements on Bone Turnover Markers in Menopausal Women: Systematic Review and Metaanalysis of Randomized Controlled Trials. The American Society for Bone and Mineral Research (ASBMR) 2010 Annual Meeting. October 15-19, 2010.. 2010.10.15, Metro Toronto Convention Centre/South Building, Toronto, Ontario, Canada
- 24) Tsuboyama-Kasaoka N, Yu Hosokawa: Association of taurine synthesis pathway with fat cell size in mice. 11th International Congress on obesity. 2010.07, Sweden
- 25) Foo LH, Matsushita Y, Nishi N, Mizoue T: Impact of occupational job status on metabolic syndrome risk in working men in Kyushu, Japan. 42nd APACPH (Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health) Conference. 2010.11.24, Bali, Indonesia
- 【国内学会等】**
- a. 特別講演
- 1) 森田明美: ライフステージ別の活用について. NPO法人日本栄養改善学会近畿支部 第5回市民公開講座および研修会. 2010.06.27, 京都府京都市
 - 2) 宮地元彦: 動脈ステイフネスと運動. 第65回日本体力医学会大会. 2010.09.16, 千葉商科大学、市川市、千葉県
 - 3) 門脇孝: 「グローバル化するわが国の糖尿病学～伝統を未来へと受け継ぐ情熱」. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010.05.27, 岡山
 - 4) 門脇孝: 肥満症治療の最先端と未来像. 第3回日本肥満症治療学会学術集会. 2010.09.10, 東京
 - 5) 門脇孝: わが国の糖尿病医療の現状と看護職への期待. 第15回日本糖尿病教育・看護学会学術集会. 2010.10.10, 東京
 - 6) 門脇孝: 遺伝子操作動物を用いた糖尿病研究の戦略. 「予防動物医学研究会」学術シンポジウム. 2010.10.24, 東京
 - 7) 門脇孝: 糖尿病の成因と病態に関する最近の知見. 南條輝志男理事長・学長退職記念会. 2010.11.07, 和歌山
 - 8) 門脇孝: 日本人2型糖尿病の成因と治療戦略. 兵庫医科大学病院糖尿病グループ設立10周年記念講演会. 2010.11.13, 大阪
 - 9) 門脇孝: 2型糖尿病の統合的治療戦略 Molecular Mechanism of obesity-linked insulin resistance and type2 diabetes . 第18回日本血管生物医学会学術集会および第8回Korea-Japan Joint Symposium on Vascular Biology. 2010.12.02, 大阪
 - 10) 門脇孝: 生活習慣病の分子機構と治療戦略. 第

- 45回日本成人病（生活習慣病）学会学術集会.
2011.01.16, 東京
- 11) 門脇孝: 糖尿病予防について. 第4回健康日本21推進全国連絡協議会「栄養・食生活分科会」.
2011.01.27, 東京
 - 12) 門脇孝: 誰でも分かる! やさしい糖尿病教室.
門脇孝教授の糖尿病がよくわかるセミナー.
2011.01.30, 鳥取
 - 13) 門脇孝: 明日の糖尿病医療—希望と挑戦. 糖尿病シンポジウム. 2011.03.27, 富山
 - 14) 梅垣敬三: サプリメントに関する適正な情報マネージメント. . 第13回日本医薬品情報学会学術大会. 2010.07.25, 浜松
- b. シンポジウム等**
- 1) 森田明美: 日本人の食事摂取基準（2010年版）～科学的根拠の吟味と創出～. 第21回日本微量元素学会学術集会. 2010.07.04, 京都府京都市
 - 2) 宮地元彦: 若手企画シンポジウム、臨床研究サルコペニアの臨床、サルコペニアに対する治療の可能性—運動. 第52回日本老年医学会学術集会. 2010.06.25, 神戸国際会議場（兵庫県神戸市）
 - 3) 宮地元彦: パネルディスカッション「今私たちに何ができるか、何をすべきか」生活習慣病と介護の両方を予防する運動. 第55回長野県国保地域医療学会. 2010.07.03, メルパルク長野（長野市）
 - 4) 宮地元彦: NPO法人健康早稲田の杜による特定保健指導の内容と課題、シンポジウム1「労働者に対する特定保健指導の意義」. 第51回日本人間ドック学会学術大会. 2010.08.26, 旭川市民会館、旭川市
 - 5) 宮地元彦: 健康づくりのための運動・身体活動と食、”健康な食習慣”の獲得・健康な”コミュニティの形成—身体活動、睡眠、タバコと食の関連およびその波及から—. 日本栄養改善学会. 2010.09.12, 女子栄養大学（埼玉県）
 - 6) 宮地元彦: 「健康づくりのための運動・身体活動と食」、市民公開講座「”健康な食習慣”の獲得・健康なコミュニティの形成—身体活動、睡眠、タバコと食の関連およびその波及から—. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010.09.12, 女子栄養大学、埼玉県
 - 7) 田中茂穂, 高田和子: エネルギー消費量のアセスメント（シンポジウム「スポーツ選手における栄養アセスメント」）. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010.09.12, 女子栄養大学（坂戸）
 - 8) 高田和子: 日本における体力科学研究成果の社会的還元の必要性と課題. 第65回日本体力医学会. 2010.09.16, 千葉
 - 9) 宮地元彦: 特定健診・保健指導における運動指導、公開市民講座「身体活動・運動の推進による生活習慣病予防：一次予防から三次予防まで」（主催：日本学術会議）. 第65回日本体力医学会大会. 2010.09.18, 千葉商科大学、市川市、千葉県
 - 10) 田中茂穂: 健康づくりに必要な身体活動・運動（公開市民講座「身体活動・運動の推進による生活習慣病予防：一次予防から三次予防まで」（主催：日本学術会議））. 第65回日本体力医学会大会. 2010.09.18, 千葉商科大学（市川市）
 - 11) 増田和茂, 宮地元彦, 田中喜代次, 荒尾祐子, 塙久子, 木村典代, 高崎尚樹, 松本弘志: 特定保健指導に求められる「正しくたのしい健康づくり」2. シンポジウム「1に運動 2に食事 しっかり禁煙 がんばれ健康運動指導士」. 第69回日本公衆衛生学会総会 健康運動指導分科会創設記念シンポジウム. 2010.10.29, 東京国際フォーラム（東京）
 - 12) 宮地元彦: 様々な身体活動と動脈ステイフネス、シンポジウム⑦運動と動脈硬化、座長：前田清司、宮地元彦. 第21回日本臨床スポーツ医学会. 2010.11.06, エポカルつくば（つくば市）
 - 13) 村上晴香: スポーツ・身体活動と遺伝子多型. 第80回東京体育学会研究会. 2010.12.06, 東京
 - 14) 窪田直人, 窪田哲也, 熊谷裕紀, 井上真理子, 河合智子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肝臓における糖と脂質代謝の分子メカニズム 糖と脂質代謝における肝IRS1とIRS2の生理学的・病態生理学的役割(Molecular Mechanisms of Glucose and Lipid Metabolism in the Liver The physiological and pathophysiological roles of hepatic IRS1 and IRS2 in the glucose and lipid metabolism). 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010.05.27, 岡山
 - 15) 門脇孝: 「生活習慣病の分子メカニズムと治療戦略—機能性食品開発の意義を含めて」. フード・フォーラム・つくば 春の例会. 2010.06.01, 茨城
 - 16) 門脇孝: 「食とアンチエイジング—長寿遺伝子を活性化する」. 第10回日本抗加齢医学会総会. 2010.06.11, 京都
 - 17) 門脇孝: メタボリックシンドロームとアンチエイジング. エディケーショナルセミナー『アンチエイジング医学最先端2010』. 2010.07.27, 東京
 - 18) 門脇孝: 2型糖尿病の成因と対応. 第27回糖尿病Up-Date賢島セミナー. 2010.08.28, 賢島
 - 19) 窪田直人, 窪田哲也, 山内敏正, 植木浩二郎, 箕越靖彦, 門脇孝: アピタイトカインの分子基盤と肥満 アディポネクチンの摂食・エネルギー代謝調節メカニズム. 第31回日本肥満学会. 2010.10.01, 群馬
 - 20) 窪田直人, 窪田哲也, 門脇孝: 血管細胞の転写調節 Impaired insulin signaling in the endothelial cells reduces insulin-induced glucose uptake by the skeletal muscle. 第18回日本血管生物医学会学術集会. 2010.12.02, 大阪

- 21) 門脇孝: 糖尿病学会アクションプランDREAMS. 第45回糖尿病学の進歩. 2011. 02. 18, 福岡
 - 22) 江崎治: 脂質の食事摂取基準と最新情報. 第60回日本栄養・食糧学会中部支部大会. 2010. 11. 13, 岐阜大学応用生物科学部(岐阜)
 - 23) 石見佳子, 卓興鋼, 山内淳: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的レビューとその検証に関する研究(第3報). 不二たん白質研究振興財団 第13回研究報告会. 2010. 05. 31, 大阪
 - 24) 石見佳子: 食品安全委員会における特定保健用食品の安全性評価の現状. 日本食物繊維学会産学協議会. 2010. 04. 09, 東京
 - 25) 石見佳子: エクオール含有食品が閉経後女性の骨代謝に及ぼす影響. 第28回日本骨代謝学会. 2010. 07. 20
 - 26) 石見佳子: 閉経後女性及び閉経後骨粗鬆症モデル動物におけるエクオールの骨代謝調節作用. 第25回日本更年期医学会. 2010. 10. 02, 鹿児島
 - 27) 梅垣敬三: 機能性食品の安全性と有用性の評価. 日本アミノ酸学会 第2回産官学連携シンポジウム. 2010. 06. 07, 東京
 - 28) 梅垣敬三: ポリフェノールの安全性確保. ポリフェノール学会. 2010. 08. 06, 新座市
 - 29) 梅垣敬三: 健康食品問題の改善に向けた情報提供活動. フォーラム2010: 衛生薬学・環境トキシコロジー. 2010. 09. 09, 東京
 - 30) 梅垣敬三: 植物成分を利用した健康食品の現状と問題点. 第18回天然薬物の開発と応用シンポジウム. 2010. 11. 11, 東京
 - 31) 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三: 新たなエビデンスデータベースの構築と情報発信. 第64回日本栄養・食糧学会大会 シンポジウム「健康食品のエビデンスから教育まで」. 2010. 05., 徳島
 - 32) 三好美紀: 栄養士の視点から. 第29回日本国際保健医療学会西日本地方会パネルディスカッション「世界が健康に食べるには」: 2011.3.5: 佐賀
- c. 一般講演等
- 1) 山内淳, 関口真理子, 白鳥明日香, 石見佳子, 井上絵里奈: インスリン抵抗性におけるRBP4遺伝子制御機構の解析. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05, 徳島
 - 2) 三宅理江子, 大河原一憲, 高田和子, 森田明美, 渡邊昌, 池本真二, 田中茂徳: 肥満者における基礎代謝量推定式の妥当性. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05. 22, 徳島
 - 3) 野末みほ, 猿倉薫子, 由田克士: 青果物に対する大きさの主観的な認識について. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05. 23, 徳島市
 - 4) 高市麻貴, 森田明美, 新保卓郎, 渡邊昌, 野田光彦: BMIの経時変化が日本人のインスリン動態に与える影響に関する検討. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 28, 岡山
 - 5) 中出麻紀子, 饗場直美, 森田明美, 宮地元彦, 佐々木敏, 渡邊昌: 行動変容技法を用いた1年間の減量プログラムの効果及び効果の持続性-佐久肥満克服プログラム(SCOP)-. 第46回日本循環器予防学会. 2010. 05. 29, 東京
 - 6) 山内淳, 山下葵, 白鳥明日香, 関口真理子, 井上絵里奈: RBP4遺伝子プロモーター上に存在するGLUT4ノックダウン依存的転写活性化配列の同定と転写活性化に必要な転写因子のクローニング. 日本ビタミン学会第62回大会. 2010. 06. 12, 盛岡
 - 7) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ, 西信雄, 三浦克之: NIPPON DATA 80・90における総摂取エネルギー量および3大栄養素摂取量等と体格の相互関係に関する検討. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 10, 坂戸市
 - 8) 大野尚子, 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ, 猿倉薫子, 等々力英美, 西信雄, 丸山千寿子: 沖縄県における水分摂取状況に関する報告. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 10, 坂戸市
 - 9) 古谷華菜子, 川上純子, 中出麻紀子, 饗場直美: 学童期における食育が女子学生の食生活および食意識に及ぼす影響について. 第57回日本栄養改善学会. 2010. 09. 11, 埼玉県
 - 10) Kawashima N, Morita A, Aiba N, Miyachi M, Watanabe S, for SCOP group: Adiponectin, leptin and adiponectin to leptin ratio relating to the risk of metabolic syndrome in rural residents. Saku Control Obesity Program(SCOP). 第57回日本栄養改善学会. 2010. 09. 11, 埼玉
 - 11) 大森由実, 宮地元彦, 森田明美, 饗場直美, 中出麻紀子, 橋本佐由理, 渡邊昌: 中高齢者における心理特性と食行動. メタボリックシンドロームとの関連. 第57回日本栄養改善学会. 2010. 09. 11, 埼玉.
 - 12) 佐藤倫広, 菊谷昌浩, 原梓, 大久保孝義, 森建文, 目時弘仁, 坪田(宇津木)恵, 井上隆輔, 浅山敬, 小原拓, 戸恒和人, 星晴久, 佐藤洋, 今井潤: 血漿アルドステロン/レニン活性比と高血圧有病およびNa摂取量との関連: 家庭血圧を用いた検討(大迫研究). 第32回日本高血圧学会総会. 2010. 10. 03, 滋賀
 - 13) 中出麻紀子, 古谷華菜子, 川上純子, 饗場直美: 大学生の朝食欠食と子どもの頃の家庭での親による食育実施との関連. 第69回日本公衆衛生学会. 2010. 10. 29, 東京
 - 14) 阿部桜子, 山崎喜比古, 米倉佑貴, 片山千栄, 赤松利恵, 饗場直美, 中出麻紀子, 林英美, 武見ゆかり: 食領域におけるソーシャルキャピタルの測定の試みとその関連要因の検討. 第69回日本公衆衛生学会. 2010. 10. 29, 東京都
 - 15) 林英美, 赤松利恵, 山崎喜比古, 饗場直美, 中出麻紀子, 片山千栄, 武見ゆかり: 「暮らしのゆとり感」と食育への関わり、食習慣、及び食事の満足感との関係. 第69回日本公衆衛生学会. 2010. 10. 29, 東京都
 - 16) 市原典子, 蒲田裕子, 高田和子, 難波和美, 藤

- 井正吾：二重標識水法を用いて立案した試験的栄養方法がALSの栄養状態に及ぼす影響. 第51回神経学会. 2010. 05. 20, 東京
- 17) 丸藤 祐子, 山元 健太, 村上 晴香, 大森 由実, 川上 諒子, 真田 樹義, 樋口 満, 田畑 泉, 宮地 元彦: 低強度の身体活動時間は動脈壁の硬化と関連する. 第10回臨床血圧脈波研究会. 2010. 05. 22, 東京
 - 18) 熊江隆, 古泉佳代, 金子佳代子: 女子大生を対象とした牛乳摂取による体脂肪制御効果に関する介入研究. 第1報 栄養素摂取状況と心理状況の変化. . 第20回体力・栄養・免疫学会プログラム・抄録集. 2010. 08. 28, 西目屋村中央公民館 (平和会館) 青森県中津軽郡西目屋村
 - 19) 梶忍, 熊江隆, 樫村修生: 東京都内S O 1 地区における健康意識と公園等緑地面積の関係. 第20回体力・栄養・免疫学会プログラム・抄録集. 2010. 08. 29, 西目屋村中央公民館 (平和会館) 青森県中津軽郡西目屋村
 - 20) 大坂寿雅: 低酸素刺激による低体温反応への視床下部終板器官周囲部の $\alpha 1$ アドレナリン受容体と一酸化窒素の関与. 平成22年度 温熱生理研究会. 2010. 09. 09, 岡崎カンファレンスセンター (愛知県岡崎市)
 - 21) 三宅理江子, 田中茂穂, 安藤貴史, 谷本道哉, 渡邊裕也, 村上晴香, 宮地元彦: 高齢者におけるレジスタンストレーニング介入による基礎代謝量の変化. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 16, 千葉商科大学 (市川市)
 - 22) 熊江隆, 鈴川一宏, 水野増彦, 田畑泉: 男子学生短距離選手の生活環境の違いが強化合宿による血液検査値等の変動に及ぼす影響. 第65回日本体力医学会大会予稿集. 2010. 09. 16, 千葉商科大学 (千葉県市川市)
 - 23) 引原有輝, 緑川泰史, 太田めぐみ, 鳥居 俊, 田中茂穂: 生体電気抵抗法を用いた小児の体脂肪率の妥当性. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 17, 千葉商科大学 (市川市)
 - 24) 朴鍾薫, 高田和子, 引原有輝, 田中茂穂, 大河原一憲, 三宅理江子, 田畑泉: 成人男女における身体活動レベルと エクササイズ/週との関係. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 17, 千葉商科大学 (市川市)
 - 25) 田中千晶, 高田和子, 田中茂穂: 生活活動記録から得られた活動強度別の所要時間と身体活動レベルとの関連. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 18, 千葉商科大学 (市川市)
 - 26) 大島秀武, 引原有輝, 大河原一憲, 高田和子, 三宅理江子, 海老根直之, 田畑泉, 田中茂穂: 健康づくりのための身体活動量の基準値 (23 エクササイズ) と歩数の関係. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 18, 千葉商科大学 (市川市)
 - 27) 村上晴香, 家光素行, 真田樹義, 丸藤祐子, 川上諒子, 福 典之, 林貢一郎, 宮地元彦: 身体活動・運動行動に関連する遺伝的要因: ゲノムワイド解析. 第65回 日本体力医学会. 2010. 09. 18, 千葉
 - 28) 鈴木洋子, 大坂寿雅, 石塚典子, 清水弘行, 井上修二: VMH破壊マウスとベタネコール投与マウスにおける血中アディポネクチンの上昇. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, (群馬県前橋市)
 - 29) 熊江隆: 女子大生の体格指標に及ぼす6ヶ月間の牛乳摂取の影響. 日本公衆衛生雑誌. 2010. 10. 27, 東京国際フォーラム (東京都千代田区)
 - 30) 熊江 隆, 古泉佳代, 金子佳代子: 女子大学生の安静時における非特異免疫能の検討. 第80回日本衛生学会学術総会講演集, 392, 2010. 5. 10: 仙台国際センター (仙台市)
 - 31) 熊江 隆, 古泉佳代, 金子佳代子: やせ傾向の女子大生における牛乳の体脂肪制御効果に関する研究. 第64回日本栄養・食糧学会大会講演要旨集, 140, 2010. 5. 22. : アスティとくしま (徳島市)
 - 32) 川島美保, 井上清美, 野村美千江, 高田和子, 森谷満: コーチング学習が看護学生に与えた影響: 第二報 学習直後のインタビューから. 第69回日本公衆衛生学会. 2010. 10. 28, 東京
 - 33) 井上清美, 野村美千江, 川島美保, 高田和子, 森谷満: コーチング学習が看護学生に与えた影響 (第一報) : 学習前後のEQIの変化に着目して. 第69回日本公衆衛生学会. 2010. 10. 28, 東京
 - 34) 別所京子, 小林久子, 桂きみよ, 高田和子: 大量調理操作時における動作強度の検討. 給食経営管理学会. 2010. 10. 29, 滋賀
 - 35) 蒲田裕子, 市原典子, 高田和子, 難波和美, 揚村和英, 藤井正吾: 長期経管栄養管理のALS患者における適正栄養の検討. 第14回日本病態栄養学会. 2011. 01. 15, 神奈川
 - 36) 竹内亮, 石塚喜美枝, 永田順子, 久保田晃生, 高田和子, 太田壽城: 保健所管内別にみる高齢者の生活実態と地域特性との関連性について～静岡県高齢者生活実態調査の結果から～. 第47回静岡県公衆衛生研究会. 2011. 02. 10, 静岡
 - 37) 熊江隆, 古泉佳代, 金子佳代子: 女子大学生の血清中抗酸化バランスに及ぼす6ヶ月間の牛乳摂取の影響. . 日本衛生学雑誌. 2011. 03. 26, 東京都品川区旗の台 昭和大学
 - 38) 梶 忍, 熊江隆, 樫村修生: 大都市住民の主観的健康感に及ぼす公園等の緑地面積の関係. . 日本衛生学雑誌. 2011. 03. 27, 東京都品川区旗の台
 - 39) 別所京子, 高田和子: 大量調理荘佐治における動作強度と身体活動レベルの検討. 第57回日本栄養改善学会. 2011. 09. 12, 埼玉
 - 40) 河合智子, 窪田直人, 窪田哲也, 熊谷洋紀, 井上真理子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体の抗動脈硬化作用におけるアディポネクチンの役割の解明. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山

- 41) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 岩根亜弥, 堀越桃子, 栗澤元晴, 金子と真, 鈴木美穂, 諏訪内浩紹, 小林直樹, 小林正稔, 笹子敬洋, 大杉満, 窪田直人, 原一雄, 山内敏正, 吉村浩太郎, 光嶋勲, 油谷浩幸, 門脇孝: ヒト脂肪組織発現解析を用いた病態特異的アディポカインの検索. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 42) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: アディポネクチン受容体 (AdipoR) 欠損マウスを用いたアディポネクチン経路の動脈硬化における病態生理的意義の解明. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 43) 中屋恵三, 窪田直人, 高本偉碩, 窪田哲也, 勝山修行, 橋本信嗣, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: DPP-4阻害薬の2型糖尿病モデル動物に対する長期投与効果の検討. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 44) 笹子敬洋, 植木浩二郎, 岩根亜弥, 金子と真, 鈴木美穂, 小林正稔, 栗澤元晴, 岡崎由希子, 大杉満, 窪田直人, 戸辺一之, 門脇孝: 摂食に伴う肝臓での小胞体ストレスのインスリン感受性に及ぼす作用の検討. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 45) 窪田直人, 窪田哲也, 熊谷裕紀, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肝臓の糖・脂質代謝におけるIRS-1、IRS-2の役割. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 46) 高本偉碩, 窪田直人, 中屋恵三, 熊谷勝義, 勝山修行, 窪田哲也, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵β細胞のTcf712は膵β細胞量維持に重要な役割を果たしている. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 47) 勝山修行, 大杉満, 窪田直人, 戸辺一之, 小林正稔, 笹子敬洋, 金子と真, 金子と真, 門脇孝: 膵島IRS-2量調節の分子機構(1) 肥満・糖尿病モデルにおけるIRS-2量. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 48) 大杉満, 窪田直人, 戸辺一之, 小林正稔, 笹子敬洋, 金子と真, 勝山修行, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵島IRS-2量調節の分子機構(2) 分子メカニズム. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 49) 山内敏正, 岩部美紀, 岩部真人, 山口麻美子, 中山亮, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: AdipoR欠損マウス及び培養細胞を用いた代謝に重要な各組織におけるアディポネクチン受容体を介した細胞内情報伝達の解析. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 50) 井上真理子, 窪田直人, 窪田哲也, 熊谷洋紀, 河合智子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 中枢のIRS-2の糖代謝調節における役割の解明-脳特異的IRS-2欠損マウスを用いて-. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 28, 岡山
- 51) 窪田哲也, 窪田直人, 熊谷洋紀, 井上真理子, 河合智子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 骨格筋のインスリン感受性調節における血管内皮細胞のインスリンシグナルの役割の解明. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 28, 岡山
- 52) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの予防戦略と食品因子への期待. 食品因子と疾患予防に関する医学・農学・工学研究者連携体制構築戦略会議(発表会). 2010. 08. 29
- 53) 門脇孝: メタボリックシンドローム・糖尿病の鍵分子AdipoR/CaMKK/AMPK/Accタンパク群の立体構造解析・in silico screeningとそれに基づく治療法開発. 第2回ターゲットタンパク研究プログラム産学懇話会(発表会). 2010. 09. 02
- 54) 勝山修行, 大杉満, 窪田直人, 戸辺一之, 小林正稔, 笹子敬洋, 金子と真, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵島IRS-2量調節の分子機構 肥満・糖尿病モデルにおけるIRS-2量. 第3回日本肥満症治療学会学術集会. 2010. 09. 10, 東京
- 55) 中屋恵三, 窪田直人, 高本偉碩, 窪田哲也, 勝山修行, 橋本信嗣, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: 肥満・インスリン分泌不全を呈する2型糖尿病モデル動物に対するDPP-4阻害薬の長期投与効果. 第3回日本肥満症治療学会学術集会. 2010. 09. 10, 東京
- 56) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: アディポネクチン受容体欠損マウスを用いたアディポネクチン経路の動脈硬化における病態生理的意義の解明. 第3回日本肥満症治療学会学術集会. 2010. 09. 10, 東京
- 57) 門脇孝: 新しいメタボリックシンドローム基準とアディポサイトカインの最近の知見. 第10回抗加齢医学の実践2010. 2010. 09. 19, 東京
- 58) 中屋恵三, 窪田直人, 高本偉碩, 窪田哲也, 勝山修行, 橋本信嗣, 後藤守兄, 城森孝仁, 植木浩二郎, 門脇孝: 肥満・インスリン分泌不全を呈する2型糖尿病モデル動物に対するDPP-4阻害薬の長期投与効果. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01
- 59) 岩部美紀, 山内敏正, 岩部真人, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: AdipoR欠損マウスを用いたアディポネクチン経路の動脈硬化における病態生理的意義の解明. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, 群馬
- 60) 山内敏正, 岩部美紀, 岩部真人, 窪田直人, 植木浩二郎, 門脇孝: 代謝に重要な各組織におけるアディポネクチン受容体を介した細胞内情報伝達の解析. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, 群馬
- 61) 窪田直人, 窪田哲也, 渡部拓, 西村正治, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肝臓の糖・脂質代謝におけるIRS-1、IRS-2の役割. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, 群馬
- 62) 笹子敬洋, 植木浩二郎, 大杉満, 窪田直人, 戸辺一之, 門脇孝: 新規小胞体ストレス調節因子Sdf211による摂食時の肝臓でのインスリン感受

- 性調節作用の検討. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, 群馬
- 63) 門脇孝: 糖尿病腎症の治療戦略 - 特にARBの臨床的意義について -. 第31回日本肥満学会 共催教育セミナー. 2010. 10. 02, 前橋
- 64) 窪田哲也, 窪田直人, 熊谷洋紀, 井上真理子, 河合智子, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 骨格筋のインスリン感受性調節における血管内皮細胞のインスリンシグナルの役割の解明. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 02, 前橋
- 65) 門脇孝: “アンチエイジングと食” 研究最前線—長寿遺伝子活性化のための食成分とは— Current research on anti-aging and food-activation of longevity-genes. 食品開発展 2010記念セミナー. 2010. 10. 13, 東京
- 66) 窪田直人, 窪田哲也, 門脇孝: 血管内皮細胞インスリンシグナルの糖代謝調節における役割の解明. 第60回日本体質医学会総会. 2010. 10. 16, 熊本
- 67) 門脇孝: 進む糖尿病の治療. 東京新聞健康講座. 2010. 10. 26, 東京
- 68) 門脇孝: 糖尿病の現在と未来. 世界糖尿病デブルーライトアップin東京. 2010. 11. 14, 東京
- 69) 門脇孝: 精神疾患やその治療薬と糖尿病. 第23回日本総合病院精神医学会総会ランチョンセミナー. 2010. 11. 26, 東京
- 70) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの病態と機能性食品の意義. 第26回食品化学シンポジウム. 2010. 11. 30, 東京
- 71) 門脇孝: 糖尿病の診断と治療. 第20回臨床内分泌代謝Update. 2011. 01. 28, 北海道
- 72) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. 千葉県病院薬剤師会・千葉市薬剤師会合同研修会. 2011. 02. 01, 千葉
- 73) 門脇孝: 血糖が気になるあなたへ—予防と治療のコツ. 平成22年度北多摩北部医療圏糖尿病ネットワーク年公開講座. 2011. 02. 06, 東京
- 74) 門脇孝: 糖尿病の病態と治療に関する最近の知見. 第11回日本内分泌学会関東甲信越支部学術集会. 2011. 03. 04, 横浜
- 75) 門脇孝: 2型糖尿病の分子機構と治療戦略. 第84回日本薬理学会年会. 2011. 03. 23, 横浜
- 76) 門脇孝: 2型糖尿病の統合的治療戦略. 第23回腎と脂質研究会. 2011. 03. 26, 東京
- 77) 周遊, 小泉憲裕, 窪田直人, 浅野岳晴, 湯橋一仁, 望月剛, 門脇孝, 佐久間一郎, 廖洪恩: 超音波診断に基づいた簡便かつ精確な内臓脂肪面積推測法の構築. 第19回日本コンピュータ外科学会大会. 2011. 10. 02, 福岡
- 78) 竹澤 純, 山田晃一, 森田明美, 饗場直美, 渡邊 昌: 日本人肥満女性に於けるプレプログレリン遺伝子多型: 食欲と食事傾向について. 第33回日本分子生物学会年会第83回日本生化学会合同大会. 2010. 12. 10, 神戸ポートアイランド
- 79) 亀井康富, 江原達弥, 菅波孝洋, 金井紗綾香, 三浦進司, 江崎治, 小川佳宏: 生活習慣病とDNAメチル化: DNAメチル化酵素遺伝子改変マウスとDNAメチル化促進飼料による検討. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05. 23, アスティとくしま(徳島県)
- 80) Chiba T, Ezaki O: Diet Restriction Suppresses Inflammation and Delays the Onset of Stroke in Stroke-Prone Spontaneously Hypertensive Rats.. 第42回日本動脈硬化学会. 2010. 07. 16, 岐阜都ホテル(岐阜)
- 81) 只石幹, 三浦進司, 川中健太郎, 江崎治: 運動強度の違いがPGC-1 α isoform mRNA発現に及ぼす影響. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 16, 千葉商科大学(千葉)
- 82) 志内哲也, 三浦進司, 江崎治, 箕越靖彦: 中枢レプチン投与後の骨格筋でのグルコース取込みにおけるAMPKの関与. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 17, 千葉商科大学(千葉)
- 83) 三浦進司, 只石幹, 江崎治: 骨格筋LKB1活性は低強度運動時の脂肪酸酸化亢進に必須である. 第65回日本体力医学会大会. 2010. 09. 17, 千葉商科大学(千葉)
- 84) 杉田聡, 亀井康富, 赤池史子, 菅波孝洋, 金井紗綾香, 眞鍋康子, 藤井宣晴, 三浦進司, 江崎治, 小川佳宏: 骨格筋における核内受容体RXR γ の糖代謝促進作用. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 01, 煥乎堂(群馬)
- 85) 志内哲也, 三浦進司, 江崎治, 箕越靖彦: レプチン中枢投与後の骨格筋におけるグルコース取込みとAMPKの調節作用. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 02, 煥乎堂(群馬)
- 86) 山崎聖美, 江崎治: 飽和脂肪酸過剰摂取による脂肪肝発症は肝臓PPAR γ 2発現ノックダウンにより予防できる. 第31回日本肥満学会. 2010. 10. 02, 前橋テルサ(群馬)
- 87) 竹林純, 松本輝樹, 卓興鋼, 石見佳子: 日本において一般的に食されている野菜類からの抗酸化物質一日摂取量の推算. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 11, 女子栄養大学 坂戸キャンパス(埼玉)
- 88) 谷中かおる, 東泉裕子, 松本輝樹, 竹林純, 卓興鋼, 山田和彦, 石見佳子: 「健康食品」中の大豆たんぱく質および大豆イソフラボンの定量と表示に関する調査研究. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 11, 女子栄養大学 坂戸キャンパス(埼玉)
- 89) 東泉裕子, 石見佳子: 大豆イソフラボン代謝産物が雄性骨粗鬆症モデルマウスの骨量減少に及ぼす影響. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 12, 女子栄養大学(埼玉)
- 90) 石見佳子, 小坂谷典子, 西牟田守, 山内淳, 佐々木敏, 小松美穂, 青木麻美, 森下幸治: ビタミンK2 (MK-4) の補給摂取が閉経後女性の骨代謝及び脂質代謝に及ぼす影響. 第329回脂溶性ビタミン総合研究委員会. 2010. 09. 17, 東京
- 91) 東泉裕子, 安部文子, 石田達也, 上原万里子,

- 石見佳子: ダイゼインとレジスタントスターチの併用摂取は骨粗鬆症モデルマウスのエクオール産生を促進し脛骨の骨量減少を抑制する. 第15回日本食物繊維学会学術集会. 2010. 11. 22, 北海道 (札幌)
- 92) 中村 礼、城内文吾、古場一哲、石見佳子、永田純一: β -コングリシニンと中鎖脂肪酸を含む食用油の併用摂取がマウスの体脂肪および脂質代謝に及ぼす影響. 第64回日本栄養・食糧学会. 2010. 5. 23, アスティーとくしま (徳島)
- 93) 中村 礼、石見佳子、永田純一: 体脂肪低減をもたらす機能性食品素材の摂取が成長期マウス骨密度に及ぼす影響. 第57回日本栄養改善学会. 2010. 9. 12, 女子栄養大学 坂戸キャンパス (埼玉)
- 94) 渡辺純、沖智之、竹林純、山崎光司、石川 (高野) 祐子: 食品の統一的な抗酸化力測定法の確立とその活用 (1) 親油性・親水性抗酸化物質の抽出効率. 日本農芸化学会2011年度大会. 2011. 03. 27, 京都
- 95) 沖智之、竹林純、渡辺純、山崎光司、佐藤麻紀、須田郁夫: 食品の統一的な抗酸化力測定法の確立とその活用 (2) 一般的な野菜と果物の親水性ORAC. 日本農芸化学会2011年度大会. 2011. 03. 27, 京都
- 96) 竹林純、沖智之、渡辺純、山崎光司、松本輝樹、陳健斌、石見佳子: 食品の統一的な抗酸化力測定法の確立とその活用 (3) 野菜・果物からの親水性抗酸化物質摂取量の試算と抗酸化サプリメントとの比較. 日本農芸化学会2011年度大会. 2011. 03. 27, 京都
- 97) 松本輝樹、竹林純、遠藤香、石見佳子: 認証標準物質に含有されるシアノコバラミンの定量化に関する研究. 日本分析化学会第59年会. 2010. 09. 17, 仙台
- 98) 梅垣敬三、バーゴナ ナンティガ、横谷馨倫、瀧優子、山田静雄: 簡便なフォルスコリン分析法の開発といわゆる健康食品中のフォルスコリン含量と表示の調査. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05. 22, 徳島
- 99) 横谷馨倫、梅垣敬三: 茶カテキンの生体内における抗酸化能評価の問題点. 第64回日本栄養・食糧学会大会. 2010. 05. 23, 徳島
- 100) 久保田洋子、梅垣敬三、田中直子、籠田智美、安西和紀、篠塚和正: ラット摘出心房と胸部大動脈に対するブラジル産プロポリスとその起源植物抽出エキスの影響. 第122回日本薬理学会関東支部会. 2010. 06. 05, 静岡
- 101) 豊泉樹一郎、吉川俊博、渡邊崇之、松本圭司、朴 美貞、小菅和仁、梅垣敬三、山田 浩: ランダム化比較試験を対象としたメタアナリシスによる茶および茶カテキンの脂質異常症におよぼす影響. 第13回日本医薬品情報学会学術大会. 2010. 07. 24, 浜松
- 102) 松本圭司、加藤竜維、鈴木 悟、朴 美貞、小菅和仁、梅垣敬三、山田 浩: 健康食品の摂取に伴う健康被害として報告される情報の因果関係評価判定法の検討. 第13回日本医薬品情報学会学術大会. 2010. 07. 24, 浜松
- 103) 加藤竜維、松本圭司、清水雅之、渡邊崇之、小菅和仁、望月亜希子、岩崎剛士、神戸宏憲、坂本達一郎、河原崎貴伯、梅垣敬三、山田浩: 健康食品と医薬品の併用に伴う有害事象事例の因果関係評価のためのアルゴリズムの信頼性の検討. 第13回日本医薬品情報学会学術大会. 2010. 07. 24, 浜松
- 104) 佐藤陽子、中西朋子、横谷馨倫、橋本洋子、梅垣敬三: 幼児の保護者の食・栄養に関する知識調査. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 11, 埼玉
- 105) 横谷馨倫、佐藤陽子、中西朋子、梅垣敬三: フラボノイド類の血液中の抗酸化能評価における留意点. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 11, 埼玉
- 106) 中西朋子、佐藤陽子、横谷馨倫、瀧沢あす香、笠岡 (坪山) 宜代、梅垣敬三: 管理栄養士・栄養士の特別用途食品に関する認知度や利用状況の特徴. 第57回日本栄養改善学会学術総会. 2010. 09. 11, 埼玉
- 107) 古池直子、荒井裕介、佐藤美津代、角倉知子、三好美紀、廣田晃一: 健康づくり・生活習慣病予防のための「食育」関連情報サイトの構築. 第17回日本未病システム学会学術総会. 2010. 11. 13, 沖縄県那覇市
- 108) 高橋光明、松本圭司、鈴木悟、加藤竜維、豊泉樹一郎、小菅和仁、梅垣敬三、山田浩: 健康食品の摂取に伴う健康被害報告の因果関係評価判定法の検討. 第31回日本臨床薬理学会年会. 2010. 12. 01, 京都
- 109) 豊泉樹一郎、吉川俊博、渡邊崇之、松本圭司、朴美貞、小菅和仁、梅垣敬三、山田浩: 茶カテキンの血清脂質に及ぼす影響: ランダム化比較試験を対象としたメタアナリシス. 第31回日本臨床薬理学会年会. 2010. 12. 03, 京都
- 110) 笠岡 (坪山) 宜代、瀧沢あす香、桑木泰子: 諸外国における栄養士養成のための臨地・校外実習の現状に関する研究. 第57回日本栄養改善学会. 2010. 09. 11, 坂戸
- 111) 西信雄、三好美紀、角倉知子、野末みほ、猿倉薫子、中出麻紀子: 国民健康・栄養調査データからみた都道府県別の生活習慣の地域格差に関する検討. 第69回日本公衆衛生学会総会. 2010. 10. 29, 東京
- 112) 西信雄、野末みほ、猿倉薫子、中出麻紀子、荒井裕介、由田克士、吉池信男: 市町村の人口規模別にみた国民健康・栄養調査の身体状況調査結果. 第21回日本疫学会学術総会. 2011. 01. 22, 札幌

2. 公的資金による研究

【厚生労働科学研究費補助金】

a. 研究代表者

- 1) 徳留信寛：日本人の食事摂取基準の改定と活用に資する総合的研究。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 2) 宮地元彦：健康づくりのための運動基準・運動指針改定ならびに普及・啓発に関する研究。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 3) 田中茂穂：エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 4) 門脇 孝：保健指導への活用を前提としたメタボリックシンドロームの診断・管理のエビデンス創出のための横断・縦断研究。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 5) 竹林純：抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安全性・有効性に関する研究。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 6) 石見佳子：検査機関の信頼性確保に関する研究。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進事業。
- 7) 梅垣敬三：健康食品の情報提供システム体制の構築と安全性確保に関する研究。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 8) 渡邊 昌：特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。

b. 研究分担者

- 1) 徳留信寛：本邦におけるHTLV-1感染及び関連疾患の実態調査と総合対策（研究代表者 山ロー成）。厚生労働省厚生科学研究費。新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業。
- 2) 坪田(宇津木)恵：日本人の食事摂取基準の改定と活用に資する総合的研究（研究代表者 徳留信寛）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 3) 坪田(宇津木)恵：抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安心性・有効性に関する研究（研究代表者 竹林 純）。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 4) 森田明美：日本人の食事摂取基準の改定と活用に資する総合的研究（研究代表者 徳留信寛）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 5) 森田明美：特定保険指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保険指導効果の検証及

- び評価手法の開発に関する研究（研究代表者 渡邊 昌）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 6) 森田明美：行動変容理論に基づく効率的かつ効果的な特定保険指導手法の疫学的エビデンスとITを援用した開発（研究代表者 梶尾 裕）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 7) 田畑 泉：健康づくりのための運動基準・運動指針改定並びに普及・啓発に関する研究（研究代表者 宮地元彦）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 8) 宮地元彦：特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究（研究代表者 渡邊 昌）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 9) 高田和子：エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究（研究代表者 田中茂穂）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 10) 田畑 泉：エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究（研究代表者 田中茂穂）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 11) 高田和子：高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究（研究代表者 葛谷雅文）。厚生労働省厚生科学研究費。長寿科学総合研究事業。
- 12) 高田和子：チームによる効果的な栄養ケア・マネジメントの標準化をめざした総合的研究～大学一施設連携による研究基盤・人材育成システムの構築の試み～（研究代表者 吉池信男）。厚生労働省厚生科学研究費。長寿科学総合研究事業。
- 13) 宮地元彦：健康日本21の中間評価、糖尿病等の「今後の生活習慣病対策の推進について（中間とりまとめ）」を踏まえた今後の生活習慣病対策のためのエビデンス構築に関する研究（研究代表者 緒方裕光）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 14) 宮地元彦：生活習慣病予防のための運動を阻害する要因とその原因別の対策に関する研究（研究代表者 竹下克志）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 15) 宮地元彦：生活習慣病予防活動・疾病管理による健康指標に及ぼす効果と医療費適正化効果に関する研究（研究代表者 津下一代）。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 16) 田畑 泉：筋ジストロフィーの集学的治療と均てん化に関する研究（研究代表者 神野 進）。厚生労働省厚生科学研究費。精神・神経疾患研

究委託事業。

- 17) 門脇 孝: 多目的コホートにおける糖尿病・メタボリックシンドロームの発症要因と実態分析に関する研究 (研究代表者 野田光彦)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 18) 門脇 孝: 糖尿病予防のために戦略研究 (研究代表者 財団法人国際協力医学研究振興財団)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 19) 門脇 孝: 2型糖尿病患者のQOL、血管合併症及び長期予後改善のための前向き研究 (研究代表者 山田信博)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 20) 饗場直美: 特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究 (研究代表者 渡邊 昌)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 21) 山田晃一: 特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究 (研究代表者 渡邊 昌)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 22) 松本輝樹: 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安心性・有効性に関する研究 (研究代表者 竹林 純)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 23) 永田純一: 検査機関の信頼性確保に関する研究 (研究代表者 石見佳子)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 24) 卓 興鋼: 抗酸化物質を含有するいわゆる健康食品の安心性・有効性に関する研究 (研究代表者 竹林 純)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 25) 梅垣敬三: 検査機関の信頼性確保に関する研究 (研究代表者 石見佳子)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 26) 水野正一: 特定保健指導対象者以外も含めた生活習慣病予備軍に対する保健指導効果の検証及び評価手法の開発に関する研究 (研究代表者 渡邊 昌)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 27) 水野正一: 創薬化を目指したglypican-3由来がんペプチドワクチン療法のエビデンス創出のための臨床試験 (研究代表者 中面哲也)。厚生労働省厚生科学研究費。医療技術実用化総合研究事業 (臨床研究推進研究事業)。
- 28) 西 信雄: 健康増進施策推進・評価のための健康・栄養モニタリングシステムの構築 (研究代表者 吉池信男)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。
- 29) 西 信雄: 2010年国民健康栄養調査対象者の追跡開始(NIPPON DATA 2010)とNIPPONDATA80/90の

追跡継続に関する研究 (研究代表者 三浦克之)。厚生労働省厚生科学研究費。循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業。

- 30) 笠岡(坪山)宜代: 国際食品規格の策定プロセスに関する研究 (研究代表者 里村一成)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 31) 三好美紀: 我が国の国際保健人材の栄養分野の研究能力強化とベトナムにおける栄養士教育制度に関する研究 (研究代表者 明石秀親)。厚生労働省厚生科学研究費。国際医療研究開発事業。
- 32) 阿部重一: 健康食品に情報提供システム体制の構築と安全性確保に関する研究 (研究代表者 梅垣敬三)。厚生労働省厚生科学研究費。食品の安心・安全確保推進研究事業。
- 33) 渡邊 昌: 肥満関連疾患のアジアと米国における遺伝疫学的検討とその対策に関する研究 (研究代表者 川上正舒)。厚生労働省厚生科学研究費。地球規模保健課題推進研究事業 (国際医学協力研究事業)。

【文部科学研究費補助金】

a. 研究代表者

- 1) 徳留信寛: 全国栄養士の食生活と生活習慣病の罹患・死亡リスクとの関連に関するコホート研究。文部科学省科学研究費。基盤研究 (B)。
- 2) 徳留信寛: イラン・パポール市における消化管がんの宿主・環境要因の研究。文部科学省科学研究費。基盤研究 (B) 海外学術研究。
- 3) 坪田 恵: 地域在宅高齢者の栄養・食事摂取や食事パターンが高次生活機能低下に及ぼす影響。文部科学省科学研究費。若手研究 (B)。
- 4) 東泉裕子: 男性骨粗鬆症に対する大豆イソフラボン代謝産物の作用とその作用機序の解明。文部科学省科学研究費。若手研究 (B)。
- 5) 中出麻紀子: 親による子どもの頃の家庭での食育が若年成人の朝食欠食に及ぼす効果。文部科学省科学研究費。若手研究 (B)。
- 6) 山元健太: 交感神経系を介した柔軟性体力と動脈硬化の関連機序。文部科学省科学研究費。若手研究 (B)。
- 7) 村上晴香: 自発的身体活動・運動行動誘発におけるグレリン遺伝子多型の関連。文部科学省科学研究費。若手研究 (B)。
- 8) 田中茂穂: エネルギー消費量の変動要因に関する基礎的研究。文部科学省科学研究費。基盤研究 (A)。
- 9) 宮地元彦: 習慣的身体活動はホモシステイン分解酵素遺伝子変異に伴う動脈硬化を予防するか? 文部科学省科学研究費。基盤研究 (B)。
- 10) 大坂寿雅: 終板器官周囲のプロスタグランジンE2発熱機構を制御する神経伝達物質。文部科学省科学研究費。基盤研究 (C)。
- 11) 大河原一憲: 日常生活下における肥満抑制因子

- としての非運動性身体活動と24時間脂質酸化能の役割. 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
- 12) 田中憲子: 体幹部骨格筋量の増大がメタボリック症候群の改善および介護予防に及ぼす影響. 文部科学省科学研究費. 特別研究員奨励費
 - 13) 河合智子: インスリン受容体基質が β 細胞増殖に果たす役割の解明. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
 - 14) 井上真理子: ピオグリタゾンの抗動脈硬化作用のin vivoにおける分子メカニズムの解明. 文部科学省科学研究費. 若手研究 (B)
 - 15) 門脇 孝: 疾患のケミカルバイオロジー教育研究拠点. 文部科学省科学研究費. グローバルCOEプログラム
 - 16) 門脇 孝: 代謝制御機構の統合的理解とその破綻. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (S)
 - 17) 門脇 孝: メタボリックシンドローム・糖尿病の鍵分子アディポネクチン受容体 AdipoR/AMPK/ACC タンパク群の構造解析とそれに基づく機能解明及び治療法開発. 文部科学省科学研究費. ターゲットタンパク研究
 - 18) 門脇 孝: システム疾患生命科学による先端医療技術開発の拠点. 文部科学省科学研究費. 科学技術振興調整費
 - 19) 門脇 孝: メタボリック・シンドローム関連疾患における個別化医療の実現. 文部科学省科学研究費. 科学技術振興調整費
 - 20) 窪田哲也: 肝臓におけるIRS-1、IRS-2の生理的・病態生理的役割の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 21) 饗場直美: 学校における食育の取り組みと家庭への波及効果についての研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 22) 山崎聖美: 肥満・脂肪肝発症予防のためのPPAR組織・サブタイプ特異性に関する網羅的解析. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 23) 三浦進司: 運動によるエネルギー代謝亢進のメカニズム. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
 - 24) 永田純一: 機能性食品の組み合わせ摂取による有効性と安全性に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- b. 研究分担者
- 1) 中出麻紀子: 学校における食育の取り組みと家庭への波及効果についての研究 (研究代表者 饗場直美). 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
 - 2) 宮地元彦: 肥満関連遺伝子多型と運動および食事介入効果の検討 (研究代表者 真田樹義). 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
 - 3) 宮地元彦: 遺伝子診断に基づく動脈硬化改善のための運動プログラムの開発 (研究代表者 家光素行). 文部科学省科学研究費. 挑戦的萌芽研究
 - 4) 村上晴香: 遺伝子診断に基づく動脈硬化改善のための運動プログラムの開発 (研究代表者 家光素行). 文部科学省科学研究費. 挑戦的萌芽研究
 - 5) 笠岡 (坪山) 宣代: 全国栄養士の食生活と生活習慣病の罹患・死亡リスクとの関連に関するコホート研究 (研究代表者 徳留信寛). 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B)
 - 6) 西 信雄: イラン・パポール市における消化管がんの宿主・環境要因の研究 (研究代表者 徳留信寛). 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (B) 海外学術研究
 - 7) 西 信雄: 労働者の健康と疾病休業におよぼすソーシャルキャピタルの意義に関する研究 (研究代表者 小田切優子). 文部科学省科学研究費. 基盤研究 (C)
- 【その他の公的研究費】
- a. 研究代表者
- 1) 江崎治, 山崎聖美: ニュートリゲノミクスを用いた高機能性新規食品の多機能性解明とその評価・管理に関する研究機能評価法の開発. 農林水産省 安信プロジェクト (安全で信頼性、機能性が高い食品・農産物供給のための評価・管理技術の開発)
 - 2) 西 信雄: パプアニューギニアの都市と農村における母子の体格と食事摂取状況の関連. 財団法人国際協力医学研究振興財団 調査研究助成金.
- b. 研究分担者
- 1) 梅垣敬三: 受容体結合測定法を応用した新食品等の健康影響評価法の開発と応用 (研究代表者 山田静雄). 内閣府食品健康影響評価技術研究
3. 民間企業等の共同研究等
- 1) 石見佳子, 森田明美, 山内淳: 閉経後女性におけるビタミンKの機能評価に関する研究3. 協和発酵バイオ株式会社. 2010
 - 2) 宮地元彦, 高田和子, 西 信雄: 医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査事業 (医療・介護周辺サービス産業創出調査事業) 再委託業務「健康増進のための住宅づくり」調査. 三井不動産株式会社. 2010
 - 3) 高田和子: エネルギーフレックスから検討した肥満発症要因としてのエネルギーバランス. 花王健康科学研究会. 2010
 - 4) 田中茂穂: エネルギー消費量及び身体活動量の評価方法に関する研究. オムロンヘルスケア株式会社. 2010
 - 5) 宮地元彦: Wii用ゲームソフト「Wii Fit Plus」の健康増進効果に関する介入研究. 任天堂株式会社. 2010
 - 6) 宮地元彦: 皮下脂肪厚及び内臓脂肪量に関する研究. 株式会社タニタ. 2010
 - 7) 田畑 泉: 運動コンテンツサービス・プログラ

- ムの開発および検証に関する指導・研究. 株式会社ティップネス. 2010
- 8) 饗場直美: 宇宙飛行士栄養状態の解析評価 (その1). (独) 宇宙航空開発研究機構. 2010
 - 9) 饗場直美: 在宅高齢者の食機能に合わせた食サービス提供のための食機能実態調査. (社) 小田原福祉会. 2010
 - 10) 饗場直美: ITを用いた特定保健指導が内臓脂肪減少及びメタボリックシンドロームに与える研究. 株式会社ヴァル研究所. 2010
 - 11) 千葉剛: 脳卒中を予防する蛋白質因子 (アミノ酸/ペプチド) の探索. 財団法人すかいらくフードサイエンス研究所 学術研究助成. 2010
 - 12) 江崎治: 食品に含まれるトランス脂肪酸に係る食品健康栄養報告書. 日本食品分析センター. 2010
 - 13) 三浦進司: 運動によるエネルギー代謝変化および抗肥満効果の分子機構解明. 武田科学振興財団医学系研究奨励金. 2010
 - 14) 山崎聖美: 大豆タンパク質 β -コングリシニンの非アルコール性脂肪肝発症予防及び治療効果と作用機序の解明. (財) 不二たん白質研究振興財団. 2010
 - 15) 石見佳子: 成長期におけるリコピンの骨代謝調節作用の立証. カゴメ総合研究所共同研究. 2010
 - 16) 永田純一: 食品機能成分・栄養成分の生体利用に関する研究. 株式会社東洋新薬. 2010
 - 17) 廣田晃一: 食と健康に関する学術文献情報の活用方法. 日本水産株式会社. 2010
 - 18) 笠岡(坪山)宜代: メタボリックシンドロームに対する実食型食事教材の有効性確認試験. 株式会社ニチレイ. 2010
 - 7) 村上晴香: 予防医学における遺伝子テーラーメイドヘルスケア. 立命館大学特殊講義II、立命館大学文理総合インスティテュート. 2010. 05. 25
 - 8) 田中茂穂: エネルギー消費量/身体活動量の評価法とエネルギーバランス. 東京農業大学・大学院 特別講義. 2011. 02. 15
 - 9) 門脇孝: 「糖代謝調節と糖尿病の成因」. M2系統講義. 2010. 05. 18, 東京大学
 - 10) 門脇孝: 「疾患とその治療 (生活習慣病)」. KAST教育講演. 2010. 06. 22, 東京
 - 11) 門脇孝: 新規2型糖尿病関連遺伝子領域の発見—メタボリックシンドローム・2型糖尿病の新規治療法・予防法の開発に向けて—. オーダーメイド医療実現化プロジェクト. 2010. 12. 07, 東京
 - 12) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの成因と病態に関する最新の知見. 産業医科大学大学院講義. 2010. 12. 09, 福岡
 - 13) 門脇孝: 生活習慣病の分子メカニズム—糖尿病を中心に. 医学系共通講義. 2010. 12. 14, 東大
 - 14) 石見佳子: 生活習慣病予防学特論. 東京農工大学大学院. 2010. 07. 02, 東京
 - 15) 石見佳子: 食品機能学. 神奈川県立保健福祉大学. 2011. 02. 11, 横須賀市
 - 16) 石見佳子: 日本人の食事摂取基準 (2010年版). 東京理科大学薬学部生涯研修「基礎実習研修プログラム」. 2011. 02. 12, 野田市
 - 17) 石見佳子: 食品機能学. 神奈川県立保健福祉大学. 2011. 02. 13, 横須賀市
 - 18) 石見佳子: 食品機能学. 神奈川県立保健福祉大学. 2011. 02. 19, 横須賀市
 - 19) 石見佳子: 健康栄養学. 早稲田大学スポーツ学術院. 2011. 08. 03, 所沢市
 - 20) 梅垣敬三: 健康食品の科学. 保健予防創薬基礎学. 中部大学. 2010. 06. 01, 春日井市
 - 21) 笠岡(坪山)宜代: 現代の食生活とその課題. 全国高等学校長協会家庭部会指導者研修. 2010. 07. 21, 東京栄養食糧専門学校、東京
 - 22) Miyoshi M: Toward nutritional improvement of children: Focus on Food-based approach. 平成22年度ネパール国別研修「学校保健」、国際協力機構. 2010. 11. 05, 埼玉
 - 23) 笠岡(坪山)宜代: 世界の食・栄養事情と日本の家庭科教育への期待. 茨城県高等学校長協会家庭部会研究協議会. 2010. 12. 03, 茨城県教育研修センター
 - 24) Miyoshi M: "Roles of dietitian in Japan" and "Nutritional assessment in the field: Dietary surveys". JICA (集団)「健康と栄養改善のための女性指導者研修」、JICA帯広国際センター. 2010. 12. 03, 帯広
 - 25) 三好美紀: 地域栄養活動論—国際的な視点から—. 青森県立保健大学. 2011. 01. 24, 青森

4. 研究所外での講義、講演等

【大学等における特別講義等】

- 1) 徳留信寛: 運動と栄養の疫学—大腸がんをモデルにして. 第10回運動疫学セミナー特別講演. 2010. 03. 05, IPC生産性国際交流センター, 神奈川県葉山町
- 2) 徳留信寛: 疫学研究について. 日本栄養改善学会実践栄養学研究集中セミナー基調講演. 2010. 06. 04, 愛知県名古屋市
- 3) 徳留信寛: 「健康・栄養研究所」における研究と業務. 九州大学医学部衛生学教室同門会講演. 2010. 06. 05, 福岡県福岡市
- 4) 徳留信寛: 病気を防ぐための良い油と摂り方. 第5回島根大学公開講座「脂質栄養と健康」. 2011. 02. 05, 島根大学医学部臨床大講堂, 島根県出雲市
- 5) 森田明美: 日本人の食事摂取基準2010年版<概要と活用>. 東京家政大学 緑窓栄養士会、平成22年度緑窓栄養士会研修会. 2010. 06. 20, 東京都板橋区
- 6) 坪田(宇津木)恵: 2010年版食事摂取基準. 藤女子大学 特別講演. 2010. 07. 28

【大学・研究所における研究セミナー等】

- 1) 高田和子: 二重標識水 (doubly labelled

- water :DLW)法による評価. 第5回実践栄養学研究集中セミナー「栄養疫学」、日本栄養改善学会. 2010.06.05, 愛知
- 2) 田中茂穂: 健康づくりのための身体活動増加に必要な基礎知識. 第4回やまぐち予防医学セミナー. 2010.11.20, 山口大学医学部(宇部)
 - 3) 高田和子: 二重標識水(doubly labelled water :DLW)法による評価. 第5回実践栄養学研究集中セミナー. 2011.01.01
 - 4) 石見佳子: 骨の健康維持における栄養と運動の併用効果. アグロ・メディカル・イニシアティブ研究会. 2010.06.18, 東京工業大学
 - 5) 石見佳子: 骨の健康と生活習慣. 慶應義塾大学薬学部公開講座B. 2010.09.26, 東京
 - 6) 石見佳子: 特定保健用食品の有効性及び安全性評価について. 日本食品免疫学会第5回宿泊セミナー. 2010.11.12, 東京
 - 7) 石見佳子: 骨粗鬆症の予防と栄養・運動. 東京女子医科大学 第7回包括的遺伝子医療研究会「予防医学への道-健康と食生活-」. 2010.12.06, 東京
 - 8) 石見佳子: わが国における機能性食品の現状と課題. 健康長寿長野研究会「安心できる食の未来へ」. 2010.12.11, 信州大学農学部
 - 9) 西信雄: 疫学研究における分析手法の動向. 新領域「社会階層と健康」若手研究者養成のための研究手法ワークショップ 2010. 2010.08.28, 草津町(群馬県)
 - 10) 三好美紀: 途上国の子どもの栄養問題と改善のために: ラオスを事例として. 国際保健コンソーシアム「国際保健研修-中級コース」、国立国際医療研究センター. 2011.01.07, 東京
- 【地方自治体、栄養士会等主催の講演会等】
- 1) 徳留信寛: がん予防最前線 食のちから. 愛知県栄養士会総会特別講演. 2010.05.29, 愛知県名古屋市
 - 2) 徳留信寛: 食習慣関連がんの予防とコントロール. 大牟田市第33回健康づくり市民大会. 2010.09.04, 福岡県大牟田市
 - 3) 徳留信寛: 健康、健康増進とがん予防とコントロール. 鹿児島県保健所長会特別講演. 2010.11.05, 鹿児島市
 - 4) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)について ~主な改定点と活用法~. 豊島区池袋保健所 栄養技術講習会. 2010.04.12, 東京都豊島区
 - 5) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の活用. 千代田区千代田保健所 平成21年度栄養管理講習会. 2010.04.23, 東京都千代田区
 - 6) 坪田(宇津木)恵: 2010年版食事摂取基準 保育園での実施にあたって. 三鷹市立保育園栄養士研修会. 2010.05.12
 - 7) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の概要と活用について. 愛知県豊田市保健所 豊田市保健所管内栄養士連絡会研修会. 2010.05.12, 愛知県豊田市
 - 8) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(活用編). 社団法人北海道栄養士会 平成22年度春期全道栄養士研修大会. 2010.05.22, 北海道札幌市
 - 9) 森田明美: 日本人の食事摂取基準2010の活用について. 社団法人香川県栄養士会 第25回通常総会および研修会. 2010.05.29, 香川県高松市
 - 10) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の概要と活用について. 社団法人愛知県精神病院協会 栄養士部会研修会. 2010.06.09, 愛知県名古屋市
 - 11) 森田明美: 食事摂取基準(2010年版)とその活用について. 安房保健所管内栄養士会 研修会. 2010.6.11, 千葉県南房総市
 - 12) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の概要と活用について. 社団法人愛知県精神病院協会 栄養士部会研修会. 2010.06.09, 愛知県名古屋市
 - 13) 森田明美: 食事摂取基準2010の活用について. 文京区文京保健所 平成22年度文京区特定給食施設栄養技術講習会. 2010.06.17, 東京都文京区
 - 14) 森田明美: 日本人の食事摂取基準2010年版 ~各論(ライフステージ・脂質について)~. 社団法人山口県栄養士会 平成22年度(社)山口県栄養士会生涯学習研修会. 2010.06.19, 山口県山口市
 - 15) 森田明美: 高齢者の健康・栄養管理について ~日本人の食事摂取基準の改定を踏まえて~. 神奈川県三崎保健福祉事務所 平成22年度第2回栄養管理講習会. 2010.06.30, 神奈川県三崎市
 - 16) 森田明美: 給食施設における日本人の食事摂取基準(2010年版)を活用した食事計画について. 横浜市教育委員会健康教育課 平成22年度栄養教諭・学校栄養職員研修. 2010.07.20, 神奈川県横浜市
 - 17) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の活用について ~給食管理における活用のポイントと食事計画~. 横浜市青葉福祉保健センター 栄養管理研修会. 2010.07.23, 神奈川県横浜市
 - 18) 森田明美: 日本人の食事摂取基準(2010年版)の基礎と活用. 宮城県気仙沼保健福祉事務所研修会. 2010.08.06, 宮城県気仙沼
 - 19) 森田明美: 給食管理を目的とした食事摂取基準の活用の基本的な考え方とそのポイントについて. 東京都北区保健所 平成22年度特定給食施設栄養技術講習会. 2010.09.22, 東京都北区
 - 20) 西信雄: 健康・栄養調査の実施について. 長野県行政栄養士研修会. 2010.09.30, 松本市(長野県)
 - 21) 猿倉薫子: 栄養調査技術研修. 平成22年度行政栄養士研修会. 2010.09.30, 長野県
 - 22) 西信雄: 健康・栄養調査の企画・運営・評価について. 島根県市町村栄養士等食育推進研修会. 2010.10.07, 松江市(島根県)

- 23) 森田明美：日本人の食事摂取基準（2010年版）について ～「食事改善」と「給食管理」を目的に食事摂取基準を活用するポイント等～．社団法人茨城県栄養士会．2010. 11. 06, 茨城県水戸市
- 24) 猿倉薫子：児童生徒の食生活における調査研究について．千葉県教育長教育振興部学校安全保健課．2010. 12. 16, 千葉県
- 25) 森田明美：平成22年度京都府食の安心・安全リスクコミュニケーション、食品のリスクを考えるサイエンスカフェ ～どう思う？食品添加物～．京都府農林水産部 食の安心・安全推進課．2011. 03. 11, 京都府宮津市
- 26) 高田和子：食事摂取基準2010. 愛知県半田保健所管内栄養士会研修会、愛知県半田保健所管内栄養士会．2010. 05. 14, 愛知
- 27) 田中茂穂：栄養アセスメント（消費エネルギー量の算定理論・演習）．日本体育協会公認スポーツ栄養士養成講習会．2010. 06. 04, 日本健康・栄養会館（東京）
- 28) 村上晴香：身体活動と生活習慣病の予防効果について．千葉県栄養士会 生涯学習研究会．2010. 06. 26
- 29) 村上晴香：「生活習慣病と運動」～メタボリックシンドロームを予防・改善する身体活動～．横浜市磯子福祉保健センター、磯子区保健活動推進員全体研修会．2010. 07. 21
- 30) 高田和子：アスリートの栄養・食事．日本体育協会公認スポーツ指導者養成講習会、日本体育協会．2010. 07. 28, 東京
- 31) 田中茂穂：自衛隊員の特性をふまえた身体活動レベルと総エネルギー消費量の推定．平成22年度陸上自衛隊栄養士研修会．2010. 09. 09, サンシャイン文化会館（豊島区）
- 32) 高田和子：食生活の保健指導．平成22年度特定健診・保健指導実践者育成研修会．2010. 09. 27, 栃木
- 33) 田中茂穂：エネルギー代謝の計算．第24回ACSMヘルスフィットネススペシャリスト教習ワークショップ．2010. 10. 27, 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）
- 34) 高田和子：エネルギー補給．日本体育協会公認スポーツ栄養士専門講習会、日本スポーツ栄養研究会．2010. 11. 20, 東京
- 35) 門脇孝：「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト」．第3回東海実地医家糖尿病研究会．2010. 04. 24, 名古屋
- 36) 門脇孝：「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト」．益田市医師会学術講演会．2010. 05. 22, 島根
- 37) 門脇孝：「コホート研究と地域の疫病予防－糖尿病を中心に」．第1回魚沼基幹病院運営財団法人設立準備委員会．2010. 08. 25, 浦佐
- 38) 饗場直美：生涯を通じた健康づくり．平成21年度社会福祉施設栄養士研修会．2010. 02. 26
- 39) 石見佳子：食事・栄養指導法・骨づくりとカルシウム．公認スポーツ栄養士養成講習会．2010. 06. 05, 東京
- 40) 梅垣敬三：専門職に求められる健康食品の知識．薬食同源研修会．岐阜県薬剤師会．2010. 04. 11, 岐阜市
- 41) 梅垣敬三：食事指導の際に必要なサプリメントに関する知識．研修会．千葉県栄養士会行政協議会．2010. 04. 28, 千葉市
- 42) 梅垣敬三：専門職に求められる健康食品の知識．薬食同源研修会．岐阜県薬剤師会．2010. 05. 30, 土岐市
- 43) 梅垣敬三：いわゆる健康食品の安全性確保について．平成22年度食品安全行政講習会．厚生労働省．2010. 06. 03, 千代田区
- 44) 梅垣敬三：健康食品の安全な利用方法．生涯学習研修会．千葉県栄養士会．2010. 06. 06, 千葉市
- 45) 梅垣敬三：サプリメントと健康被害．平成22年生涯教育講座．新潟薬科大学高度薬剤師教育研究センター．2010. 08. 21, 新潟市
- 46) 梅垣敬三：サプリメントと子どもの食事．食育指導研修会．習志野健康福祉センター．2010. 08. 27, 鎌ヶ谷市
- 47) 梅垣敬三：特別用途食品制度について．生涯学習研修会．大阪府栄養士会．2010. 08. 29, 大阪市
- 48) 梅垣敬三：サプリメントに関連した情報と国の表示制度．平成22年度サプリメントに関する研修会．静岡県薬剤師会．2010. 09. 03, 静岡市
- 49) 梅垣敬三：健康栄養情報の見分け方．平成22年度短期研修．保健医療科学院．2010. 09. 06, 和光市
- 50) 梅垣敬三：最近の健康食品の現状と問題点－具体的事例等－．健康食品の知識普及員継続研修事業．茨城県栄養士会．2010. 09. 17, 結城市
- 51) 梅垣敬三：表示、広告、マスコミ情報をどう読む？食べものに関する情報を上手に生活に活かそう！．第16回食の安全都民フォーラム．東京都福祉保健局．2010. 09. 22, 東京
- 52) 梅垣敬三：健康食品の利用について．「健康食品と上手につきあう方法」．厚生労働省・消費者庁．2010. 10. 01, 東京
- 53) 梅垣敬三：サプリメント等との上手な付き合い方について．たまがわ保健福祉交流会．世田谷区玉川総合支所健康福祉課．2010. 10. 02, 世田谷区
- 54) 梅垣敬三：健康食品の利用について．「健康食品と上手につきあう方法」．厚生労働省・消費者庁．2010. 10. 06, 大阪
- 55) 梅垣敬三：健康食品の正しい使い方．いわゆる健康食品に関する県内健康食品製造業者説明会．和歌山県環境生活部県民局．2010. 10. 07, 和歌山市
- 56) 梅垣敬三：健康食品の正しい使い方．いわゆる健康食品に関する県民参加型講習会．和歌山県環境生活部県民局．2010. 10. 08, 海南市

- 57) 梅垣敬三：健康食品の正しい使い方.. いわゆる健康食品に関する県民参加型講習会. 和歌山県環境生活部県民局.. 2010. 10. 09, 紀伊田辺市
- 58) 梅垣敬三：健康食品・サプリメントと上手につきあう.. 消費生活連続講座「食」. 目黒区消費生活センター.. 2010. 10. 12, 目黒区
- 59) 梅垣敬三：健康食品の利用について.. 「健康食品と上手につきあう方法」. 厚生労働省・消費者庁.. 2010. 10. 13, 福岡
- 60) 梅垣敬三：おくすり・サプリメントと見直そう・考えよう.. 平成22年度健康づくり月間事業. 鶴見保健福祉センター.. 2010. 10. 14, 鶴見区
- 61) 梅垣敬三：健康食品・サプリメントと上手につきあう.. 消費生活連続講座「食」. 目黒区消費生活センター.. 2010. 10. 19, 目黒区
- 62) 梅垣敬三：健康食品を上手に使うには.. 食の安全・安心区民会議. 世田谷区世田谷保健所.. 2010. 10. 20, 世田谷区
- 63) 梅垣敬三：栄養・食生活と「健康食品」.. 社団法人群馬県栄養士会.. 2010. 10. 31, 前橋市
- 64) 梅垣敬三：健康食品と上手につきあう方法.. 群馬県健康福祉部食品安全局. 2010. 11. 02, 富岡市
- 65) 梅垣敬三：健康食品の選び方使い方.. 東京都消費生活総合センター. 2010. 11. 26, 新宿区
- 66) 梅垣敬三：健康食品の選び方使い方.. 東京都消費生活総合センター. 2010. 12. 02, 立川
- 67) 笠岡(坪山)宜代, 梅垣敬三：健康食品の種類と選択. 福井県栄養士会生涯学習研修会. 2010. 12. 11, 福井県教育センター
- 68) 梅垣敬三：健康食品のウソ・ホント.. 東京都立中央図書館. 2010. 12. 19, 港区
- 69) 梅垣敬三：健康食品の利用の現状と消費者への適切な情報提供について.. 横浜市健康福祉局. 2010. 12. 20, 横浜市
- 70) 梅垣敬三：食と健康についてー健康食品のあり方ー.. 古河市食生活改善推進協議会. 2011. 01. 24, 古河市
- 71) 梅垣敬三：健康食品を上手に使うには.. 文京区消費者センター. 2011. 01. 28, 文京区
- 72) 梅垣敬三：健康食品を上手に使うには.. 食の安全・安心区民会議. 世田谷区世田谷保健所. 2011. 02. 08, 世田谷区
- 73) 梅垣敬三：健康食品の安全性について.. 東京都医師会. 2011. 02. 19, 千代田区
- 74) 梅垣敬三：健康食品を考える.. 板橋区消費者センター. 2011. 02. 21, 板橋区
- 75) 笠岡(坪山)宜代：日本人の食事摂取基準（2010年版）の活用について. 東京都西多摩保健所栄養管理講習会. 2010. 05. 26, 羽村市生涯学習センターゆとろぎ、東京
- 76) 笠岡(坪山)宜代：「日本人の食事摂取基準（2010年版）」～策定と活用実践編～. 江戸川区健康部健康サービス課給食施設従事者講習会. 2010. 06. 02, 江戸川区総合文化センター、東京

- 77) 笠岡(坪山)宜代：「日本人の食事摂取基準（2010年版）の活用法について. 東京都栄養士会栄養指導従事者教育事業. 2010. 07. 29, 東都区民事務所
- 78) 笠岡(坪山)宜代：日本人の食事摂取基準の活用法について. 多摩小平保健所在宅栄養士研修会. 2010. 11. 29, 多摩小平保健所

【研究所が主催・共催するセミナー等】

- 1) 徳留信寛：生活習慣病の予防とコントロール. 栄養情報担当者（NR）研修会. 2010. 10. 30, 福岡ファッションビル. 福岡市
- 2) 徳留信寛：健康、健康増進とがん予防とコントロール. 栄養情報担当者（NR）研修会. 2010. 11. 27. フォレスト仙台. 仙台市
- 3) 西信雄, 野末みほ, 猿倉薫子, 中出麻紀子：健康・栄養調査技術研修セミナー～調査実践編～. 平成22年度独立行政法人国立健康・栄養研究所公開セミナー. 2010. 9. 22, 東京
- 4) 西信雄, 野末みほ, 猿倉薫子, 中出麻紀子：健康・栄養調査技術研修セミナー～調査実践編～. 平成22年度独立行政法人国立健康・栄養研究所公開セミナー. 2010. 10. 18, 大阪
- 5) 西信雄, 野末みほ, 猿倉薫子, 中出麻紀子：健康・栄養調査技術研修セミナー～食事しらべ編～. 平成22年度独立行政法人国立健康・栄養研究所公開セミナー. 2010. 10. 5, 東京
- 6) 西信雄, 野末みほ, 猿倉薫子, 中出麻紀子：健康・栄養調査技術研修セミナー～食事しらべ編～. 平成22年度独立行政法人国立健康・栄養研究所公開セミナー. 2010. 10. 19, 大阪
- 7) 森田明美：NRのための健康長寿の新常識（3回シリーズ）第二回身体が変わる食事とは. 栄養情報担当者（NR）協会 セミナー. 2010. 06. 24, 東京
- 8) 森田明美：日本人の食事摂取基準（2010年版）の活用 ②総論. 食事摂取基準講演会「日本人の食事摂取基準」の活用と今後の展望」. 2010. 09. 20, すみだリバーサイドホール（墨田区）
- 9) 森田明美：食事摂取基準（2010年版）の概要と活用. 栄養情報担当者（NR）協会 平成22年度研修会. 2010. 10. 03, 大阪
- 10) 森田明美：食事摂取基準（2010年版）の概要と活用. 栄養情報担当者（NR）協会 平成22年度研修会. 2010. 10. 23, 東京
- 11) 田中茂穂：日本人の食事摂取基準（2010年版）の活用 ②エネルギー. 食事摂取基準講演会「日本人の食事摂取基準の活用と今後の展望」. 2010. 09. 20, すみだリバーサイドホール（墨田区）
- 12) 江崎治：脂質/炭水化物の代謝と最適な摂取比率. 平成22年度 栄養情報者（NR）研修会. 2010. 11. 20, 名古屋国際会議場1号館4階 レセプションホール（愛知）
- 13) 江崎治：脂質/炭水化物の代謝と最適な摂取比率.

平成22年度 栄養情報者(NR)研修会. 2010. 12. 04,
岡山コンベンションセンター2階 レセプション
ホール (岡山)

【その他の講演会等】

- 1) Tokudome S. Japan colorectal tumor prevention (J-CAPP) study: randomized controlled trial by low-dose aspirin. Aspirin in the Chemoprevention of Colorectal Cancer. 2010.10.02, Berlin, Germany
- 2) 森田明美: 2010日本人の食事摂取基準について. 社団法人日本メディカル給食協会 平成22年度第1回近畿ブロック栄養士研修会. 2010. 07. 06
- 3) 森田明美: 新しい食事摂取基準について. 社団法人日本フィットネス協会 ACSM CECセミナー 2010. 2010.10.29, 東京都渋谷区
- 4) 村上晴香: 自分の食行動を振り返ってみよう. 本庄早稲田の杜ヘルスアカデミー、NPO法人健康早稲田の杜. 2010. 07. 20
- 5) 村上晴香: 自分の食事バランスを知りましょう. 本庄早稲田の杜ヘルスアカデミー、NPO法人健康早稲田の杜. 2010. 12. 07
- 6) 田中茂穂: 「日本人の食事摂取基準 (2010年版)」における推定エネルギー必要量と身体活動. スポーツサイエンス・テクノロジー2010. 2010. 12. 17, 東京ビッグサイト
- 7) 門脇孝: 「これからの2型糖尿病治療の選択～優れた血糖降下作用と低血糖の発現抑制を併せ持つDPP-4阻害薬「エクア」～. 「エクア」記者説明会. 2010. 04. 13, 東京
- 8) 門脇孝: 「インクレチンをターゲットとした2型糖尿病治療の新しいStrategy」. ジャスピア錠発売記念講演会. 2010. 04. 20, 大分
- 9) 門脇孝: 「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト」. アクトス錠発売10周年記念講演会. 2010. 04. 22, 富山
- 10) 門脇孝: 「糖尿病・メタボリックシンドロームと残された血管リスク」. 第6回肥満リスクを考える会. 2010. 04. 24, 名古屋
- 11) 門脇孝: 「糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～」. 学術講演会「糖尿病治療の新展開」. 2010. 04. 27, 福岡
- 12) 門脇孝: 「DPP-4阻害薬を含めた日本人2型糖尿病治療の新たな治療戦略」. 武田薬品テレビ講演会. 2010. 05. 11, 東京
- 13) 門脇孝: 「糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～」. エクア発売記念講演会. 2010. 05. 14, 山口
- 14) 門脇孝: 「糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～」. エクア発売記念講演会. 2010. 05. 20, 大阪
- 15) 門脇孝: 「糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～」. エクア発売記念講演会. 2010. 05. 21, 横浜
- 16) 門脇孝: 「インスリン抵抗性改善を見据えた糖尿病治療」. 第53回日本糖尿病学会年次学術集会. 2010. 05. 27, 岡山
- 17) 門脇孝: 「合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略」. インスリンセミナー2010. 2010. 06. 02, 福岡
- 18) 門脇孝: 「2型糖尿病の新しい治療戦略—インクレチンへの期待」. 第1回明日の糖尿病治療を考える会in Kumamoto. 2010. 06. 04, 熊本
- 19) 門脇孝: 「日本人2型糖尿病における治療のパラダイムシフト」. ネシーナ新発売記念講演会—糖尿病治療の新たな幕開け. 2010. 06. 09, 東京
- 20) 門脇孝: 「大規模臨床試験がもたらした教訓をどうかすべきか」. グルコバイWEBカンファレンス. 2010. 06. 16, 東京
- 21) 門脇孝: 「合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略」. アピドラ発売1周年記念講演会. 2010. 06. 18, 高松
- 22) 門脇孝: 「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト」. ネシーナ新発売記念講演. 2010. 06. 23, 宇都宮
- 23) 門脇孝: 「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト」. 第3回CMS研究会. 2010. 07. 01, 名古屋
- 24) 門脇孝: 「インクレチンをターゲットとした2型糖尿病治療の新しいStrategy」. 第1回Incretin Forum in Tokyo. 2010. 07. 02, 東京
- 25) 門脇孝: 「2型糖尿病の統合的治療戦略」. 第22回倉敷アンジオテンシンII研究会. 2010. 07. 07, 岡山
- 26) 門脇孝: 「糖尿病の病態と治療—最新の話題」. 第1回糖尿病眼合併症研究会. 2010. 07. 08, 幕張
- 27) 門脇孝: 「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト～病態を考慮した経口糖尿病薬の使い分け～」. 秋田県ネシーナ発売記念講演会. 2010. 07. 09, 秋田
- 28) 門脇孝: 「合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略」. アピドラ発売1周年インスリン講演会. 2010. 07. 10, 東京
- 29) 門脇孝: 「合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略」. アピドラ発売1周年記念講演会 特別講演. 2010. 07. 17, 埼玉
- 30) 門脇孝: 「2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト～病態を考慮した経口糖尿病薬の使い分け～」. 横浜ネシーナ発売記念講演会. 2010. 07. 22, 横浜
- 31) 門脇孝: 糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待. 富山糖尿病学術講演会『糖尿病治療の新展開』. 2010. 07. 29, 富山
- 32) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. 静岡ネシーナ発売記念講演会. 2010. 07. 30, 静岡
- 33) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. ネシーナ発売記念講演会. 2010. 08. 07, 大阪
- 34) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシ

- フト. 第12回東神戸糖尿病懇話会. 2010.08.07, 神戸
- 35) 門脇孝: 2型糖尿病の統合的治療戦略. 第7回糖尿病関連疾患研究会. 2010.09.15, 大宮
- 36) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療戦略—インクレチン標的薬への期待. OPC-262の2型糖尿病に対する第Ⅲ相投与試験 研究会. 2010.09.19, 東京
- 37) 門脇孝: 糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬への期待～. 学術講演会: 生活習慣病への新たな治療戦略. 2010.10.02, 東京
- 38) 門脇孝: 2型糖尿病の新しい治療戦略—インクレチンの有用性—. 第6回城北糖尿病セミナー. 2010.10.14, 東京
- 39) 門脇孝: 合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略. 日立市学術講演会. 2010.10.26, 茨城
- 40) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. 糖尿病ネットワークフォーラム. 2010.11.02, 東京
- 41) 門脇孝: 合併症抑制をめざす糖尿病の治療戦略. Medtronic Diabetes Advisory Board Meeting for Devise Technology. 2010.11.03, 東京
- 42) 門脇孝: 新しい糖尿病診断基準の重要性—糖尿病の自然史を見据えた早期介入の戦略. 第9回インスリン治療フォーラム. 2010.11.04, 東京
- 43) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの病態と治療戦略. Meet The Expert Conference. 2010.11.05, 大阪
- 44) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの分子機構. 協和発酵キリン腎臓シンポジウム. 2010.11.06, 東大 鉄門記念講堂
- 45) 門脇孝: 日本人2型糖尿病における多様な病態と治療の考え方. NESIMA Symposium 2010. 2010.11.06, 東京
- 46) 門脇孝: 糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～. E-quality Meeting. 2010.11.16, 山梨
- 47) 門脇孝: 2型糖尿病の新しい治療戦略—インクレチンの有用性—. 船橋市内科医科学術講演会. 2010.11.17, 千葉
- 48) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. 小倉エリア ネシーナ発売記念講演会. 2010.11.18, 福岡
- 49) 門脇孝: 循環器疾患を考慮した糖尿病治療. 第7回城西循環器症例研究会. 2010.11.19, 東京
- 50) 門脇孝: PPAR標的薬と心血管代謝病. 第5回埼玉PPAR研究会学術講演会. 2011.01.18, 埼玉
- 51) 門脇孝: 糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～. Diabetes Clinical Lecture. 2011.01.19, 東京
- 52) 門脇孝: 2型糖尿病の統合的治療戦略. Sitagliptin Forum in GIFU2011. 2011.01.25, 岐阜
- 53) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. Expert Conference in Cardiology. 2011.01.26, 東京
- 54) 門脇孝: 2型糖尿病の病態と治療のパラダイムシフト. ネシーナ錠併用効能追加記念講演会. 2011.03.02, 徳島
- 55) 門脇孝: 糖尿病治療のパラダイムシフト～DPP-4阻害薬エクア錠への期待～. 学術講演会—エクア錠発売1周年記念—. 2011.03.03, 福島
- 56) 門脇孝: あなたもできるメタボ対策. 動脈硬化予防フォーラム. 2011.03.06, 東京
- 57) 江崎治: エネルギー代謝の性差(肥満予防を中心に). 第4回 性差医療を考える会. 2010.09.02, 山の上ホテル(東京)
- 58) 江崎治: 食品安全委員会新開発食品専門調査会(第71回). 内閣府食品安全委員会. 2011.01.11, 食品安全委員会 中会議室 (東京)
- 59) 石見佳子: 特定保健用食品の安全性評価について. 特定保健用食品講習会、日本健康・栄養食品協会. 2010.07.27, 東京 長井記念ホール
- 60) 竹林純: 上手に使おう「健康食品」. 松本法人会女性部8月例会. 2010.08.27, (長野)
- 61) 竹林純: “食事からの抗酸化物質摂取の現状”と抗酸化サプリのあり方. 食品開発展2010記念セミナー. 2010.10.13, 東京
- 62) 竹林純: 特定保健用食品申請時の分析方法について. 平成22年度 第3回『特定保健用食品講習会』. 日本健康・栄養食品協会, 2011.02.25, 東京
- 63) 竹林純: 特定保健用食品申請時の分析方法について. 平成22年度 第3回『特定保健用食品講習会』. 日本健康・栄養食品協会, 2011.03.04, 大阪
- 64) 梅垣敬三: 健康食品を考える.. 講演会・シンポジウム. 食の安全・監視市民委員会.. 2010.04.17, 千代田区
- 65) 梅垣敬三: 健康食品について.. 特定保健用食品についての学習会. とちぎ食の安全ネットワーク.. 2010.05.11, 宇都宮市
- 66) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの基礎知識.. 心臓手術後の生活を考える会. 平成22年度総会.. 2010.05.16, 藤沢市
- 67) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントの実態と対応.. 協会アーベント. 福岡労災保険指定病院協会.. 2010.06.22, 福岡市
- 68) 梅垣敬三: 健康食品の安全性と有効性.. にいがた食の安全・安心に関する講演会. 新潟県生活協同組合連合会.. 2010.07.13, 新潟市
- 69) 梅垣敬三: 健康食品の現状と課題、未来への提言.. 健康ジャーナル.. 2010.07.21, 文京区
- 70) 梅垣敬三: 食に関する知識.. 消費生活相談員養成講座. 福岡県消費者協会.. 2010.09.02, 福岡市
- 71) 梅垣敬三: 食品表示と「健康増進法」について.. 平成22年度消費生活セミナー. 札幌消費者協会.. 2010.09.03, 札幌市
- 72) 梅垣敬三: 特定保健用食品とは?. 第9回保健指導士プラスワンセミナー. 日本家族計画協会..

2010. 09. 03, 墨田区
- 73) 梅垣敬三: フィトケミカルについて.. ブラッシュアップセミナー in 東京. 日本メディカルハーブ協会.. 2010. 09. 26, 千代田区
- 74) 梅垣敬三: 食品の安全性と有効性～機能性食品を中心に～.. 第3回協議会検討会. 国産青果物需給拡大推進協議.. 2010. 10. 22, 足立区
- 75) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントに関する効果的な情報提供.. 慶應義塾大学薬学部生涯学習センター. 2010. 11. 07, 港区
- 76) 梅垣敬三: 特定保健用食品の許可取得後の情報収集に関する調査.. 財団法人 日本健康・栄養食品協会. 2010. 11. 09, 渋谷区
- 77) 梅垣敬三: サプリメントと微量栄養素.. 財団法人 東京都福祉保健財団. 2010. 11. 19, 文京区
- 78) 梅垣敬三: 健康・栄養情報や健康食品との付き合い方.. 財団法人 東京顕微鏡院. 2010. 12. 11, 新宿区
- 79) 卓興鋼: 大豆の健康効果に関するメタアナリシス. 第5回 SNIJ 学術講演会. 2011. 02. 17, 学士会館 (東京都)

5. 政府関係機関審議会、委員会等

【厚生労働省等政府関連】

- 1) 徳留信寛: 平成22年度国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員. 厚生労働省健康局. 2010.
- 2) 徳留信寛: 平成22年度薬事・食品衛生審議会臨時委員. 厚生労働省医薬食品局. 2010.
- 3) 徳留信寛: 地域保健健康増進栄養部会委員. 厚生労働省. 2010.
- 4) 徳留信寛: 薬事分科会審議会委員. 厚生労働省医薬食品局. 2010.
- 5) 徳留信寛: 厚生科学審議会委員. 厚生労働省. 2010.
- 6) 徳留信寛: 平成22年度ジフェニルアルシン酸に係わる健康影響等についての臨床検討委員会委員. 環境省総合環境政策局. 2010.
- 7) 森田明美: 平成22年度国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員. 厚生労働省健康局. 2010.
- 8) 森田明美: 食品安全委員会添加物専門調査会専門委員会. 内閣府食品安全委員会. 2010.
- 9) 西信雄: 健康日本21評価作業チーム. 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長 (2011年1月27日). 2011.
- 10) 宮地元彦: 健康日本21評価作業チーム. 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長. 2011.
- 11) 宮地元彦: すこやか生活習慣病国民運動推進業務一式にかかる企画評価委員会. 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室長. 2011.
- 12) 田中茂穂: 幼児期運動指針策定委員会委員. 文部科学省. 2010
- 13) 門脇孝: 食品の安心・安全確保推進研究事前評価委員会委員. 厚生労働省. 2010.
- 14) 門脇孝: 科学研究費委員会専門委員. 日本学術振興会. 2010.
- 15) 門脇孝: ターゲットタンパク研究プログラムプログラム連絡委員. 文部科学省. 2010.
- 16) 門脇孝: 科学技術・学術審議会専門委員. 文部科学省. 2010.
- 17) 門脇孝: 保険医療専門審査員. 厚生労働省. 2010.
- 18) 門脇孝: オーダーメイド医療実現化プロジェクト第2期推進委員会委員. 文部科学省. 2010.
- 19) 門脇孝: 内閣官房医療イノベーション推進室次長. 2011年1月～. 2011.
- 20) 江崎治: 食品に含まれるトランス脂肪酸に係る食品健康影響評価情報に関する調査 (内閣府) 検討会 座長.. 2010.
- 21) 石見佳子: 薬事・食品衛生審議会臨時委員新開発食品調査部会員. 厚生労働省 平成23年1月25日. 2010.
- 22) 梅垣敬三: 薬事・食品衛生審議会臨時委員新開発食品調査部会員. 厚生労働省 平成23年1月25日. 2010.
- 23) 梅垣敬三: 医薬品の成分本質に関するワーキンググループ構成員. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課. 平成22年9月1日. 2010.
- 24) 西信雄: 薬事・食品衛生審議会専門委員. 厚生労働大臣 (平成23年1月25日). 2011.

【地方自治体等】

- 1) 宮地元彦: 神奈川県教育委員会 3033生涯スポーツ推進委員会 委員、幹事、副委員長. 2011年4月1日. 2011.
- 2) 田中茂穂: 「子供の体力向上調査分析部会」委員. 東京都. 2010.
- 3) 門脇孝: 東京都糖尿病医療連携協議会 会長. 2010.
- 4) 梅垣敬三: 東京都食品安全情報評価委員会委員. 平成22年5月1日. 2010.

【その他】

- 1) 宮地元彦: 国民健康保険中央会 特定健診・保健指導の実施に関するワーキンググループ委員. 2010年4月1日. 2011.
- 2) 江崎治: 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所における人間を対象とする生物医学的研究倫理委員会 倫理委員会委員. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所 (平成18年4月1日～平成23年3月31日). 2010.
- 3) 石見佳子: 食品安全委員会新開発食品専門調査会専門委員. 内閣府食品安全委員会 平成19年10月1日. 2010.
- 4) 石見佳子: 食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会専門委員. 内閣府食品安全委員会 平成19年10月1日. 2010.
- 5) 石見佳子: 科学技術・学術審議会資源調査分科会専門委員. 文部科学省 平成21年2月. 2010.
- 6) 梅垣敬三: 食品安全委員会新開発食品専門調査会専門委員. 内閣府食品安全委員会. 平成21年10

- 月1日. 2010.
- 7) 梅垣敬三: 消費者委員会専門委員 (新開発食品評価第一調査会). 平成22年1月26日. 2010.
 - 8) 梅垣敬三: 特定保健用食品の表示許可制度専門調査会委員. 消費者委員会. 2010.
 - 9) 梅垣敬三: 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員. 平成22年4月1日. 2010.
 - 10) 梅垣敬三: 独立行政法人国民生活センター商品テスト分析・評価委員会委員. 平成21年4月1日. 2010.

6. 関連学術団体等への貢献

【理事等の役員】

- 1) 徳留信寛: 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所. アドバイザリー・ボード委員. 2010.
- 2) 徳留信寛: 特定非営利活動法人日本栄養改善学会. 評議員. 2010.
- 3) 徳留信寛: 健康・体力づくり事業財団評議員. 2010.
- 4) 徳留信寛: ヒューマンサイエンス振興財団評議委員. 2010.
- 5) 熊江隆: 体力・栄養・免疫学会 理事. 平成22年8月29日. 2010.
- 6) 門脇孝: 日本肥満学会 (理事). . . 2010.
- 7) 門脇孝: 日本病態栄養学会 (理事). . . 2010.
- 8) 門脇孝: 日本糖尿病合併症学会 (幹事). . . 2010.
- 9) 門脇孝: 日本内分泌学会 (理事). . . 2010.
- 10) 門脇孝: 日本糖尿病協会 (理事). . . 2010.
- 11) 門脇孝: 日本糖尿病学会 (理事長). . . 2010.
- 12) 門脇孝: 日本糖尿病・肥満動物学会 (理事長). . . 2010.
- 13) 門脇孝: 日本体質医学会 (常任理事). . . 2010.
- 14) 門脇孝: 日本適応医学会 (評議員). . . 2010.
- 15) 門脇孝: 日本臨床分子医学会 (評議員). . . 2010.
- 16) 門脇孝: 日本再生医学会 (評議員). . . 2010.
- 17) 門脇孝: 日本内科学会. . . 2010.
- 18) 門脇孝: 日本生化学会. . . 2010.
- 19) 門脇孝: 日本分子生物学会. . . 2010.
- 20) 門脇孝: American Diabetes Association American Endocrine Society. . . 2010.
- 21) 梅垣敬三: 日本栄養食糧学会理事. 2010.
- 22) 西信雄: 日本疫学会監事. 2010年1月. 2010.
- 23) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 研究運営部会部会長. (平成21年6月～現在). 2010.

【学会誌等の雑誌編集委員】

- 1) 森田明美: 臨床栄養編集委員. 医歯薬出版株式会社. 2010.
- 2) T.Utsugi M: Public Health Nutrition 雑誌編集委員. 2010.
- 3) 熊江隆: 体力・栄養・免疫学雑誌. 編集委員
- 4) 門脇孝: J. Clin. Invest., Editorial Board. 平成14年4月〜. 2010.

- 5) 門脇孝: Metabolic Syndrome and Related Disorders, Editorial Board. 平成14年4月〜. 2010.
- 6) 門脇孝: The Journal of Endocrine Genetics, Editorial Board. 平成15年1月〜. 2010.
- 7) 門脇孝: Diabetes, Obesity and Metabolism, Editorial Board. 平成16年1月〜. 2010.
- 8) 門脇孝: Current Diabetes Reviews, Editorial Board. 平成16年6月〜. 2010.
- 9) 門脇孝: Diabetes Care, Editorial Board. 平成19年1月〜. 2010.
- 10) 門脇孝: The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism, Editorial Board. 平成19年10月〜. 2010.
- 11) 門脇孝: Best Practice & Research Clinical Endocrinology & Metabolism, Editorial Board. 平成19年10月〜. 2010.
- 12) 門脇孝: Journal of Diabetes, Editorial Board. 平成21年1月〜. 2010.
- 13) 門脇孝: Journal of Diabetes Investigation, Executive Editor. 平成22年1月〜. 2010.
- 14) 門脇孝: Diabetology International, Editorial Board Member. 平成22年3月4日〜. 2010.
- 15) 石見佳子: Editrial Board: J. Bone Miner. Metab.. . 2010.
- 16) 西信雄: 日本疫学会Journal of Epidemiology編集委員. 2007年1月. 2010.
- 17) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会雑誌 論文委員. (平成22年～現在). 2010.

【その他】

- 1) 森田明美: 科学研究課題及び学術研究助成対象者の選考審査における専門委員. 財団法人すかいらーくフードサイエンス研究所. 2010.
- 2) 石見佳子: 日本栄養・食糧学会関東支部常任幹事. . . 2010.
- 3) 石見佳子: (社) 農林水産先端技術産業振興センター 食品産業技術ロードマップ策定専門部会委員 (2010年10月～2011年3月)
- 4) 西信雄: 社団法人日本循環器管理研究協議会主催第23回日本循環器病予防セミナーチューター (2010年8月2日から8月5日). . . 2010.
- 5) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 研究教育協議会 副協議会長. (平成22年～現在). 2010.
- 6) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 国際交流委員. (平成22年～現在). 2010.
- 7) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 栄養士制度検討会臨地実習500時間カリキュラムワーキング委員. (平成22年～現在). 2010.

7. 併任、非常勤講師等

【厚生労働省等との併任】

該当無し

【大学の客員教授・非常勤講師等】

- 1) 徳留信寛：名古屋市立大学大学院医学研究科連携大学院教授（健康栄養政策学）
- 2) 坪田恵：日本ウェルネス歯科専門学校. 非常勤講師. 2010
- 3) 河嶋伸久：日本ウェルネス歯科専門学校. 非常勤講師. 2010
- 4) 野末みほ：女子栄養大学, 非常勤講師. 2010.
- 5) 熊江隆：東京農業大学 客員教授. 2010.
- 6) 熊江隆：関東学院大学人間環境学部 非常勤講師. 2010.
- 7) 宮地元彦：早稲田大学生命医療工学研究所 招聘研究員. 2010.
- 8) 宮地元彦：静岡県立大学 食品栄養学部 運動生理学 非常勤講師. 2010.
- 9) 宮地元彦：鹿屋体育大学 体育学部 客員教授. 2010.
- 10) 田中茂穂：早稲田大学スポーツ科学学術院 客員教授・グローバルCOEプログラム事業推進担当者. 2010.
- 11) 田中茂穂：お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 客員准教授. 2010.
- 12) 田中茂穂：お茶の水女子大学文教育学部 非常勤講師. 2010.
- 13) 田中茂穂：首都大学東京 非常勤講師. 2010.
- 14) 石見佳子：東京農工大学客員教授. 2010.
- 15) 石見佳子：早稲田大学客員教授. 2010.
- 16) 山内淳：日本女子大学非常勤講師. 2010.
- 17) 梅垣敬三：京都女子大学非常勤講師. 2010.
- 18) 梅垣敬三：慶応大学薬学部非常勤講師. 2010.
- 19) 梅垣敬三：十文字学園女子大学非常勤講師. 2010.
- 20) 西信雄：国立大学法人愛媛大学 統計学 非常勤講師. (平成22年9月24日～平成23年2月28日)
- 21) 笠岡（坪山）宜代：人間総合科学大学大学院 分子栄養学特講 非常勤講師（平成22年4月1日～平成23年3月31日）
- 22) 三好美紀：聖母大学、非常勤講師. 2010. 4. 1-2010. 9. 30
- 23) 三好美紀：県立広島大学大学院. 非常勤講師. 2010. 4. 1-2010. 9. 30

【その他】

- 1) 熊江隆：財団法人 日本産業廃棄物処理振興センター 産業廃棄物に関する講習会の講師. 平成22年4月1日. 2010.
- 2) 門脇孝：独立行政法人 国立国際医療研究センター理事. . 2010.

8. 国際貢献

【海外への派遣による科学・技術協力】

- 1) 西信雄，笠岡（坪山）宜代：WHO 西太平洋事務局（WPRO）における国際協力体制構築に関するミーティング. 2011.

【海外からの研究者の受け入れ・指導】

- 1) 門脇孝，窪田哲也：中国の長春における糖尿病

患者の罹患率、及びKCNQ1遺伝子多型とQT延長について、若手外国人研究者招へい事業. 2010 .

- 2) 西信雄：日本人集団における血清フェリチンとインスリン抵抗性の関連. 若手外国人研究者招へい事業. 2010 .
- 3) 宮地元彦，田中茂穂，野末みほ，三好美紀：JICAエチオピア「母子保健栄養改善事業」カウンターパート研修受入. 女子栄養大学. 2011.

【国際会議への対応】

- 1) 門脇孝：AMPK: CENTRAL REGULATORY SYSTEM IN METABOLISM & GROWTH . Organizer of 2010 FASEB Research Conference. 2010.
- 2) 石見佳子：栄養・特殊用途食品部会及び物理的作業部会に出席. FAO/WHO合同食品規格委員会（コーデックス委員会）. 2010.
- 3) Nishi N: Pacific Food Summit. WHO. 2010, Port Vila, Vanuatu.
- 4) 清水誠，山本茂，徳留信寛，吉池信男，西信雄，笠岡（坪山）宜代，三好美紀，他：IUNS 栄養学のリーダーシップ育成国際ワークショップ 開催. 2010.
- 5) Nishi N: Nutrition, Diet & Lifestyle: Scaling Up Action in the Pacific. WHO. 2010, Guam.

【その他】

- 1) 西信雄，笠岡（坪山）宜代：WHO GEMS / Foodプログラム GEMS/Food Collaborating Institutions としてWHOより認定. 2011.

9. 知的財産権等

該当無し

IV 資 料

1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標

独立行政法人通則法(平成 11 年法律第 103 号)第 29 条第 1 項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所が達成すべき業務運営に関する目標(以下「中期目標」という。)を次のとおり定める。

平成 18 年 3 月 1 日

厚生労働大臣 川崎二郎

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関であることから、国民の健康・栄養状態及び QOL(生活の質)の向上に直接あるいは間接的に寄与することのできる調査及び研究を効率的に行い、国民の健康と福祉のために貢献することが重要である。

そのため、特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たすことを求める。

また、厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担うことを期待する。

第 1 中期目標の期間

独立行政法人通則法(以下「通則法」という。)第 29 条第 2 項第 1 号の中期目標の期間は、平成 18 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日までの 5 年間とする。

第 2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 3 号の国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項は、次のとおりとする。

1. 研究に関する事項

(1) 重点調査研究に関する事項

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省における健康づくり施策に必要な不可欠な科学的知見を蓄積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行うこと。

- ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究
- ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価

及び健康影響評価に関する調査研究

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項

- ア 科学技術基本計画(仮称)に沿って、研究機関として独自性の高い基礎的・応用的研究を行うこと。
- イ 研究の成果をより広く社会に還元するために、食育推進基本計画(仮称)に資する調査研究を推進し、専門家(管理栄養士等)への情報提供を行うこと。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項

- ア 健康・栄養に関する施策、ガイドライン等の科学的根拠につながる質の高い研究を行い、研究成果を論文等を通じて社会に発信・還元を行うこと。
- イ 調査・研究の成果を社会に還元するために、知的財産権の取得・開示を行うこと。
- ウ 健康・栄養関連の専門家を対象としたセミナー、一般向けの講演会等を開催すること。
- エ 研究所の一般公開を実施するとともに、中学校・高等学校等からの見学にも積極的に応じること。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項

- ア 独立行政法人という組織形態の利点を最大限活かした研究資金等の運用及び人的資源の配置により、研究・業務の効率化を図ること。
- イ 国内外の産業界を含む健康・栄養・食品関係の機関との共同研究の拡充等を目的として、研究所研究員の派遣及び他機関等の研究員の受入れをより積極的に行うこと。
- ウ 大学及び民間企業等との連携・協力により、研究者の交流を進め、人材の養成と資質の向上を図ること。
- エ 調査及び研究の円滑な実施が図られるよう、適切な措置を講ずるとともに、他機関との共同研究及び受託研究において、双方の研究施設及び研究設備の稼働状況に応じた共同利用を図ること。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項

- ア 国民健康・栄養調査の実施に関する事務のうち、集計事務については、「健康日本 21」、都道府県健康増進計画等の政策ニーズに適時対応して、迅速かつ効率的に集計を行うこと。

また、外部委託のより積極的な活用、高度集計・解析システムの活用等により効率化を図る。

イ 厚生労働省が収去した特別用途表示及び栄養表示がなされた食品の試験業務を的確に実施する。また、特定保健用食品の関与成分等、新たな食品成分の分析技術及びそれらの分析に用いる食品成分の標準品等を規格化すること。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項

ア 関連機関等と定期的な情報交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握すること。

イ ホームページ等を通じて国民からのニーズを把握すること。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項

ア 国際栄養協力体制を充実強化し、特にアジア地域における国際貢献と学術的ネットワークの構築を行うことにより、国際社会における役割を果たすこと。

イ 産学連携推進機能の強化、寄附研究部門の充実等により、産学連携をより一層進め、研究成果の社会への還元と知的財産の獲得を目指すこと。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項

栄養情報担当者(以下「NR」という。)が社会的役割を果たすことができるよう、研修や情報提供等を通じてその質的向上を図るとともに、実際の業務内容のモニタリング等を行い、制度や研究所の関与のあり方について検討すること。

3. 情報発信の推進に関する事項

- (1) 研究所として総合的な情報発信を行うための体制を強化し、対外的な業務の推進を図ること。
- (2) 研究所の活動状況に関する情報をホームページを介して広く公開すること。
- (3) 研究所の諸活動及び研究業績については、研究所報告やニュースレターの刊行及び電子メディアでの配信により公開すること。
- (4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示は、ホームページ等を活用し積極的に行うこと。

第 3 業務運営の改善及び効率化に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 2 号の業務運営の効率化に関する事項は次のとおりとする。

1. 運営体制の改善に関する事項

- (1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡を密にし、執行体制を強化すること。
- (2) 研究企画及び評価に関わる機能及び体制の強化を図り、研究業務の包括的、計画的な実施を進めること。
- (3) 業務の確実な実施のため、各研究・業務に関する内部進行管理及び評価を行うこと。
- (4) 法人運営に関して透明性を確保するとともに、国民に向けての説明責任を全うするため、広報体制を強化し、迅速な情報公開に努めること。
- (5) 外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費節減や現況資源の有効利用を進めること。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項

- (1) 業務効率化の観点から、研究部組織体制の見直しを行い、その最適化を図ること。
- (2) 他機関との連携・交流を強化し、組織の活性化を目指すこと。

3. 職員の人事の適正化に関する事項

- (1) 重点的に行う研究及び法律に基づく業務に対して適切に職員を配置し、効率的に研究業務を行うこと。
- (2) 研究職員の個人評価の結果を昇級・昇任等、給与面に反映させること。
- (3) 研究職員の流動化計画に沿って原則公募制・任期制により採用を行い、研究者層の向上を図ること。
- (4) 事務職員についても適切に評価を行い、資質の向上と業務の効率化を図ること。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項

- (1) 業務の効率化を図るため、事務書類の簡素化、電子化、事務作業の迅速化を進めるとともに、定型的な業務でアウトソーシング可能なものについては外部委託を行うこと。
- (2) 事務職員については、研修会やマネジメントセミナー等を通じ、研究所経営への参加意識を高めるとともに、業務意識の高揚を図ること。
- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図ること。

5. 評価の充実にに関する事項

- (1) 毎年度内部評価委員会において、主要な研究業務に関して内部評価を実施すること。
- (2) 第三者による外部評価委員会により、年度計画の事前及び事後評価を行うこと。
- (3) 評価に関する結果は、ホームページで公開すること。
- (4) 研究職員について自己点検・評価を行うとともに、できるだけ客観的な指標に基づく評価を毎年実施すること。

6. 業務運営全体での効率化

一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費は除く。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成 17 年度を基準として 10%以上の削減を達成すること。

人件費については、「行政改革の重要方針」(平成 17 年 12 月 24 日閣議決定)を踏まえ、平成 18 年度以降の 5 年間に於いて、国家公務員に準じた人件費削減の取組を行うこと。

併せて、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、給与体系の見直しを進めること。

業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成 17 年度を基準として 5%以上の削減を達成すること。

第 4 財務内容の改善に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 4 号の財務内容の改善に関する事項は、次のとおりとする。

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金の積極的獲得を図ること。
- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用及び研究成果の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の増加を図ること。

2. 経費の抑制に関する事項

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費も含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図ること。
- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の節減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費の削減を図ること。

第5 その他の業務運営に関する重要事項

通則法第29条第2項第5号のその他の業務運営に関する重要事項は、次のとおりとする。

(1) セキュリティの確保

情報セキュリティの強化と利用者への情報提供等の利便性の向上を図ること。

2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画

独立行政法人通則法(平成 11 年法律第 103 号)第 29 条第 1 項の規定に基づき、平成 18 年 3 月 1 日付けをもって厚生労働大臣から指示のあった独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標を達成するため、同法第 30 条の規定に基づき、次のとおり、独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画を作成する。

平成 18 年 4 月 1 日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 渡邊 昌

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の健康・栄養状態及び QOL(生活の質)の向上への貢献という目的を踏まえ、短期的・中期的・長期的な視点から重点的に行う研究課題を選択するとともに、研究所の社会的役割を踏まえつつ、独自性の高い研究や将来に向けて発展が期待される萌芽的・創造的な研究の推進に努める。

第 1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 重点調査研究に関する事項を達成するための措置

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省における健康づくり施策に必要不可欠な科学的知見を蓄積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行う。

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

運動・身体活動による生活習慣病の一次予防、食事と遺伝的因子の相互作用の解明並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた実験を行う。特に糖尿病及びメタボリックシンドロームの一次予防に資する調査及び研究に特化・重点化する。

a 運動・身体活動による生活習慣病予防、運動と食事指導の併用を行った場合の効果等について、実験的、疫学的な調査及び研究を行う。これにより食事摂取基準、運動基準等を作成するための科学的根拠の提示を行う。

b 遺伝子改変動物を用いて、運動や食事指導によってメタボリックシンドローム及び生活習慣病がいかにより予防されるのかを、遺伝子解析等による分子レベルでの機序解明を試み、運動と食事指導による生活習慣病のテーラーメイド予防法の開発に資する科学的根拠を提示する。

c ヒトを対象として、基礎代謝量と遺伝素因の相互作用や遺伝子多型と各栄養素摂取量、身体活動量等との関係を明らかにし、生活習慣病発症の遺伝、環境リスクの相互関係を解明する。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究

日本人の食生活の多様性を科学的に評価するための指標及び調査手法を開発し、それが健康に及ぼす影響について疫学的な調査及び研究を行う。特に日本人の食事摂取基準等の科学的根拠となるデータの蓄積と「健康日本 21」の評価への応用という点を重点目標とする。

a 栄養に関する実践において最も基本的かつ重要な指針である「食事摂取基準」について、平成 20 年度に予定される改定作業に向け、系統的レビューを平成 19 年度まで重点的に行う。また、今後の改定に向けて、ヒトを対象とした疫学的研究及び基本的情報の収集等を継続的に行う。

b 「健康日本 21」推進のためには、効果的な運動・食事指導プログラムの開発と普及や、国及び地方自治体での適切な指導効果の評価の実施等が重要であることから、これらの手法の開発、国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に資する検討を行う。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

「健康食品」に含まれる食品成分の有効性及び健康影響に関して、実社会における使用実態等を把握するとともに、ヒトに対する影響を評価する手法を開発する。その結果を幅広く公開し、「健康食品」に関わるリスクコミュニケーションに資するデータベースの更新及び充実を継続して行う。

a 保健機能食品等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、栄養表示及び健康表示の側面から、健康影響について調査検討する。

また、栄養素以外の食品成分から広く健康影響を持つ食品素材をスクリーニングして、そのヒトにおける有効性評価について細胞モデル及び動物モデルを用いて検討する。

b 「健康食品」に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止並びに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、幅広く公開する。

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 研究所の研究能力を向上させ、将来、その応用・発展的な展開を可能とするために、関連研究領域における基礎的・独創的・萌芽的研究を行う。

イ コホートを設定し、介入研究による栄養教育の成果を研究する。食育及び栄養ケアマネジメントに関

して、行政、他機関と協力してエビデンス作りを図る。また、管理栄養士等保健従事者の教育及び情報の提供方法を研究する。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

調査及び研究の成果の普及を図るため、学術誌への学術論文の投稿、シンポジウム、学会等での口頭発表を行う。

これらについては、中期目標期間内に、学術論文の掲載を 250 報以上、口頭発表を 750 回以上行う。

なお、口頭発表は、海外においても積極的にを行う。

イ 知的財産権の活用

調査及び研究の成果については、それらが知的財産につながるかどうかのスクリーニングを行い、中期目標期間内に 20 件以上の特許出願を行う。

取得した特許権の実施を図るため、特許権情報のデータベースをホームページ上に公開する。

また、非公務員化の利点を活用し、研究所が所有する知的財産の活用、又は所有する情報等を用いた共同研究を民間企業及び大学等と積極的に行うこととし、毎年 2 件以上の増加を目標とする。

ウ 講演会等の開催

健康・栄養関連の専門家向けのセミナー、幅広い人々を対象とした講演会等をそれぞれ年 1 回以上開催し、調査及び研究の成果を社会に還元する。

また、関係団体が実施する教育・研修プログラムへの職員の派遣を積極的に推進する。

一般及び専門家からの電話、メール等による相談を受けるとともに、それらの相談に適切に対応する。

エ 開かれた研究所への対応

幅広い人々に研究所の業務について理解を深めてもらうことを目的に、年 1 回オープンハウスとして研究所を公開する。

また、健康と栄養に興味を抱かせ、将来、栄養学研究を担う人材の育成に資するよう、「総合的な学習の時間」による中学・高校生等の見学を積極的に受け入れる。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

ア 研究・業務の効率的な実施という観点から、研究員、研究補助員の配置を戦略的に行う。

研究所として重点的に実施すべき調査及び研究並びに法律に基づく業務については、研究業務費を適切に配分し、確実な業務の執行に努める。

イ 民間企業、大学、他の研究機関等との間で従前から実施している共同研究に加え、新たな共同研究等を積極的に推進するため、民間企業、大学等へ研究所研究員を派遣するとともに、資質の高い研究員を受け入れる。

ウ 連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員を年間 20 名程度受け入れ、研究所が所有する情報・技術等を提供するとともに、研究員を広く大学院や関係機関等に年間 5 名程度派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

また、国内外の若手研究員等の育成に貢献するため、博士課程修了者、大学院生、他機関に属する研究員等を継続的に受け入れるための体制の充実を図る。また、連携大学を増やし、兼任教授の派遣を行うとともに、若手研究員の指導・育成を行うため、求めに応じ、研究所研究員を他機関へ派遣する。

エ 施設・設備について、自らが有効に活用するとともに、「独立行政法人国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に基づき、大学、他研究機関による共同研究等での外部研究者等の利用に供する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

ア 国民健康・栄養調査の集計事務については、政策ニーズに対応した迅速かつ効率的な集計を行う。具体的には、当該年度の集計事務を調査票のすべてを受理してから 7 ヶ月を目途(ただし、調査項目に大幅な変更が生じない場合に限る。)に行う。

また、外部委託、高度集計・解析システムの活用等により、効率的な集計を行うことにより、経費の削減を図る。

さらに、都道府県等が行う健康・栄養調査に対する支援を含めて関連する技術的な事項について、研究所がより積極的に対応する。

特に、平成 22 年度に行われる都道府県等健康増進計画の最終評価に向けて、調査結果の活用、評価手法等について、平成 20 年度までに重点的に技術支援を行う。

イ 厚生労働省が収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。

特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術が確立している食品成分の試験業務は、検体の受理から試験の回答までを 2 ヶ月以内に行うことを目指す。

また、分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分への技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

ア 健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等から直接的に研究所に対する要望等を伺う機会を年 6 回程度設け、社会的ニーズを把握する。さらに、業務関連行政部局との間で、定期的な情報及び意見等を交換する場を設け、行政ニーズを把握する。

また、国、地方自治体、国際機関等より、専門的な立場からの技術的な協力、指導等の求めには積極的に応じて研究員を派遣し、研究所における調査及び研究の成果が適切に施策等に反映できるよう努める。

イ 研究所に対する意見、要望等をホームページやセミナー等の参加者を通じて把握し、その内容を検討

し、可能な限り業務に反映させる。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア諸国との間で、栄養調査、栄養改善及び健康づくり等に関する共同研究において中心的な役割を果たすとともに、WHO 西太平洋地域における協力センターの設置(平成 19 年度を目途)に向けての準備を行う。

また、研究者養成及び共同研究の促進を図るため、「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」により、年間 2 名程度の若手研究者に研究所での研修機会を提供するとともに、アジア地域の研究者を交えたシンポジウムの開催等を行い、アジア地域における栄養学研究基盤の強化に寄与する。

イ 民間企業、大学等の複合的な連携を強化するとともに、寄附研究部門の充実を図る。

これにより、研究所の研究成果と社会ニーズの橋渡し、新たな展開・応用を図るとともに、知的財産の獲得を積極的に行う。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項を達成するための措置

栄養情報担当者(以下「NR」という。)が、保健機能食品等の利用に関して、消費者に適切に情報を提供し、消費者が気軽に相談できる者となれるよう、研修や情報提供等を通じてその質的向上を図る。

また、中期目標期間開始より 3 年以内に、NR の実際の業務内容、社会でのあり方についてモニタリングを行う。この結果に基づき、制度のあり方や研究所の係わりについて検討を行い、中期目標期間終了までに結論を得る。

NR 事務業務について、効率的かつ的確な業務が実施できるよう見直しを行う。また、外部委託が可能な業務については、アウトソーシングを行う。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所として総合的な情報発信を行うとともに、対外的な業務の推進を図るための組織整備を行う。

(2) ホームページに研究所の活動状況を積極的に配信し、ホームページの掲載内容をより充実させる。ホームページアクセス件数は、中期目標期間中、毎年 50 万件程度を維持させる。

(3) 研究所の諸活動及び研究業績については、毎年度 1 回研究報告としてとりまとめるとともに、最新の研究成果やトピックス等を紹介したニュースレターを年 4 回刊行する。

また、これらについては、ホームページ上で公開するとともに、電子メディアでの配信も行う。

(4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示は、ホームページ等を活用し積極的に行う。

第 2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡調整を密にし、執行体制を強化する。

また、研究所運営に対する研究所職員の意識を高めるため、研究所運営に関する必要な情報の共有化を図る。

(2) 研究部門間での連携を強め、異なる研究分野からの情報や研究手法を積極的に利用して戦略的な事業の立案・実施を図る。

(3) 調査及び研究業務の効率的かつ確実な推進を図るため、所内報告会等により各業務の進捗状況を把握し、適切な評価を行い、その結果を計画的・効率的な業務の遂行に反映させる。

また、所内イントラネットを活用し、業務の進捗状況管理等の効率化を図る。

(4) 独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律(平成 13 年法律第 140 号)に則り、積極的な情報公開を行う。

(5) 研究所の経営基盤の安定化のため、外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費の節減や研究所の所有する設備等の有効利用を進める。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所が中期計画の中で重点的に行う調査及び研究並びに法律に基づく業務に関して、業務量や集散的に遂行すべき時期等を勘案しながら研究及び業務チームを組織する。

非公務員型の利点を生かして柔軟に組織の見直し・改編を行うこととし、従来の部体制から中期目標に掲げる業務を行うためのプログラム等を設け、各々が独立した形での業務運営を行う。

また、組織の見直し・改編後、毎年、その効果を検証する。

(2) 民間企業、大学等との連携・交流を積極的に行い、研究員の交流を進め、人材の養成と資質の向上に努めることにより、組織の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点的に行う研究及び法律に基づき実施すべき業務については、業務運営の効率性を勘案しながらも、必要な人員を十分に担保した上で組織体制を構築する。

(2) 非公務員型への移行のメリットを最大限に活かした柔軟な人事システムを構築し、研究職員の個人評価の結果を昇級・昇任等の処遇及び給与面に反映させる。

(3) 研究員の採用に当たっては、「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、原則として公募制、任期付の採用を行う。研究所が重点的に推進する調査及び研究業務が着

実に成果が挙げられるよう、資質の高い人材を広く求める。また、資質の高い人材については、任期中の実績評価に基づき、任期を付さない形での採用を行う。

さらに、外国人及び女性研究者が業務に従事しやすい環境づくりを推進し、外国人及び女性職員の採用も可能な限り行う。

- (4) 事務職員の質の向上を図るため、研究員と同様に評価を行うこととし、その評価システムとして自己評価による評価を行い、その結果を昇給・昇任等に反映する。

※人事に関する指標

期末の常勤職員数は、期初の100%を上限とする。

- (参考1) 期初の常勤職員数 47名
期末の常勤職員数 47名(以内)

- (参考2) 中期目標期間中の人件費総額
2,335百万円(見込)

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、休職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

- (1) 研究組織体制の見直しに併せて、業務の効率化を図るため、事務部門の組織を見直す。この際、事務部門に研究員の研究成果の積極的な活用や、対外的な業務を担う業務課(仮称)を設け、研究員が最大限の成果を得られるようにする。
また、権限の明確化及び決裁プロセスの短縮化により、意志決定の迅速化を図るとともに、事務作業の迅速化、事務書類の簡素化、電子化等を進める。さらに、定型的な業務でアウトソーシング可能なものについては外部委託を進める。
- (2) 事務職員については、研究所で働く者として必要な法令・知識を習得するための各種研修会やセミナー等への参加を充実させ、職員が働きやすく自己能力を最大限発揮できるような職場環境の整備を推進する。
これにより、研究所経営への参加意識を高め、業務の質の向上及び効率化の一層の推進を図る。
- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図る。

5. 評価の充実に関する事項を達成するための措置

- (1) 毎年度内部評価委員会を開催し、主要な研究業務に関して、内部評価を実施し、研究業務の確実な実施及び効率化に資する。
- (2) 柔軟かつ競争的で開かれた調査及び研究環境の実現や経営資源の重点的・効率的配分に資するため、外部の専門家等の評価者による外部評価を毎年度2回程度実施する。
- (3) 内部及び外部評価結果は、ホームページ上で公表するとともに、組織や施設・設備の改廃等を含めた予算・人材等の資源配分に反映させる等、調査及び研究活動の活性化・効率化に積極的に活用する。
- (4) 研究員については、自己点検・評価を行うとともに

に、可能な限り客観的な指標に基づき評価を行う。また、理事長は自ら全研究員との面談を行い、適切かつ公平な評価を行う。

さらに、評価の結果は各職員にフィードバックするとともに、所内イントラネットを活用して、各研究の研究業績を公開し、評価の透明性の確保に努める。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費を除く。)については、中期目標期間中、毎年度、2%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成17年度を基準として10%以上の削減を達成する。

人件費については、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)を踏まえ、中期目標期間の最終年度までに平成17年度を基準として5%以上の削減を達成する。

併せて、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、給与体系の見直しを行う。

業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間中、毎年度、1%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成17年度を基準として5%以上の削減を達成する。

第3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金の積極的な獲得を図り、外部研究資金、その他の競争的資金の募集等に積極的に参加し、その増加に努める。
- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用並びに研究成果の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の確保につなげる。
また、「独立行政法人国立健康・栄養研究所施設・設備等利用規程」に基づき、地域住民等への施設開放を行い、研究所の設備等の効率的な利用に努め、併せて自己収入の増加に寄与する。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費を含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図る。
- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の削減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費についても、法令集の追録購入中止等により削減を図る。

第4 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙1のとおり。

2. 収支計画

別紙 2 のとおり。

3. 資金計画

別紙 3 のとおり。

第 5 短期借入金の限度額

1. 限度額

100,000,000 円

2. 想定される理由

- ア 運営費交付金等の受入れの遅延等による資金の不足
- イ 予定外の退職者の発生に伴う退職手当の支給
- ウ その他不測の事態により生じた資金の不足

第 6 重要な資産を譲渡、又は担保に供するときは、その計画

該当なし。

第 7 剰余金の使途

- ア 研究環境の整備に係る経費
- イ 職員の資質向上に係る経費
- ウ 知的財産管理、技術移転に係る経費 等

第 8 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置

(1) セキュリティの確保

情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

(2) 施設及び設備に関する計画

該当なし。

(3) 積立金処分にに関する事項

該当なし。

(別紙 1)

中期計画（平成 18 年度～平成 22 年度）の予算

(単位：百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業収入	189
寄附金収入	160
雑収入	21
計	5,359
支出	
人件費	2,908
うち 基本給等	2,606
退職手当	302
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	458
業務経費	825
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	65
食品収去試験等業務	59
栄養疫学プログラム	88
健康増進プログラム	85
臨床栄養プログラム	39
基礎栄養プログラム	61
食品保健プログラム	49
創造的研究	95
国際栄養協力事業	49
健康食品安全情報ネットワーク事業	126
健康栄養情報事業	109
受託経費	1,167
特別用途食品表示許可試験費	60
受託経費	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
計	5,359

〔人件費の見積り〕 期間中総額 2,335 百万円を支出する。

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過

勤務手当、教職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

〔運営費交付金の算定ルール〕：別紙 1-1

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 1-1)

運営費交付金の算定ルール

1. 平成 18 年度

平成 18 年度は、平成 17 年度運営費交付金の額に各経費にかかる効率化係数に基づき算出し、非公務員化に伴う新たな経費を加え、合理化額を減額し算出した。

2. 平成 19 年度以降

次の算定式による。

$\text{運営費交付金} = \text{人件費} + \text{一般管理費} + \text{業務経費} + \text{特殊要因} - \text{自己収入}$

○ 人件費＝当該年度基本給等 (A) ＋退職手当 (S)

A：基本給、諸手当、共済組合負担金等の人件費（退職手当を除く）をいい、次の式により算出する。

$$A = \{[(P1 \times \alpha \times \beta) + (P2 \times \beta) + P3] \times \gamma 1\} + (P4 \times \gamma 2)$$

A：当該年度基本給等

P1：前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けるもの
(労働保険料を除く)

P2：前年度の基本給中給与改定の影響を受けるもの

P3：前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けないもの

P4：労働保険料

α ：運営状況等を勘案した昇給原資率

β ：運営状況等を勘案した給与改定率

$\gamma 1$ ：効率化係数（人件費（労働保険料を除く））

$\gamma 2$ ：効率化係数（労働保険料）

○ 一般管理費＝（一般管理費 (B) $\times \gamma 3 \times \delta$ ）

B：前年度一般管理費

$\gamma 3$ ：効率化係数（一般管理費）

δ ：消費者物価指数

○ 業務経費＝（業務経費 (C) $\times \gamma 4 \times \delta$ ）

C：前年度業務経費

$\gamma 4$ ：効率化係数（業務経費）

δ ：消費者物価指数

○ 特殊要因＝法令等の改正等に伴い必要となる措置又は現時点で予測不可能な事由により発生する資金需要であって、毎年度の予算編成過程において決定する。

○ 自己収入＝知的財産権収入、印税収入等の直接事業を実施しない収入について、過去の実績を勘案し決定する。

〔注記〕

1. α 、 β 、 δ については、各年度の予算編成過程において、当該年度における計数値を決める。

2. 中期計画全般にわたる予算の見積に際しては、

① 人件費のうち、退職手当については、定年退職者見込みによる。

② α 、 β 、 δ については、伸び率を 0 と仮定した。

③ $\gamma 1$ （人件費の効率化係数）については、節減額 5%分を▲1.02%と仮定した。但し、労働保険料については、節減額 5%分を平成 19 年度から 4 年で節減することから▲1.35%と仮定した。

④ $\gamma 2$ （一般管理費の効率化係数）については、節減額 10%分を▲2.1%と仮定した。

⑤ $\gamma 3$ （業務経費の効率化係数）については、節減額 5%を▲1.02%と仮定した。

⑥ 自己収入額については、平成 18 年度については平成 16 年度実績と同額とし、平成 19 年度以降は平成 17 年度の実績見込を基準とし、毎年一定額を増額させ算出した。

(別紙 2)

平成 18～22 年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	5,444
経常費用	5,444
人件費	2,908
うち 基本給等	2,606
退職手当	302
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	458
業務経費	825
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	65
食品収去試験等業務	59
栄養疫学プログラム	88
健康増進プログラム	85
臨床栄養プログラム	39
基礎栄養プログラム	61
食品保健プログラム	49
創造的研究	95
国際栄養協力事業	49
健康食品安全情報ネットワーク事業	126
健康栄養情報事業	109
受託経費	1,167
特別用途食品表示許可試験費	60
受託経費	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
減価償却費	85
収益の部	5,444
運営費交付金収益	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
雑収入	21
資産見返物品受贈額戻入	2
資産見返運営費交付金戻入	83
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

〔注記〕当法人における退職手当については、役員退職手当支給基準及び国家公務員退職手当法（昭和 28 年法律第 182 号）に準じて支給することとなるが、その全額について運営費交付金を財源とするものと想定している。

（注）単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 3)

平成 18 ～ 22 年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	5,359
業務活動による支出	5,359
投資活動による支出	0
資金収入	5,359
業務活動による収入	5,359
運営費交付金による収入	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
雑収入	21
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画

平成22年度の業務運営について、独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第31条第1項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画を次のとおり定める。

平成22年3月31日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 徳留信寛

第1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 重点調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

a 運動基準、食事摂取基準等の改定のための科学的根拠の提示

①運動基準やエクササイズガイドで示された運動・身体活動量の妥当性を検討するための大規模前向き研究を継続し、1,000名以上の被験者割付・介入を開始する。

②介護予防と動脈硬化予防を両立させる筋力トレーニングとして筋張力維持法(スロートレーニング)の効果を検討する。

③新しい「健康づくりのための運動基準」及び「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」改定のための科学的エビデンスを収集し、身体活動・運動指導を行うための研究論文データベースの一層の充実を図る。

④人間ドック受診者を対象とした大規模コホート研究を継続し、3,000名のコホート参加を目指す。食事・身体活動・食行動意識、心理的要因等と生活習慣病発症との関連性や、保健指導効果について引き続き検討する。

⑤成人及び子どもにおいて、身体活動レベルや総エネルギー消費量の変動要因(行動の種類や活動強度の分布など)を特定する。それに基づき、質問紙や歩数を用いた、1日当たりの身体活動レベル及び総エネルギー消費量の推定法を確立する。また、様々な対象特性をもつ集団(職業、運動習慣、生活地域、年齢など)において、既存の方法及び新たに開発した推定法の妥当性を検討する。

⑥子ども(特に、幼児および小学生)において、代表的な活動の強度(メッツ値)の標準値を再検討するとともに、加速度計を用いて客観的に評価する方法を確立する。

⑦体重増加の予防に有効な身体活動レベルを、二重標識水(DLW)法の結果に基づいた観察研究により検討する。また、ヒューマンカロリーメーターを用いて評価した睡眠時代謝量や基礎代謝量と、その後の体重増加との関係についても検討する。

b 生活習慣病予防のための科学的根拠の提示

①高脂肪食が、糖尿病・メタボリックシンドロームを発症する分子メカニズムを解明するために、既に作製

した遺伝子操作動物あるいは樹立した遺伝子操作動物由来膵β細胞株を用いて当該遺伝子の発現調節メカニズムや膵β細胞の増殖メカニズムを検討する。また、脂質過剰摂取生活習慣病モデル動物の血管内皮細胞のインスリンシグナルと骨格筋のインスリン抵抗性におけるさらなる分子メカニズムの解明とマクロファージのインスリン抵抗性における役割について検討する。

②マクロニュートリエント(脂質、糖質、蛋白質)の過剰摂取、過少摂取によって生じる生活習慣病の発症機序を分子レベルで解明し、その機序から疾病の予防、治療法を考案する。身体活動による肥満/糖尿病予防機序の解明、脂肪肝の原因を考慮した脂肪肝の予防法、エネルギー及び蛋白質摂取制限によって生じる生体適応及び適応破綻の機序を脳卒中発症モデルラットを用いて明らかにする。

c 生活習慣病と環境因子との関係解明

①罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析で2型糖尿病感受性領域としてマップされ、遺伝子の同定に至っていない染色体領域を解析し、新たな2型糖尿病感受性遺伝子を同定する。

②これまでに明らかにしてきた日本人の2型糖尿病感受性遺伝子について、遺伝因子と環境因子の相互作用を検討する。

③既に樹立した遺伝子操作動物を用いて、我々が同定した日本人の2型糖尿病感受性遺伝子の機能について解明する。

④人間ドック受診者を対象とした大規模コホート研究において、これまでに明らかになった肥満や糖尿病関連遺伝子の生活習慣病発症への寄与や、栄養・運動や食習慣との相互作用について明らかにする。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究

a 栄養疫学的調査研究の実施

①「日本人の食事摂取基準(2010年版)」の普及・啓発事業に積極的に参画するとともに、普及啓発のための、簡易な資料・パンフレット等を作成する。「2010年版」策定時の関係基礎資料をすべて収集・分類・整理し、データベースに追加する。今後の策定や普及・啓発事業において、当該データベースが十分活用されるよう、厚生労働省及び関係諸機関に必要十分な資料や技術の提供を行う。

②食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るための、ヒトを対象とした栄養疫学研究を実施する。

③食事に関連する栄養成分の生体指標(バイオマーカー)を確立し、健康影響について、以下の研究を行う。

・ビタミン A 結合タンパク質 (RBP4) がインスリン抵抗性の新たな生体指標として活用できるか評価する。
・低用量ビタミン K 2 の長期摂取が、閉経後女性の骨及び脂質代謝に及ぼす影響を評価する。

④地域在住高齢者及び介護施設入所者の栄養摂取状況やビタミン・ミネラル栄養状態の調査を継続する。

b 国民健康・栄養調査の実施強化とデータ利活用のあり方に関する検討

・国や地方自治体の要請や必要性に応じて、国民健康・栄養調査並びに自治体が独自に実施する健康・栄養調査の機能強化やデータ活用に関する技術支援を引き続き行う。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

a 栄養素及び非栄養素成分の機能性評価及び健康影響に関する調査研究

①食品の抗酸化力の測定を他施設と共に実施し、データベースの充実を図る。また、抗酸化物質の摂取が、健康に及ぼす影響について調査研究を行う。

②微生物定量法が主となっているビタミン類、特にナイアシンの測定に関して、食品形態に対応した機器分析法の導入を検討する。

③脂溶性ビタミンの新たな有用性を分子レベルで明らかにするために、生活習慣病に関与すると考えられるシグナル分子や転写因子の機能解析を行い、脂溶性ビタミンの作用機構を明らかにする。

④新規リン脂質の機能性及び新規機能性脂肪酸の有用性と安全性に関する評価研究を行う。

・低用量脂溶性ビタミンの長期摂取が、閉経後女性の骨及び脂質代謝に及ぼす影響を評価する。

・論文の系統的レビュー・メタ分析手法により、大豆イソフラボン以外の機能性食品成分の健康影響を実施し、より質の高い科学的根拠とする。

・ダイエット関連の健康食品に添加されているハーブ類の安全性を検討する。

b 「健康食品」に関する公正な情報の提供

①科学的根拠に基づく最新の健康食品情報並びに国内外で出されている安全性情報を継続的に蓄積し、健康食品の安全性・有効性情報としてホームページ上で公開する。データベース化した有害事例情報については、その特徴を解析し、類似した健康被害の発生防止に資する新たな情報として公開する。

②栄養士会等の関連団体との連携を図ることにより、特別用途食品・栄養療法エビデンス情報に新規情報を追加してさらに充実させる。また、継続的かつ効率的にデータベースが維持管理できる体制を整備する。

③NRなどのサプリメントアドバイザーを支援する情報提供ツールを作成し、消費者に健康食品に関する正しい知識を普及させる取り組みを行う。

④ハイリスクグループによる健康食品の利用実態を調査し、健康被害の未然防止のための情報の作成と提供を行う。

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 研究能力の向上のための創造的研究の実施

・若手研究者による独創的で、次期中期計画において

発展的に展開し得る研究課題のシーズとなるような研究を、所内公募による競争的な環境の下で行う。その際、事前・事後の評価を行い、研究の質を確保する。

イ 効果的な栄養教育手法の開発

①内閣府における第 2 期食育推進計画策定に資するために、個人及び集団へのアプローチ・環境整備等を含む多面的食育展開法確立のための調査・研究を行う。

②人間ドック受診者を対象にしたコホート研究で、メタボリックシンドローム予防のための栄養教育法についての調査・研究を行う。

③高齢者の摂食・嚥下困難者に対する食介護法について調査・研究を実施し、その結果をワークショップ等で実務者への情報提供を行う。

④食育や栄養教育を推進する職能団体や自治体の事業に対し、効果的な食育や栄養教育に関する情報を提供しその活動を支援する。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

①研究成果については、できるだけ国際的な場での発表を目指し、査読付き学術論文 50 報以上、口頭発表 150 回以上を行う。その際、原著論文については、インパクトファクターが 2.0 以上の学術誌に、25 報以上掲載されることを目指す。

なお、若手研究者による優れた研究成果の発表に対しては、競争的な事前審査により課題を選定し、海外渡航費の付与を行う。

②研究成果に係る著書・総説・解説を年間 200 報以上行う。

③国民の健康増進に寄与するため、調査研究の成果を発表するための講演を 200 回以上行うほか、マスメディアによる報道が、50 件以上となるよう報道情報の収集に努める。

イ 知的財産権の活用

①知的財産権取得に適した研究について、その成果の学会及び論文発表の前に掘り起こしを行い、戦略性を持って年間 5 件程度の特許出願を行う。また当研究所の特許等に関する情報を、ホームページ上に公開し、民間企業等へ積極的に技術の紹介を行う。

②民間企業等との共同研究を年間 10 件程度行う。

ウ 講演会等の開催

①「日本人の食事摂取基準 (2010 年版)」の普及・啓発のための講習会等に講師を派遣するとともに、資料提供・企画支援を行う。

②一般向けの公開セミナー (第 12 回) を東京で開催する。研究で得られた成果を社会に還元するため、専門家向けのセミナーを他機関との連携による開催を含め 2 回程度行う。

③管理栄養士・栄養士等の研修や生涯教育のプログラムに対し、職員を積極的に派遣するとともに、連携も含めそれらのプログラムの企画等への支援を 3 回程度行う。

④外部からの電話やメールを介した問い合わせに適切に対応するとともに、問い合わせの多い事項についてはホームページ上の FAQ に反映させ、効率的な対応ができる体制の整備をさらに進める。

エ 開かれた研究所への対応

・オープンハウス（研究所公開）を実施し、運動実験施設等における体験コーナーや食事・体力診断等を含めて、当研究所の研究・業務内容をより多くの人々に身近に知ってもらえるよう努める。なお、平成21年度のアンケートで得られた広報活動が不十分であるという意見を踏まえ、より効果的な広報活動を行う。また、所内見学等に積極的に対応し、小学生や中高生が健康や栄養に関して高い関心を持ち、正しい知識が普及出来る取り組みを行う。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

ア 研究業務を効率的に実施するための効果的な人員・予算の調整・確保

①法律に基づく業務及び重点調査研究の担当部門に対して、効率的に特別研究員や研究補助員を配置するとともに的確な予算配賦を実施し、戦略的かつ効率的な研究に取り組み、着実な研究成果を求める。

②プログラム/センター内における調査研究業務に付随する事務的作業の効率化を促進するために事務部内の研究支援体制の充実を図る。

③運営費交付金をはじめ競争的資金などの予算について、各研究業務の進捗状況及び費用並びに新たな課題を勘案しながら柔軟に配賦を行うなど効果的な取り組みを行う。

イ 産学連携の推進

①民間企業、大学、他の研究機関等との間で、研究者の相互交流を促進し、研究技術の交換、施設・設備の共同利用をより積極的に推進する。

ウ 将来の研究人材の育成

①連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員等を年間100名程度受け入れるとともに、当研究所の研究員を大学院や関係機関等に年間30名程度派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

②連携大学院について、引き続き拡大を図るとともに兼任教員を派遣し、互いの強みを活かした研究協力を行う。

③流動研究員制度や連携大学院制度を活用し、博士課程修了者等の若手研究者や大学院生を積極的に受け入れることにより、将来の研究人材の育成に資するとともに、研究所の研究機能の強化を図る。

エ 施設・設備の有効活用

①測定室、RI室、動物飼育室、運動トレーニング室等の各プログラムで共同で使用する施設・設備については、効果的に研究ができるような環境を確保する。

②「独立行政法人国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に従い、当研究所の施設・設備を利用して、他研究機関の研究者・運動指導者と共同して運動による健康増進効果に関する共同研究を実施する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

ア 健康・栄養調査の効率的実施

①国民健康・栄養調査の集計業務については、調査票

の受理後、7ヶ月以内に厚生労働省へ集計結果を提出できるよう、正確かつ効率的に実施する。

②データ収集に携わる行政の担当者等に対して、技術講習、情報提供、研修教材等の提供、標準的な調査ツールの提供などを通じて、積極的な技術支援を行う。また、健康・栄養調査の効率化を目指した専用ソフト（名称：食事しらべ）を更新して、希望する自治体へ配布し、調査の全体の効率化も目指す。

イ 特別用途食品及び収去食品等の分析

①消費者庁の特別用途表示の許可等に関わる申請に基づく試験業務を期間内に実施するとともに、そのヒアリングに適切に対応する。

②消費者庁が収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の分析業務を期間内に実施する。

③栄養表示基準における栄養成分の分析法について、より適切な分析手法の検討を行う。また、試験検査機器の有効利用及び整備の充実を図る。

④登録試験機関間の精度管理に関する試験を引き続き実施する。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

ア 社会的・行政ニーズの把握

①社会的ニーズを把握するため、健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等との意見交換会を年6回程度実施し、連携を強化する。とくに、当研究所は国民生活に密着した分野を対象としており、国民に研究成果を還元することが重要であることから、第一線で活躍している管理栄養士等から、具体的なニーズ等の把握に努める。

②行政ニーズを適時把握するために、厚生労働省生活習慣病対策室・食品安全部、消費者庁食品表示課、内閣府食育推進担当等と情報・意見交換を行い、研究・業務等に公正中立な立場で適正に反映させる。

③国、地方自治体、国際機関等からの技術的な協力依頼に応えるとともに、行政ニーズを把握するため、各種審議会、検討会の専門委員等として職員を積極的に派遣する。

イ ホームページを活用した国民ニーズの把握

・国民、栄養専門職等からの意見、要望等を広く効率的に把握するため、「健康・栄養フォーラム」に加えて、新たなインターネット上での取り組みを行う。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア地域における学術的ネットワークの構築

①アジア諸国との間で、栄養学研究の発展につながる共同研究及び人材育成を積極的に行う。研究交流を推進する観点から、国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業を活用し、年間2名（中国1名、マレーシア1名を予定）の若手研究者を受け入れる。また、フォローアップ共同研究助成事業により、これまで受け入れた研修生との共同研究や情報提供などを引き続き推進する。

②WHO等との協力関係を強化し、関連する会議に研究員を派遣する。

③アジア諸国における栄養士制度・栄養士養成の現状

について調査・検討を行う。

④WHO研究協力センターとしての申請手続きを行ったところであり、アジア西太平洋諸国へのニーズに沿った協力活動の充実を図る。

⑤当研究所の研究成果、わが国の栄養・運動施策上の重要なガイドライン等について、英語版ホームページ上での情報発信に努め、海外からのニーズに的確かつタイムリーに応える。

イ 産学連携による研究成果等の社会還元

①健康・栄養や食品開発等に関連する研究機関、民間企業等との共同研究や受託研究、特許等の実用化等により、当研究所の研究成果やノウハウを具体的な商品開発やサービスを通じて、社会に還元できるよう努める。

②宇宙航空研究開発機構（JAXA）と連携して立ち上げた「機能性宇宙食研究会」を基盤として産学連携の強化を図るとともに、機能性宇宙食の開発に着手する。

(4) 栄養情報担当者（NR）制度に関する事項を達成するための措置

①NRは、平成21年度までに4,093名を輩出している。NRのスキルアップを図るとともに、NRとして求められるニーズに応じた最新の情報提供等を行うため、全国6カ所以上で研修会を実施する。

②NR認定試験等は外部有識者の協力を得て、適正かつ公正に実施する。また、管理栄養士養成施設等からのNR養成講座指定の要望に対して、適切な対応・認定を行う。

③関係団体と定期的な意見交換を行うなどNR制度への研究所の関与、認知度の向上及び職域の拡大のための具体的な取り組みを実施し、NRへの支援強化を図る。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 総合的な情報発信及び対外的な業務の推進

・情報センターにおいて、所内各プログラムにおける研究成果及び研究所内外の関連情報を集約・精査し、国民が適切な運動・食生活を実践するために必要な情報提供を引き続き積極的に行う。

(2) ホームページによる活動状況の配信

・当研究所の活動内容・成果等をホームページやメールニュースを介して引き続き積極的に配信する。またホームページの掲載内容を整理しつつ、最新情報の追加更新に努める。

(3) 研究・業務実績の情報提供

・当研究所の活動及び研究業績を年1回研究報告として刊行する。また研究所のプロジェクト紹介や研究成果を、『健康・栄養ニュース』を介して年4回(季刊)刊行し、ホームページ上で公開するとともに、電子媒体による配信を行う。

(4) ホームページ等を活用した積極的な情報開示

・ホームページ等を活用して、当研究所の研究成果や関連情報、研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示を積極的に行う。

第2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な組織運営のための執行体制の強化

①効率的な組織運営を行うため、所内の各会議・委員会の役割を明確にし、その円滑な運営を目指す。

②以下の常設の会議及び委員会を、定期的にまたは必要に応じて臨時に開催し、研究業務の円滑な推進を図る。

- ・幹部会議
- ・運営会議
- ・研究企画委員会
- ・研究倫理審査委員会
- ・利益相反（COI）委員会
- ・所内セミナー

③研究所内の情報共有機能の強化を目指して、上記会議・委員会等の内容及び必要な情報等について、すみやかに所内LANにより研究所内に周知を図る。

(2) 研究の企画及び評価機能の強化

①研究内容の相互理解と国内外の最新の研究成果等を知る機会が持てるよう、研究所セミナーを毎月1回開催する。

②研究企画委員会（プログラムリーダー/センター長会議）を定期的に開催する等により、研究部門内の相互の意志疎通を図るとともに連携体制を強化し、戦略的な取り組みを推進する。

(3) 円滑な組織運営のための業務の進捗管理及び評価

①各プロジェクトにおける研究及び業務については、それらを総括するプログラムリーダーが進捗状況等について、研究企画委員会や運営会議で報告を行う。

なお、必要に応じて役員はプログラムリーダーに進捗状況等の説明を求め円滑な組織運営や業務の進捗管理に努める。

②研究所セミナー等において、各プロジェクトにおける研究の進捗、成果を報告するとともに評価を行う。さらにプログラムリーダーからの報告会（年2回）及びプロジェクトリーダーからの報告会（年1回）を所内公開で行う。

③所内LANを活用し、業務の進捗状況管理を行うとともに、各プログラム・センター間、事務部門との情報の共有を促進する。

(4) 情報公開による透明性の確保

・独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号）に則り、文書を適正に管理するとともに、適正な情報公開を行う。

(5) 積極的な外部資金の獲得及び資源の有効活用

・競争的研究資金や受託研究など外部資金の積極的獲得に取り組むとともに、経費の節減や研究所が所有する設備等の有効利用を推進する。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な調査研究業務を実施するための組織の最適化

①第2期中期計画を遂行するため、各部門における常

勤職員の人件費を含めたコスト管理及び研究業務について経営的視点の導入による効率的な事業実施のために、組織のあり方の検討や必要に応じて見直しを実施する。

②健康食品の安全性・有効性情報データベース、特別用途食品・栄養療法エビデンス情報の2つのデータベースの維持管理と内容の充実を図るため、関連機関との連携をさらに強める取り組みを行う。

(2) 他機関との連携・交流による組織の活性化

・国内外の民間企業、大学、他研究機関との研究協力を推進し、研究員等を100名程度受け入れるとともに、研究所研究員の派遣を30名程度行うことにより、人材養成及び資質の向上、組織の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点調査研究・業務等を推進するための適正な人員配置

①重点的に行う調査研究及び法律に基づき着実に実施すべき業務については、重点プロジェクトとして研究補助員等を適切に配置するなど効果的な運用を行い、研究・業務の推進を図る。

②一部の職員への過重な負担とならないよう、研究・業務等の適正配分に努めるとともに、必要に応じて見直しを行い、健康の維持・増進につながる職場環境づくりを目指す。

(2) 研究員の業務の適正な評価

①大学、民間企業等との多様な形態の連携が可能となるよう、起業を含め、民間企業、団体等との兼業についても、当研究所の目的、理念に合致したものについては積極的にを行い、研究成果の社会還元を促進する。

②各研究員の個人業績及び各プロジェクトの実績を適正に評価し、昇給・昇任等に反映させる。

(3) 有能な研究員の登用

①「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、研究員の採用にあたっては、引き続き原則公募制、任期付の採用を行う。

②任期付研究員については、任期中の実績評価を適正に行い、任期を付さない職員としての採用を検討する。任期付研究員の採用にあたっては、流動化計画に則る一方、当研究所の長期的な展望との均衡を図りつつ、研究や業務の性質、行政及び社会的ニーズに応じて、柔軟な運用を行う。

③女性研究員の採用を積極的に行うとともに、研究業務に従事しやすい環境づくりとして、引き続きフレックスタイム制の活用をはじめ、産休や育児休業等の各種制度の活用を進める。

(4) 事務職員の適正な評価

・事務職員についても、あらかじめ自己の達成目標を設定させるとともに、達成目標を含む業務全般に対しての自己評価を行う人事評価制度に基づき、個人面接を行い、直属上司及び総括上司の二段階評価を実施する。評価の結果は、昇給・昇任等に反映させる。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

(1) 事務業務の効率化

・業務の効率化を図るため、各種事務手続きの簡素化、迅速化、電子化を図るとともに、業務内容を見直し、外部委託が可能な業務については、費用対効果を勘案しつつ業務委託を推進する。

(2) 事務職員の資質向上

・事務職員の資質向上を図るため、業務上必要とされる知識（知的財産、安全管理、会計・契約等）の技術取得ができるよう、自己啓発や能力開発のための研修に積極的に参加させる。また、職員が働きやすく自己能力が最大限発揮できるよう、職場環境の整備を図る。

(3) 業務システムの効率化

・業務の効率化を推進するため情報総括責任者（CIO）を中心に業務・システムの最適化・効率化を図る。

5. 評価の充実に係る事項を達成するための措置

(1) 内部評価の実施

・各プログラム／センターの報告会を年2回、全プロジェクトの報告会を年1回行い、それらを踏まえて中間及び年度の内部評価を実施する。中間評価結果に基づき、年度途中において研究業務を必要に応じて見直し、効果的な実施につなげる。

(2) 外部評価の実施

・外部有識者による評価委員会については、平成22年度における当研究所の主要な研究業務の進捗状況、成果の社会への還元、将来の発展性という観点から、また研究所の組織運営に関しては、とくにより良い研究環境の構築という視点から、評価（事後評価）を受ける。

また、平成23年度計画についても外部評価委員による事前評価を受ける。

(3) 評価結果の公表

①内部及び外部評価の結果はホームページ上で公表するほか、評価結果の内容についてはプログラム、プロジェクトリーダーの範囲にとどまらず、非常勤職員を含めた全員に結果を伝え、研究所に求められている方向性や課題等の共通理解を促し、研究及び業務の内容改善等につなげる。

②理事長等役員及び管理職は、これらの評価結果を踏まえ、予算や人材等の研究資源の配分等に反映させ、調査・研究活動を効率・活性化させる。

(4) 研究業績等の自己点検及び評価

①各研究員においては、社会及び当研究所で求められている自らの役割を充分認識した上で、当該年度における自らの調査研究及び業務の成果について点検を行う。その際、成果を客観的に整理・分析するために、所内LANによる「業績等登録システム」を活用する。

②各研究員の評価は、人事評価マニュアルに基づき、主にプログラム内での貢献及び十分な成果の達成という視点から各プログラムリーダー／センター長、研究企画評価主幹及び理事長が行う。なお、任期付研究員については、任期中の実績評価を行い、その結果をその後の採用等に反映させる。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

①一般管理費（運営費交付金を充当して行う事業に係

るもの。人件費は除く。)については、高熱水料等の削減に努め、平成 17 年度予算に比べ 10 % (対 21 年度比 2 %) の削減を図る。

②人件費(退職手当及び法定福利費等を除く。)については、適正な人事配置に努め、平成 17 年度予算実績に比べ 5 % 以上の削減を図る。

③業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、業務の効率化、コストの削減に努め平成 17 年度予算に比べ 5 % 以上の削減を図る。

第 3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

(1) 外部研究資金の獲得

①厚生労働省、文部科学省等の各府省や科学技術振興機構等の機関が実施する公募型研究への課題の応募を積極的に行う。その際、当研究所の目的等を勘案して、競争力の高い研究課題であるか、また、他の研究機関等との共同研究の中核であるかを重視する。

②健康・栄養に関する調査・研究及び国や民間企業等からの受託研究や共同研究、その他の業務については、当研究所の目的やその後の発展性及び交付金事業として行う研究を勘案しながら、それらに合致するものについては積極的に受け入れ、自己収入の増加を図る。なお、外部研究資金の獲得にあたっては、過去 2 カ年平均の 80 % 以上の件数の確保を目標とする。

(2) 知的財産の活用等による自己収入の確保

①知的財産については、その出願や維持に係る費用を勘案しながら、実施につながる可能性の高いものについて必要な維持を行い、自己収入につなげる努力を行う。

②研究成果等の社会還元を目的に出版(研究所監修による書籍、マニュアル、テキスト等)を行うことにより、自己収入の確保につなげる。

③施設の開放にあたっては、自己収入の確保という点ではなく、ヒトを対象とした研究への参加、地域住民の健康づくりという視点を踏まえて研究所設備の効率の利用を推進する。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

(1) 効率的な資金の運用・管理

・「無駄削減取組目標」のうち、特に無駄削減に向けた職員の意識改革、行政コストの節減・効率化に掲げる事項に係る取り組みを積極的に実施し、予算執行状況の把握とともに、これら取り組み状況について、運営会議で評価を行う。

(2) 研究業務の集約化

・各プログラムにまたがる研究の実施や、施設整備、スペース等の共同利用により、人的資源、コスト削減につなげる。

データ入力、検体の定期検査などの人的コスト削減につながるものについてはアウトソーシングを推進する。また契約にあたっては原則一般競争入札を行う。

第 4 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙 2 のとおり

2. 収支計画

別紙 3 のとおり

3. 資金計画

別紙 4 のとおり

第 5 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置

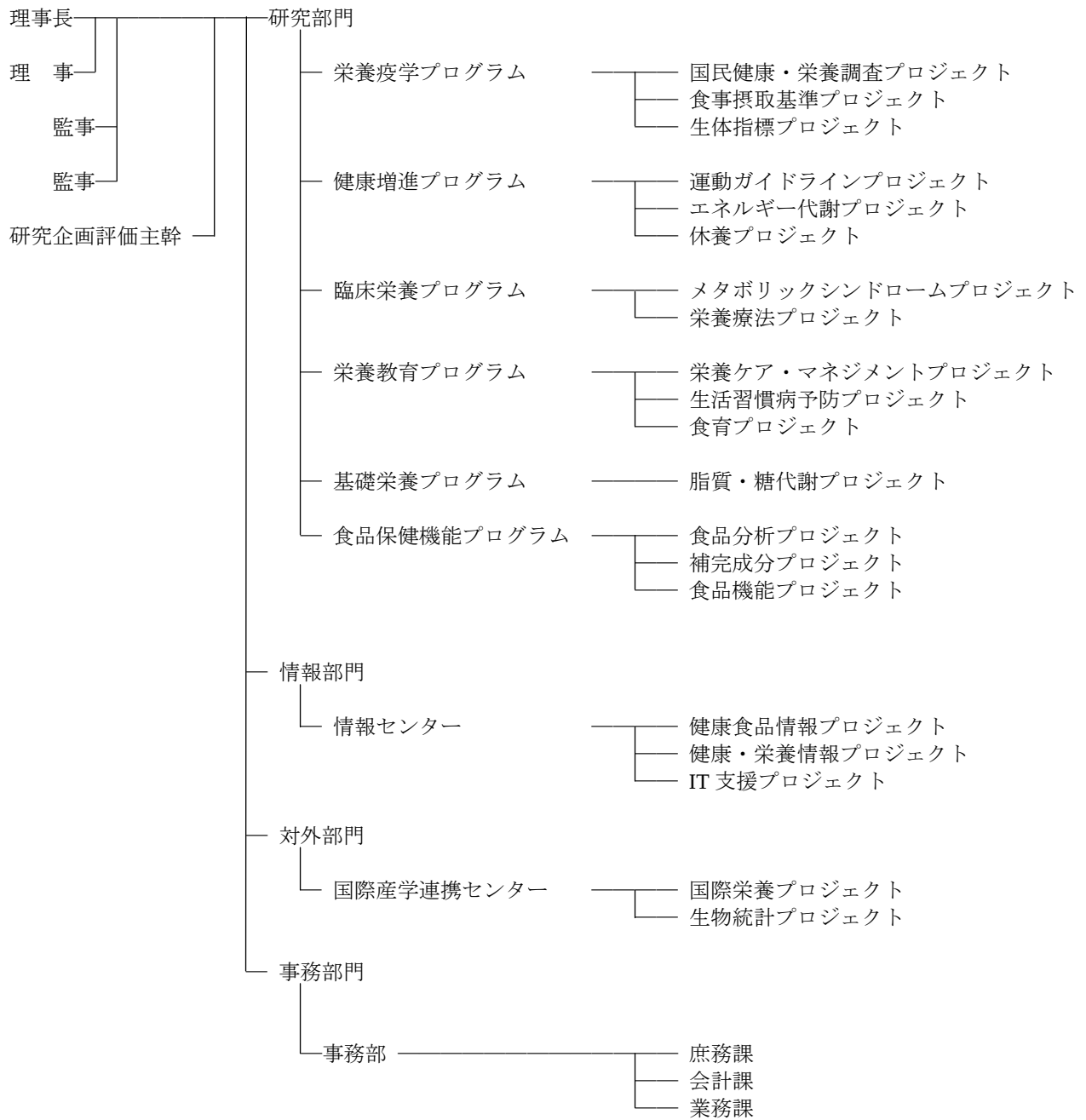
(1) セキュリティの確保

・情報セキュリティの確保に努め、「セキュリティ対策実施手順書」の見直しなど、現状に即したより適切な対応に努める。

第 6 平成 22 年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

別紙 5 のとおり

(別紙 1)



(別紙 2)

年度計画（平成 22 年度）の予算

(単位：百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	739
手数料収入	6
受託収入	59
栄養情報担当者事業収入	30
雑収入	4
計	838
支出	
人件費	543
うち 基本給等	510
退職手当	33
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	85
業務経費	115
国民健康・栄養調査に関連する サーベイランスプログラム	10
食品収去試験等業務	5
栄養疫学プログラム	14
健康増進プログラム	14
臨床栄養プログラム	6
基礎栄養プログラム	10
食品保健機能プログラム	8
国際栄養協力事業	8
健康食品安全情報ネットワーク事業	21
健康栄養情報事業	18
受託経費	95
特別用途食品表示許可試験費	6
受託経費	59
栄養情報担当者事業経費	30
計	838

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 3)

平成 22 年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	
経常費用	838
人件費	543
うち 基本給等	510
退職手当	33
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	85
業務経費	115
国民健康・栄養調査に関連する サーベイランスプログラム	10
食品収去試験等業務	5
栄養疫学プログラム	14
健康増進プログラム	14
臨床栄養プログラム	6
基礎栄養プログラム	10
食品保健機能プログラム	8
国際栄養協力事業	8
健康食品安全情報ネットワーク事業	21
健康栄養情報事業	18
受託経費	95
特別用途食品表示許可試験費	6
受託経費	59
栄養情報担当者事業経費	30
減価償却費	0
収益の部	838
運営費交付金収益	739
手数料収入	6
受託収入	59
栄養情報担当者事業経費	30
雑収入	4
資産見返物品受贈額戻入	0
資産見返運営費交付金戻入	0
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

〔注記〕当法人における退職手当については、役員退職手当支給規程及び職員退職手当規程に基づき支給することとなるが、その全額について運営費交付金を財源とするものと想定している。

（注）単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 4)

平成 22 年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	838
業務活動による支出	838
投資活動による支出	0
資金収入	838
業務活動による収入	838
運営費交付金による収入	739
手数料収入	6
受託収入	59
栄養情報担当者事業経費	30
雑収入	4
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙5)

平成22年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

平成22年 4月	
5月	
6月 13日(日) 13日(土)～14日(日) —	○ 第7回独立行政法人国立健康・栄養研究所栄養情報担当者認定実施試験 ○ 第5回食育推進全国会議(佐賀県) ○ 「平成21年度業務実績報告」を厚生労働省独立行政法人評価委員会に、「平成21年度財務諸表等」を厚生労働大臣にそれぞれ提出。 ○ 「健康・栄養ニュース」(第32号)の発行
7月 —	○ 第7回独立行政法人国立健康・栄養研究所栄養情報担当者認定試験合格者発表
8月	
9月 —	○ 「健康・栄養ニュース」(第33号)の発行 ○ 研究所一般公開(オープンハウス)
10月	○ 栄養情報担当者研修会
11月 —	○ 栄養情報担当者研修会 ○ 第8回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験
12月 — —	○ 「健康・栄養ニュース」(第34号)の発行 ○ 第8回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験合格発表
平成23年 1月	○ 第12回研究所主催一般公開セミナー・研究所公開業務報告会(東京)
2月 — —	○ 独立行政法人国立健康・栄養研究所指定栄養情報担当者養成講座の指定 ○ 第8回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験実施要綱の公表
3月 — — —	○ 外部評価委員会 ○ 平成23年度計画を厚生労働大臣へ提出 ○ 「健康・栄養ニュース」(第35号)の発行

- ◎ 運営会議は8月を除く毎月第2木曜日に開催する。
◎ 健栄研セミナーは原則、毎月第3木曜日に開催する。
◎ 専門家向け公開セミナーを東京及び地方にて開催する。
※ 実施日については、諸般の都合により変動があり得る。

4. 平成 22 年度予算額

支出

(単位：千円)

事 項	平成 21 年度 予 算 額	平成 22 年度 予 算 額	増△減額
人件費	550,901	542,861	▲8,040
基本給・諸手当	461,335	456,630	▲4,705
共済組合負担金	47,468	46,983	▲485
児童手当拠出金	506	501	▲5
労働保険料	5,674	5,597	▲77
退職手当	35,918	33,150	▲2,768
一般管理費	82,531	80,529	▲2,002
業務経費	155,558	115,347	▲40,211
栄養疫学プログラム	27,409	21,232	▲6,177
国民健康・栄養調査プロジェクト	11,409	14,171	2,762
食事摂取基準プロジェクト	9,500	3,061	▲6,439
生体指標プロジェクト	6,500	4,000	▲2,500
健康増進プログラム	25,202	19,171	▲6,031
運動ガイドラインプロジェクト	11,900	9,341	▲2,559
エネルギー代謝プロジェクト	12,192	9,330	▲2,862
休養プロジェクト	1,110	500	▲610
臨床栄養プログラム	8,632	10,355	1,723
メタボリックシンドロームプロジェクト	8,132	5,905	▲2,227
栄養療法プロジェクト	500	4,450	3,950
栄養教育プログラム	8,910	6,146	▲2,764
栄養ケア・マネジメントプロジェクト	2,000	1,380	▲620
生活習慣病予防プロジェクト	4,100	2,828	▲1,272
食育プロジェクト	2,810	1,938	▲872
基礎栄養プログラム	9,351	7,093	▲2,258
脂質・糖代謝プロジェクト	9,351	7,093	▲2,258
食品保健機能プログラム	16,000	13,700	▲2,300
食品分析プロジェクト	12,000	10,600	▲1,400
補完成分プロジェクト	2,000	1,300	▲700
食品機能プロジェクト	2,000	1,800	▲200
創造的研究費	12,500	3,643	▲8,857
情報センター	34,584	22,625	▲11,959
健康食品情報プロジェクト	17,634	12,370	▲5,264
健康・栄養情報プロジェクト	3,300	1,232	▲2,068
IT 支援プロジェクト	13,650	9,023	▲4,627
国際産学連携センター	12,970	11,382	▲1,588
国際栄養プロジェクト	10,054	9,370	▲684
生物統計プロジェクト	916	632	▲284
NR・セミナー業務	2,000	1,380	▲620
受託経費	91,723	99,066	7,343
特別用途食品表示許可試験費	6,364	6,037	▲327
受託経費	45,228	58,662	13,434
栄養情報担当者事業経費	35,500	30,178	▲5,322
その他	4,631	4,189	▲442
支出計	880,713	837,803	▲42,910

収入

(単位：千円)

事 項	平成 21 年度 予 算 額	平成 22 年度 予 算 額	増△減額
運営費交付金	788,990	738,737	▲50,253
手数料収入	6,364	6,037	▲327
受託収入	45,228	58,662	13,434
栄養情報担当者事業収入	35,500	30,178	▲5,322
その他の収入	4,631	4,189	▲442
収入計	880,713	837,803	▲42,910

5. 平成 22 年度所内研究セミナー

期日	演 題	所 属
2010/4/15	一日の身体活動量における歩行の寄与(研究報告)	田中 茂穂 (健康増進プログラム)
	カラムスイッチング法を用いた食品中ビタミン D の HPLC 分析(研究報告)	竹林 純 (食品保健機能プログラム)
	hfnet を活用した健康食品の安全性評価(研究報告)	梅垣 敬三 (情報センター)
5/20	二重標識水と加速度計で評価した中学生の身体活動量	高田 和子 (健康増進プログラム)
	閉経期女性における大豆イソフラボンサプリメントの骨代謝マーカーへの効果—無作為化比較試験の系統的レビュー及びメタ分析	卓 興鋼 (情報センター)
	SCOP (SaKu Control Obesity Program) に於ける遺伝子多型解析について	山田 晃一 (栄養教育プログラム)
6/10	上手にとりたい休養、睡眠	内山 真 (日本大学医学部精神医学講座)
6/17	脳卒中の原因としての炎症	千葉 剛 (基礎栄養プログラム)
	青果物に対する大きさの主観的な認識について	野末 みほ (栄養疫学プログラム)
	高脂肪食により発症する脂肪肝の予防法	山崎 聖美 (基礎栄養プログラム)
7/6	Institution of Food, Nutrition and Human Health (IFNHH) の紹介と Human Nutrition and Physiology: An update on bone, gut and immune health research	Marlena Kruger (Massey University Institute of Food, Nutrition and Human Health (IFNHH))
7/15	メタボリックシンドロームを中心とした代謝疾患の疫学研究—現場の方に提供できるエビデンスを—	松下 由実 (独立行政法人国立国際医療研究センター 国際保健医療研究部 国際疫学研究室長)
	在宅高齢者の家事能力追跡調査から	饗場 直美 (栄養教育プログラム)
	インスリン抵抗性とビタミン A 輸送タンパク質	山内 淳 (栄養疫学プログラム)
	糖尿病の食事療法	江崎 治 (基礎栄養プログラム)

10/21	「日本食品標準成分表 2010」について	石見 佳子 (食品保健機能プログラム)
	新規公開データベース 特別用途食品・栄養療法エビデンス情報について	笠岡(坪山) 宣代 (国際栄養プロジェクト、(併)情報センター)
	骨格筋のインスリン感受性調節における血管内皮細胞のインスリンシグナルの役割の解明	窪田 哲也 (臨床栄養プログラム)
	男子学生短距離選手の生活環境等の違いが強化合宿による主観的疲労度及び血液検査値の変動に及ぼす影響	熊江 隆 (健康増進プログラム)
	WHO の身体活動ガイドライン	Eddy Engelsman (WHO 本部運動・身体活動担当官)
11/25	食と健康に関する多角的脳研究	檀一平太 (自治医科大学医学部先端医療技術開発センター)
	LC/MS を用いたビタミン B 1 2 分析法の開発	松本輝樹 (食品保健機能プログラム)
	中枢の IRS-2 の糖代謝調節における役割の解明脳特異的 IRS-2 欠損マウスを用いて	井上真理子 (臨床栄養プログラム)
	サルコペニアの判定基準とその運動療法	宮地元彦 (健康増進プログラム)
12/16	運動によるエネルギー代謝亢進のメカニズム	三浦 進司 (基礎栄養プログラム)
	野菜・果物からの抗酸化物質摂取量の推算と抗酸化サプリメントとの比較	竹林 純 (食品保健機能プログラム)
	日本語の食感覚表現 ―官能評価・製品説明のための用語整理―	早川 文代 (食品総合研究所 食品物性ユニット)
	鮮度を見る ―感性と物理をつなぐ実験心理学―	和田 有史 (食品総合研究所 食認知科学ユニット)
2011/1/20	ターミナリア・ベリリカのラットおよびマウス脂質濃度および血糖値に及ぼす影響	永田 純一 (食品保健機能プログラム)
	国民健康・栄養調査の業務内容及び平成 21 年国民健康・栄養調査結果の概要	中出 麻紀子 (栄養疫学プログラム)
	パプアニューギニアにおける母子の栄養状態評価	三好美紀 (国際産学連携センター)

2/17	メタボリックシンドロームリスクを検出する内臓脂肪推定法の検討	森田 明美 (栄養疫学プログラム)
	地域在宅高齢者の食事	坪田 恵 (栄養疫学プログラム)
	日本が目指す人類未踏の超高齢社会 - 3つの挑戦と新たな医療の創造-	長谷川 敏彦 (日本医科大学 医療管理学教室)

平成 21 年度において、特別用途食品の許可表示取得のために提出されたものについて分析した結果は次のとおりである。分析方法等は健康増進法に記載されている。

分析担当者：山田和彦、永田純一、松本輝樹、竹林 純、小林 香、二井千日、佐賀加奈子、中村 礼、
矢野友啓、佐藤洋美、梅垣敬三、石見佳子、山内 淳

7. 海外出張

出張者氏名	所 属	出張国	出張期間	渡 航 内 容
徳留 信寛	理事長	トルコ・イスタンブール	H22. 4. 2-4. 7	5th international conference of asia pasific cancer control in istanbul
高田 和子	健康増進プログラム	韓国・釜山	H22. 4. 11-4. 22	小学生の肥満と身体活動に関する共同研究
朴 鐘薫	健康増進プログラム	韓国・釜山	H22. 4. 11-4. 22	小学生の肥満と身体活動に関する共同研究
西 信雄	国際産学連携センター	バヌアツ、パプアニューギニア	H22. 4. 19-4. 28	pacific food summit 2010 への参加、パプアニューギニア保健省アドバイザー倉辻忠俊先生との打ち合わせ
猿倉 薫子	栄養疫学プログラム	ベトナム・ホーチミン、ハノイ	H22. 4. 25-4. 29	共同研究打ち合わせ
村上 晴香	健康増進プログラム	カナダ・トロント、米国・ニューヨーク州	H22. 4. 28-5. 6	トロントリハビリテーションセンター研究所およびアメリカ高血圧学会 2010 にて情報収集
宮地 元彦	健康増進プログラム	米国・ニューヨーク州	H22. 5. 2-5. 6	アメリカ高血圧学会 2010 にて学会発表・情報収集
田中 茂穂	健康増進プログラム	カナダ・トロント	H22. 5. 4-5. 10	身体活動と健康に関する第3回国際会議への参加・発表
朴 鐘薫	健康増進プログラム	米国・メリーランド州、コロラド州	H22. 5. 31-6. 8	学会発表および研究の打ち合わせ
卓 興鋼	情報センター	中国・北京	H22. 5. 27-5. 30	情報収集・意見交換会
中出麻紀子	栄養疫学プログラム	米国・ミネソタ州	H22. 6. 8-6. 14	International Society for Behavioral Nutrition and Physical Activity での発表

三浦 進司	基礎栄養プログラム	米国・フロリダ州	H22. 6. 24-7. 1	第 7 0 回アメリカ糖尿病学会にて発表
森田 明美	栄養疫学プログラム	スウェーデン・ストックホルム、ノルウェー・ベルゲン	H22. 7. 9-7. 18	International Congress on Obesity 2010 への出席および研究発表、センター見学
河嶋 伸久	栄養疫学プログラム	スウェーデン・ストックホルム、ノルウェー・ベルゲン	H22. 7. 9-7. 18	International Congress on Obesity 2010 への出席および研究発表、センター見学
田中 茂穂	健康増進プログラム	スウェーデン・ストックホルム	H22. 7. 10-7. 17	International Congress on Obesity 2010 への参加・発表
西 信雄	国際産学連携センター	パプアニューギニア・ポートモレスビー、NUKU 郡	H22. 7. 11-7. 17	「パプアニューギニアの都市と農村における母子の体格と食事摂取状況の関連」に係る打ち合わせおよび調査地視察
三好 美紀	国際産学連携センター	パプアニューギニア・ポートモレスビー、NUKU 郡	H22. 7. 11-7. 17	「パプアニューギニアの都市と農村における母子の体格と食事摂取状況の関連」に係る打ち合わせおよび調査地視察
坪山 宣代	国際産学連携センター	スウェーデン・ストックホルム	H22. 7. 11-7. 17	第 1 1 回国際肥満学会での情報収集、研究打合せ、研究発表
西 信雄	国際産学連携センター	中国・北京	H22. 8. 13-8. 15	China Heart Congress & International Heart Forum Beijing 2010 への参加
永田 純一	食品保健機能プログラム	米国・メリーランド州	H22. 8. 21-8. 28	UJNR 2010 Annual Meeting
坪田 恵	栄養疫学プログラム	スウェーデン・ストックホルム	H22. 8. 26-9. 1	ESC congress 2010 への出席および研究発表
西 信雄	国際産学連携センター	グアム	H22. 9. 32-9. 25	Nutrition, Diet&Lifestyle:Scaling Up Action in the Pacific
千葉 剛	基礎栄養プログラム	カナダ・モントリオール	H22. 9. 23-9. 27	第 14 回国際 SHR シンポジウム

徳留 信寛	理事長	ドイツ・ベルリン	H22. 9. 30-10. 4	アスピリンと科学防衛に関する円卓会議
朴 鐘薫	健康増進プログラム	米国・カリフォルニア州	H22. 10. 7-10. 13	学会発表
田中 茂穂	健康増進プログラム	米国・カリフォルニア州	H22. 10. 7-10. 14	Obesity 2010 28th Annual Scientific Meeting（第28回北米肥満学会）への参加・発表
高田 和子	健康増進プログラム	米国・カリフォルニア州	H22. 10. 7-10. 16	Obesity 2010 への参加及び研究打ち合わせ
石見 佳子	食品保健機能プログラム	米国・イリノイ州	H22. 10. 8-10. 12	米国更年期学会シンポジウムに発表を伴うパネリストとして参加
卓 興鋼	情報センター	カナダ・トロント	H22. 10. 14-10. 20	ASBMR 2010 Annual Meeting に参加
東泉 裕子	食品保健機能プログラム	カナダ・トロント、米国・ワシントン D.C.	H22. 10. 15-10. 21	AEBMR2010 Annual Meeting, The 9th INSRS に発表および参加
三好 美紀	国際産学連携センター	パプアニューギニア・ポートモレスビー	H22. 10. 23-11. 3	「パプアニューギニアの都市と農村における母子の体格と食事摂取状況の関連」に係る現地調査地実施
高田 和子	健康増進プログラム	中国・南京	H22. 10. 28-10. 31	2010 Nanjing International Symposium on Children and Youth Fitness and Health
西 信雄	国際産学連携センター	韓国・ソウル	H22. 11. 22-11. 26	Conference on “2009 Korea National Health and Nutrition Examination Survey”、Joint International Symposium on “Women’s Health and Nutrition”
高田 和子	健康増進プログラム	オーストラリア・キャンベラ	H22. 11. 8-11. 18	形態計測精度管理の研修参加及び共同研究打ち合わせ

三好 美紀	国際産学連携センター	ベトナム・ハノイ	H22. 11. 20-11. 23	国際医療研究開発事業 「アジア開発途上国における糖尿病等の生活習慣病のデータベース構築に基づいた効果的対策としてのモデル構築に関する研究」に係る打ち合わせ
卓 興鋼	情報センター	中国・上海	H22. 11. 21-11. 24	上海地域における治験・臨床研究の実態調査に関する打合せ
永田 純一	食品保健機能プログラム	米国・ハワイ州	H22. 12. 14-12. 21	PacifiChem 2010 conference
三好 美紀	国際産学連携センター	ベトナム・ハノイ、 ホーチミン	H22. 12. 19-12. 23	国際医療研究委託事業に係る打ち合わせ
西 信雄	国際産学連携センター	フィリピン・マニラ	H23. 1. 4-1. 7	WHO 西太平洋事務局 (WPRO) との研究打ち合わせ
坪山 宣代	国際産学連携センター	フィリピン・マニラ	H23. 1. 4-1. 7	WHO 西太平洋事務局 (WPRO) との研究打ち合わせ
西 信雄	国際産学連携センター	韓国・オソン	H23. 3. 2-3. 4	韓国健康・栄養調査に関する視察
猿倉 薫子	栄養疫学プログラム	韓国・オソン	H23. 3. 2-3. 4	韓国健康・栄養調査に関する視察

8. 人事異動

発令年月日	異動内容	氏 名	所属名（転入、転出先）
H22.4.1	併任	石見佳子	食品保健機能プログラム 補完成分プロジェクトリーダー併任
H22.4.1	併任	西 信雄	栄養疫学プログラム 国民健康・栄養調査プロジェクトリーダー併任
H22.4.1	併任	田畑 泉	健康増進プログラムリーダー併任
H22.4.1	採用	猿倉薫子	栄養疫学プログラム 国民健康・栄養調査プロジェクト研究員（任期付）
H22.4.1	採用	中出麻紀子	栄養疫学プログラム 国民健康・栄養調査プロジェクト研究員（任期付）
H22.4.1	採用 (転入)	森 信二	事務部業務課長（事務部会計課長併任）
H22.4.1	採用 (転入)	伊藤健司	事務部会計課経理係長
H22.4.1	採用 (転入)	藤野信明	事務部庶務課庶務係長
H22.4.1	採用 (転入)	吉越臣宏	事務部庶務課主事
H22.5.13	退職 (転出)	吉村由紀夫	事務部付
H22.6.30	辞職 (転出)	藤野信明	国立感染症研究所
H22.7.1	併任	望月文明	事務部庶務課庶務係長
H22.10.1	採用 (転入)	高舘信行	事務部業務課調整係長
H22.10.1	配置換	橋本光彦	事務部庶務課庶務係長
H22.10.1	併任解除	望月文明	事務部庶務課庶務係長併任解除
H23.2.1	併任解除	森田明美	栄養疫学プログラム食事摂取基準プロジェクトリーダー併任解除
H23.2.1	併任・併任 解除	笠岡宜代	栄養疫学プログラム食事摂取基準プロジェクトリーダー・国際産学連携センター国際栄養プロジェクトリーダー併任・情報センター健康食品プロジェクト付併任解除
H23.2.1	配置換 併任解除	石見佳子	食品保健機能プログラム食品分析プロジェクトリーダー併任解除
H23.2.1	配置換	松本輝樹	食品保健機能プログラム食品分析プロジェクトリーダー（任期付）
H23.2.1	併任解除	梅垣敬三	情報センター健康食品プロジェクトリーダー併任解除
H23.2.1	配置換・ 併任	千葉 剛	情報センター健康食品プロジェクトリーダー（任期付）・基礎栄養プログラム脂質・糖代謝プロジェクト併任
H23.3.31	退職	饗場直美	栄養教育プログラムリーダー（神奈川工科大学）
H23.3.31	退職	水野正一	国際産学連携センター生物統計プロジェクトリーダー

発令年月日	異動内容	氏 名	所属名 (転入、転出先)
H 23.3.31	退職 (転出)	望月 文明	事務部庶務課長 (厚生労働省社会・援護局業務課長補佐)
H 23.3.31	退職 (転出)	高橋康大	事務部業務課 NR 担当係長・事務部業務課産学担当係長併任 (国立保健医療科学院総務部教務課研修・業務課研修第三係長)
H 23.3.31	退職 (転出)	澤栗 茂	事務部庶務課人事・厚生係長 (小樽検疫所総務課庶務係長)
H 23.3.31	退職 (転出)	庄野誠二	事務部会計課契約管理係長 (新潟検疫所小松空港出張所検疫業務係長)
H 23.3.31	退職 (転出)	三國良樹	事務部業務課主事・事務部庶務課併任 (近畿厚生局年金総務課係員)

9. 特別研究員

氏 名	所 属 部	期 間
河嶋 伸久	栄養疫学プログラム	H 22. 4.1～23.3.30
村上 晴香	健康増進プログラム	H 22. 4.1～23.3.30
朴 鍾薫	健康増進プログラム	H 22. 4.1～23.3.30
河合 智子	臨床栄養プログラム	H 22. 4.1～22.12.4
津田 治敏	食品保健機能プログラム	H 22.11.1～23.3.30

10. 名誉所員

氏 名	授与年月日	在職当時の職名
印南 敏	H 10.4.1	食品科学部長
宮崎 基嘉	H 10.4.1	基礎栄養部長
宇津木良夫	H 10.4.1	病態栄養部長
山口 迪夫	H 10.4.1	食品科学部長
市川 富夫	H 10.4.1	応用食品部長
伊東 蘆一	H 10.4.1	老人健康・栄養部長
板倉 弘重	H 10.4.1	臨床栄養部長
池上 幸江	H 11.4.1	食品科学部長
小林 修平	H 11.7.1	所長
江指 隆年	H 12.4.1	応用食品部長
澤 宏紀	H 13.4.1	所長
戸谷 誠之	H 13.4.1	母子健康・栄養部長
樋口 満	H 15.4.1	健康増進研究部長
岡 純	H 16.4.1	応用栄養学研究部長
増田 和茂	H 16.8.1	理事
田中 平三	H 17.4.1	理事長

11. 客員研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
佐々木 敏	栄養疫学プログラム	H 22.4.1～23.3.31	栄養疫学研究
山本 祐司	栄養疫学プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病におけるレチノール結合タンパク質の動態解析
由田 克士	栄養疫学プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食事調査法の研究
家光 素行	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
真田 樹義	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
田中 千晶	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	子どもおよび成人における身体活動量の変動要因
寺田 新	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	運動と栄養による骨格筋代謝機能向上のメカニズム解明
引原 有輝	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	身体活動量の評価法の検討
二見 順	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	ヒューマンカロリメーターによるエネルギー消費量測定に関する研究
吉武 裕	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	健康寿命の維持に必要な身体活動量および体力水準について
谷本 道哉	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
福 典之	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
緑川 泰史	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	エネルギー消費量の変動要因に関する基礎的研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
山元 健太	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
大島 秀武	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	加速度計を用いた身体活動量の評価に関する研究
大森 豊緑	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	効果的な健康づくり手法の研究開発
田畑 泉	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	身体活動・運動と健康増進について
門脇 弘子	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	肥満・糖尿病予防と治療のために食後高血糖の改善を得る食事内容の確立
野田 光彦	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	メタボリックシンドロームにおける栄養摂取と膵島の代謝・インスリン分泌の関連に関する研究
原 一雄	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究
石渡 尚子	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	エクオール産生性と食習慣は冷え性を感じている日本人更年期女性の体温調節機能に影響を与えるか
金田 雅代	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食育における栄養教諭の役割に関する研究
渡邊 昌	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	人間ドッグコホートを使った生活習慣病発症にかかる要因に関する研究
亀井 康富	基礎栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明
高橋真由美	基礎栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	日本人糖尿病患者に於ける食事、運動量の評価のための予備的研究
渡辺 光博	基礎栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	分子制御によるメタボリックシンドロームへのアプローチ
太田 篤胤	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	骨粗鬆症予防における栄養学的研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
呉 堅	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食品機能性成分が骨代謝、脂質代謝に与える影響に関する研究
藤井 康弘	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	中高年者の健康に関する栄養学的研究
王 新祥	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	骨粗鬆症の予防・治療を目的とした天然素材の検索に関する研究
山田 和彦	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食品の栄養表示・健康表示に関する調査研究
矢野 友啓	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食品機能性成分の抗がん作用の解析
梅國 智子	情報センター	H 22.4.1～23.3.31	W e b 上の栄養情報教育に関する研究
江指 隆年	情報センター	H 22.4.1～23.3.31	栄養素の栄養機能に関する研究
久保 和宏	情報センター	H 22.4.1～23.3.31	脂質の機能特性に関する研究
橋本 洋子	情報センター	H 22.4.1～23.3.31	子供のサプリメント使用に関する調査研究
溝上 哲也	国際産学連携センター	H 22.4.1～23.3.31	ビタミンDと慢性疾患に関する疫学研究

12. 協力研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
高市 麻貴	栄養疫学プログラム	H 22.4.1～23.3.31	栄養全般が糖尿病、代謝に与える影響につき、検討すること
荒井 裕介	栄養疫学プログラム	H 22.4.1～23.3.31	健康・栄養調査の解析評価に関する研究
鈴木 望	栄養疫学プログラム	H 22.4.5～23.3.31	運動と食事による生活習慣病予防に関する大規模疫学研究
後藤 温	栄養疫学プログラム	H 22.12.20～23.3.31	糖尿病・生活習慣病予防に関する大規模疫学研究
片山 利恵	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
上野 優子	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	エネルギー消費量の評価について
高井 恵理	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	健康増進に対する運動効果に関する研究
安田 剛	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	フィットネスクラブにおけるサービス・プログラム開発における指導・研究
大森 由実	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
島田 美恵子	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
高山 光尚	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
荒尾 裕子	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病予防に対する保健指導（特に運動・身体活動増加）の効果に関する研究
河野 寛	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
鈴木 洋子	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	視床下部性肥満マウスの病態に関する研究
別所 京子	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	エネルギー消費量に関する研究
曹 振波	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	健康づくりのための運動基準・エクササイズガイド改定
呉 泰雄	健康増進プログラム	H 22.4.1～23.3.31	身体活動および身体活動強度が換気性作業閾値（VT）に及ぼす影響の検討
高崎 尚樹	健康増進プログラム	H 22.4.20～23.3.31	生活習慣病改善のための保健指導（特に運動に主眼を置く）に関する、実施方法・事業推進手法に関する調査・研究
濱崎 秀崇	健康増進プログラム	H 22.8.9～23.3.31	生活習慣病と運動療法の効果について
森本 友紀恵	健康増進プログラム	H 22.10.1～23.3.31	特定健診・保健指導に関する研究
窪田 直人	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	メタボリックシンドロームプロジェクト（各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究）
松下 由実	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	メタボリックシンドロームプロジェクト（各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究）
眞鍋 一郎	臨床栄養プログラム	H 22.4.1～23.3.31	エネルギー代謝の分子機構
川上 純子	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	高齢者の食介護に関する研究
山田 五月	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	食育の効果的な展開法に関する研究
上杉 宰世	栄養教育プログラム	H 22.4.1～23.3.31	日本人の「食生活」、「食育」に関する社会、文化的な認識領域を把握し、食生活や健康に対する認識が個人またはグループによってどのように異なるかの解明
千葉 大成	食品保健機能プログラム	H 22.4.1～23.3.31	柑橘系フラボノイドに着目した骨粗鬆症予防に関する研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
吉本 弥生	情報センター	H 22.9.1～23.3.31	食品安全に関する情報の伝達 メカニズムの解明
細川 裕子	国際産学連携センター	H 22.4.1～23.3.31	メタボリックシンドロームを 対象として実食型フードモデ ルの有効性の検討
桑木 泰子	国際産学連携センター	H 22.4.1～23.3.31	諸外国における栄養士制度に 関する研究
南里 明子	国際産学連携センター	H 22.4.1～23.3.31	ビタミン D と慢性疾患に関す る疫学研究
菊池 有利子	国際産学連携センター	H 23.2.1～23.3.31	栄養士に関する日米比較研究